

薮屋北遺跡発掘調査概要・I

2004年3月

大阪府教育委員会



SK940馬全身骨格の出土状況



SE590出土注口付甕



SE494出土木栓付甕



古墳時代中期 石製品・鉄製品

はじめに

四條畷市・寝屋川市一帯に広がる叢良郡桑里遺跡は、古墳時代を中心に様々な性格の遺構が錯綜する巨大な遺跡です。この南端部分に大阪府土木部による下水道整備事業の一環としてなわて水環境保全センターの建設が計画されました。これに伴う2ヶ年にわたる予定地の試掘調査の実施によって、この地には古墳時代中期の巨大な集落跡が展開していること、馬歯や馬骨や馬具の出土によって、『日本書紀』などに記された著名な河内の馬飼との関連が推測されました。

このなわて水環境保全センターの予定地に包蔵されている遺跡の固有の性格を考慮し、ここを新たに葦屋北遺跡として周知し、2001年(平成13)度から発掘調査を実施しております。ここに約5400㎡の面積をもつ最初の調査区の概要報告書を刊行いたします。

巨大な集落遺跡の一隅に当たり、溝や住居跡、井戸などの遺構、朝鮮半島から移入された土器など、葦屋北遺跡の性格をうかがわせる遺構・遺物が多く検出されました。葦屋北遺跡の性格を一層明確にするものでした。

さらに土坑に埋納された5世紀後半の馬の全身骨格が確認されました。日本列島に馬がもたらされた直後の時期のものであり、その形質や系統を考える上で重要なものであり、多く注視されております。現在、保存処理作業を実施中であり、来年度には広く公開が可能であると考えております。

葦屋北遺跡の発掘調査は、開始されたばかりで、今後長期にわたるものです。その成果によって地域の歴史が豊かに構築できるようになることはもとより、日本古代史、古代の日韓関係史にも大きな影響を与えるものと考えます。

調査に際しましては、地元の方々並びに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたします。引き続き、葦屋北遺跡の発掘調査に皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

平成16年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 向井正博

例 言

- 1 本書は、大阪府土木部寝屋川流域下水道事業なわて水環境保全センター建設に先立って、大阪府教育委員会が実施した四條畷市砂・葎屋に所在する葎屋北遺跡発掘調査概要・Iである。
- 2 調査は、大阪府土木部の依頼を受け、文化財保護課調査第一グループが技師山上 弘・辻本武を担当者として平成13年5月25日から平成15年3月29日までの期間で実施した。遺物整理作業は、調査管理グループが技師山田隆一・林口佐子・小浜 成を担当者として、現地調査と並行して実施した。
- 3 調査の実施にあたっては、砂・葎屋自治会をはじめ四條畷市教育委員会、大阪府東部流域下水道事務所など多くの方々の協力を得た。
- 4 本書の作成にあたっては、小野山 節（京都大学名誉教授）、菱田哲朗（京都府立大学）、安部みき子（大阪市立大学）、松井 章（奈良文化財研究所）、野島 稔・村上 始・佐野喜英（四條畷市教育委員会）、塩山則之・浜田延充（寝屋川市教育委員会）、松田順一郎・別所秀高（東大阪市文化財協会）氏等の御指導及び御教示を得た。
- 5 写真測量は、(株)ウエスコ、(株)かんこうに委託した。なお、撮影フィルムについては、同社で保管している。
- 6 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。出土木製品の保存処理、樹種鑑定、DNA鑑定、馬埴納土坑の取り上げは、(財)元興寺文化財研究所に、馬埴納土坑の保存処理は(株)京都科学に、花粉分析、種実分析、C¹⁴年代測定を(株)パリオ・サーヴェイに委託した。
- 7 本書で用いた座標値は、平面直角座標第VI系（日本測地系）である。
- 8 本調査の調査番号は、01007（平成12年度）・02007（平成13年度）である。
- 9 本書の執筆は主に山上が当たり、文化財保護課調査第一グループ主任小林義孝、調査第一グループ技師宮崎泰史等が一部分担執筆し、小林が編集作業を行った。
- 10 本概要は300部作成し、一部あたりの単価は2657円である。

目 次

はじめに

例言

第1章 調査の経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の方法	4
第2章 調査の成果	5
1. 基本層序	5
2. 検出遺構の概要	8
3. 古墳時代中期の遺構と遺物	9
第3章 葦屋北遺跡のU字形板状土製品	54
第4章 葦屋北遺跡出土馬全身骨格応急処置について	66
第5章 まとめ	67

図版目次

図版 1	調査区遠景（北西から） 調査区遠景（北から）	図版10	SE542焼失部材出土状況（南西から） SE542遺物出土状況（西から）
図版 2	調査区遠景（東から） 調査区遠景（南から）	図版11	SE695井戸枠設置状況（西から） SE695遺物出土状況（西から）
図版 3	A調査区古墳時代中期遺構面全景（上から）	図版12	SE1613完掘状況（西から） SE1613遺物出土状況（西から）
図版 4	A調査区東側全景（北西から） A調査区東側全景（北から）	図版13	SK940馬全身骨格検出状況（南から） SK940馬肋骨他細部検出状況（南東から）
図版 5	A調査区西側全景（北から） A調査区西側南半部全景（西から）	図版14	SK940頭部、顎部詳細（南から） SK940全景（上から） SK940骨盤、後脚詳細（南から）
図版 6	SB430（1号竪穴住居跡）全景（北東から） SB1011（5号竪穴住居跡）全景（南西から）	図版15	SK940骨格検出状況（北東から） SK940土層断面（北から） SK655馬上下顎骨出土状況（東から） SK1345馬上下顎骨出土状況（東から）
図版 7	1号獨立柱建物跡（北東から） A調査区西側建物集中部（西から）		SK1345馬上下顎骨出土状況（南から） SK940出土馬骨格緊急保存処理工程
図版 8	SE494井戸枠設置状況（東から） SE494遺物出土状況（東から）		
図版 9	SE1501井戸枠設置状況（南東から） SE590遺物出土状況（東から）		

図版16	SK1135遺物出土状況（南から） SK1632製塩土器出土状況（東から）	図版22	SK1135（土坑1）出土遺物 鳥足文タタキの須恵質壺・蓋形土器
図版17	SK1654遺物出土状況（西から） SD1231遺物出土状況（北東から）	図版23	U字形板状土製品（第44図-1）表 U字形板状土製品（第44図-1）裏
図版18	SD950遺物出土状況（北から） SD950U字形板状土製品他遺物出土状況細部	図版24	U字形板状土製品（第45図-2）表裏 U字形板状土製品（第46図-3）表裏
図版19	SE494出土遺物 SE590他出土遺物	図版25	U字形板状土製品 （左から第47図-4・6、第48図-7）表 U字形板状土製品 （左から第48図-7、第47図-6、第47図-4）表
図版20	SD950上層出土須恵器 SD950上層出土土師器		
図版21	SD950下層出土遺物 SD1231出土遺物		

第1章 調査の経過

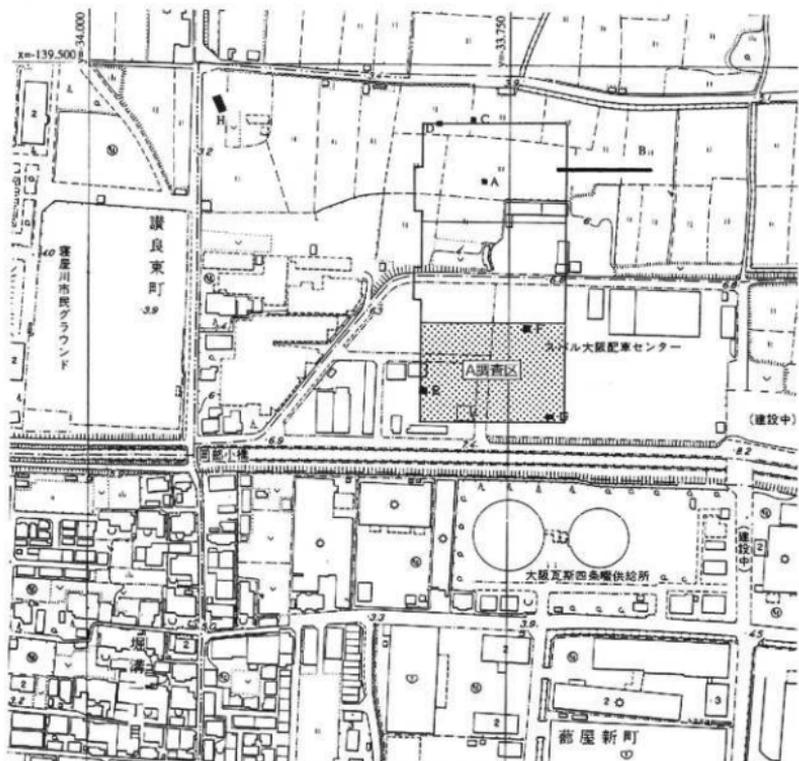
1. 調査に至る経過

四條市部屋・砂に所在する部屋北遺跡は、生駒山地の最北部に位置する飯盛山付近から流下する岡部川により形成された自然堤防上とその後背湿地に立地する弥生時代から中世にいたる遺跡である。

遺跡発見の経緯 大阪府土木部が、寝屋川流域下水道事業としてなわて水環境保全センター建設を計画し、この予定地の大部分が四條市・寝屋川市に広がる讚良郡条里遺跡の範囲内に含まれるため、1999年度と2000年度の2ヶ年度にわたって第1次・第2次の2回の試掘調査を実施された。予定地全体に配置した試掘トレンチのいずれからも古墳時代から中世の遺構・遺物の検出



第1図 部屋北遺跡の位置 (1/10000)



第2図 調査区的位置 (1/3000)

をみ、とりわけ古墳時代中期の遺構面が全面に展開していることが明らかになり、その性格も馬歯・馬骨、木製馬具、製塩土器などの存在から馬の生産・飼育との関連が推測され、広大な範囲をもつ讃良郡条里遺跡の中でも固有の性格を保持する地点であることが確認された。そしてその範囲は讃良郡条里遺跡の南限をわずかに超えて遺跡範囲が拡大することから、新規に拡大した範囲を含めてなわて水環境保全センター予定地全体を、讃良郡条里遺跡から切り離し、新たに部屋北遺跡として周知した。

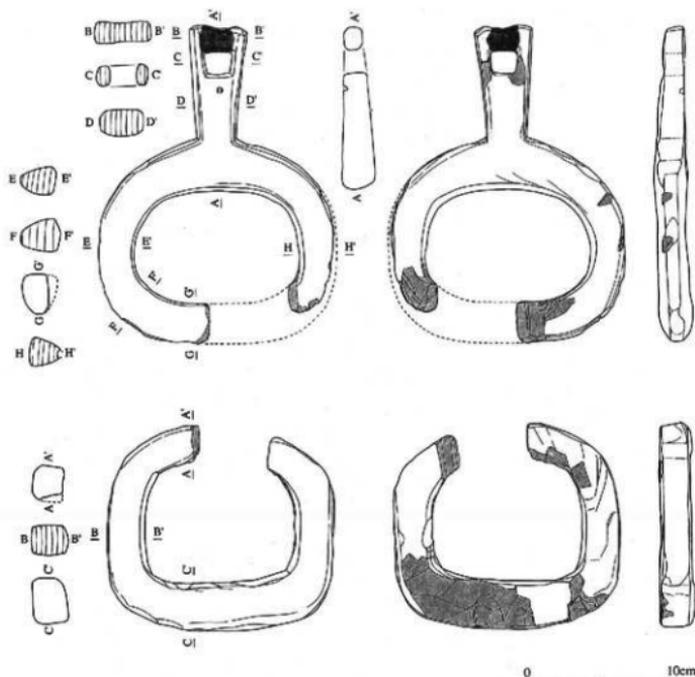
第1次試掘調査 2000年3月13日～4月11日の期間で実施した。包含層及び遺構の有無とその形成時期、遺構面の枚数の確認と地山までの深度を明らかにすることを目的に、17,200㎡を測る水処理施設(浄化槽)の建設予定地内北半部に4ヶ所のトレンチを設定した。5m四方のトレンチ1ヶ所(A地区)、3×50mのトレンチ1ヶ所(B地区)、3m四方トレンチ2ヶ所(C・D地区)である。調査面積は合計193㎡。第1次試掘調査の結果、古墳時代の土坑・溝・柱穴、中世から近世の耕作面・溝・畦畔が検出され、集落遺跡が存在することが明らかとなった。水処理施設

(浄化槽) 予定地内南半部についても遺構面が広がることが予想された。

第2次試掘調査 2000年11月8日～12月19日にかけて、水処理施設(浄化槽)の予定地内に、5m四方のトレンチ3ヶ所(E・F・G地区)を設定した。予定地全体の遺構面の広がりや埋物深さの確認を目的に実施した。また条里の施行時期・古墳時代遺構面の広がり・弥生時代遺構面の有無などについて詳細な情報を得ることも併せて目的とした。

E地区では、近世から古墳時代にいたる14枚の遺構面を確認し、T.P.+1.0mで古墳時代中期後半の良好な遺構面を確認し、土坑から大量の製塩土器、鳥足文タタキの陶質土器、U字形板状土製品、移動式かまどなど葦屋北遺跡の古墳時代を特徴づける遺物が多数出土している。また、F・G地区では近世・近代の堆積層の厚さなどを確認し、発掘調査の実施に必要な情報を得た。

発達立坑部の発掘調査 なわて水環境保全センターに連結する門真寝屋川直送幹線下水管渠の発達立坑が、なわて水環境保全センターの北西隅に建設されることとなり、H地区として2001年4月2日～6月6日までの期間で発掘調査を実施した。ここでも古墳時代中期の溝を検出し、木製の輪鏝など馬との関わりを示す遺物の出土をみた(宮崎泰史「讀良郡条里遺跡(葦屋北遺跡)発掘調査概要・IV」大阪府教育委員会 2002年)。



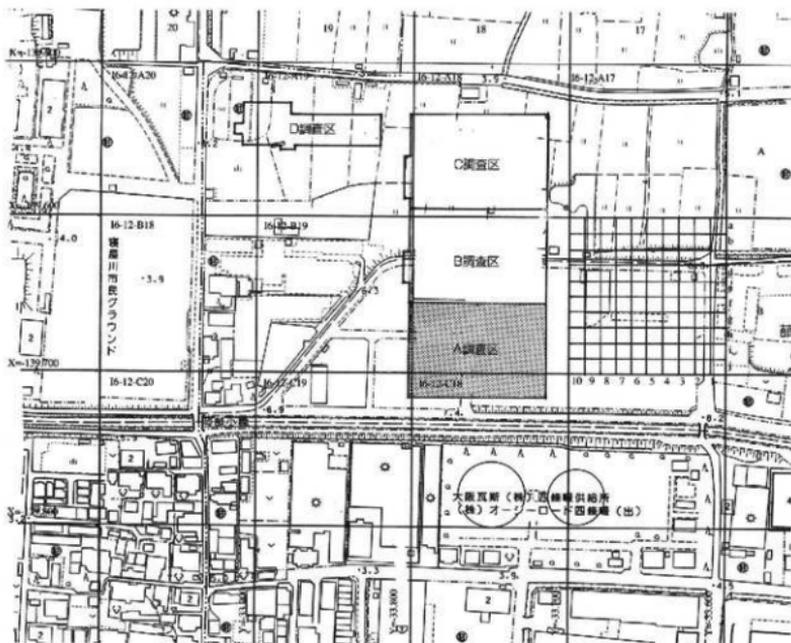
H地区出土の木製輪鏝

2. 調査の方法

なわて水環境保全センター予定地の発掘調査は、2001年7月に開始した。センターの第1期工事は、水処理施設（浄化槽）と機械施設などその供用の開始が可能な施設の建設を行うため、建設の順序に従ってA調査区からF調査区の6つの調査区に分割して発掘調査を実施することとなった。約17,200㎡の面積をもつ水処理施設（浄化槽）を三分割し、南よりA・B・C調査区とし、本概要が報告するのは、この内A調査区の成果である。2001年7月に調査を開始し、2003年3月に終了した。

調査区の地区割りには、1/2500地形図（都市計画図）を基本（東西2km、南北1.5km）として、この地図を300等分し、100m四方の区画をつくる。この区画はアルファベットとアラビア数字で表現する。縦方向に15行（北から南へA～O）、横方向に20列（東から西へ1～20）あり、区画を表す場合は縦方向を優先して記載する。さらに、100m区画を100等分して10m四方の区画をつくる。この区画はアルファベットとアラビア数字で表現する。縦方向に10行（北から南へa～j）、横方向に10列（東から西へ1～10）あり、区画を表す場合は縦方向を優先している。遺物取り上げの際の地区名はこの区画名を記入している。

なお、遺構番号は、検出した順に、通し番号を付けている。



地区割の方法

第2章 調査の成果

1. 基本層序

今回調査の対象となった水処理施設は、南北約180m、東西90mを測る広大な調査区であったため、先述したように調査区を三分割した。本概要では、分割した南側のA調査区について、特に古墳時代中期の遺構と遺物を中心に報告する。

調査対象となった水処理施設の調査前の状況は、調査区の中央部を道路が東西に横断し、その北側が水田、南側が工場等の施設が建っていた。A調査区は工場跡地に当たり、旧地表面から2m前後の客土が盛り土され、その上面がT.P.約+7mを測る。旧地表面の標高は東側でT.P.+5.8m、西側でT.P.+4.7mを測る。

平成12年度の試掘調査において、盛土および近現代にかかる堆積土の範囲を確定させ、本調査着手前にT.P.+3.6mまでを機械掘削にて除去した。

調査着手時点でのA調査区地表面の標高はT.P.+3.6mを測り、発掘調査に伴い調査区四周に設定した土層観察用の壁面は、この高さ以下の観察である。基本層序を観察するに当たり、今回は調査区東側の壁面を用いることにする。なお北側に設定したB・C調査区は現在調査中であり、この成果を合わせることによって、南北180mの堆積状況が把握できることとなるが、本概要では、南端部60mの堆積状況から判明したA調査区の基本層序を概観する。

調査の対象範囲は、T.P.+3.6mを測る近世の遺構面から、T.P.+1.0mの古墳時代中期の遺構面までであったが、この遺構面以下の遺構の有無と堆積状況を観察するため、東・南・西側壁面に沿ってトレンチを設定しT.P.-1.0mまで、調査を行った。

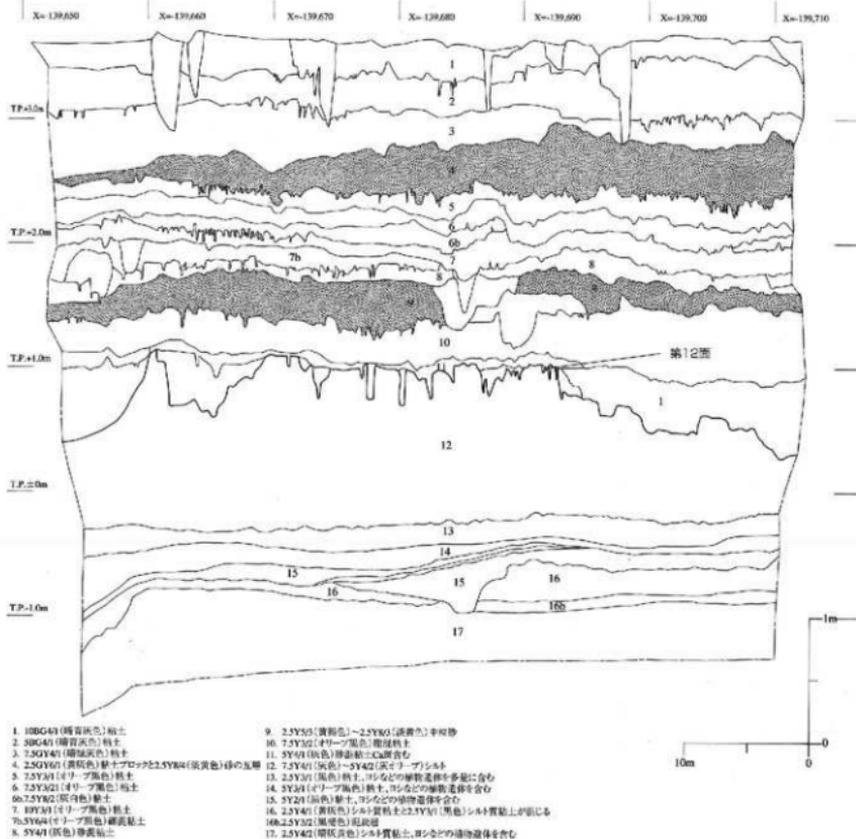
1. 暗青灰色粘土 (10BG4/1) 南北方向の畦畔、島崙、足跡が検出された第1遺構面のベース層となる土層である。調査区全面で観察され、層厚約0.2~0.4mを測る。遺物はほとんど出土しなかった。上層には黄灰色粗砂が堆積していた。

2. 暗青灰色粘土 (5BG4/1) 南北方向の畦畔、島崙と足跡が検出された第2遺構面のベース層となる土層である。調査区全面で観察され、層厚0.2~0.6mを測る。遺物はほとんど出土しなかった。

3. 暗緑灰色粘土 (7.5GY4/1) 畦畔及び足跡が検出された第3遺構面のベースとなる土層である。調査区全面で観察され、瓦質羽釜等が僅かに出土した。層厚0.2~0.7mを測る。

4. 黄灰色粘土 (2.5GY6/1) と淡黄灰色砂 (2.5Y8/4) の混土 東西方向の大畦畔及び畦畔、足跡が検出された中世の第4遺構面のベース層となる土層である。調査区全面で検出され、南側で厚く、北側に向かって層厚を減じる。大畦畔の南側ではT.P.+2.8m、北側では2.6~2.8mを測る水田が検出された。層厚0.2~0.8mを測り、中世以前の遺物を僅かに包含する。

5. オリブ黒色粘土 (7.5Y3/1) 足跡が検出された第5遺構面のベース層となる土層で



- | | |
|--|--|
| 1. 18BQ43 (褐色灰色) 粘土 | 9. 2.5Y5/3 (黄褐色)~2.5Y8/3 (淡黄色) 中粒砂 |
| 2. 8BQ43 (暗青灰色) 粘土 | 10. 7.5Y3/2 (オリーブ黒色) 微粒粘土 |
| 3. 7.5GY4/1 (暗緑灰色) 粘土 | 11. 5Y4/1 (灰色) 砂質粘土にCa炭酸塩を含む |
| 4. 2.5GY6/1 (黄褐色) 粘土にゴロツキと2.5Y8/4 (灰黄色) 砂の互層 | 12. 7.5Y4/1 (灰色) 砂質粘土にCa炭酸塩を含む |
| 5. 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 粘土 | 13. 2.5Y3/1 (黒色) 粘土, 5%程度の腐植体を含み多量に含む |
| 6. 7.5Y3/2 (オリーブ黒色) 粘土 | 14. 5Y3/1 (オリーブ黒色) 粘土, 5%程度の腐植体を含み |
| 6b. 2.5Y8/2 (灰白色) 粘土 | 15. 5Y2/1 (灰色) 粘土, 5%程度の腐植体を含み |
| 7. 8PY4/1 (オリーブ黒色) 粘土 | 16. 2.5Y4/1 (黄褐色) シルト質粘土に2.5Y6/1 (褐色) シルト質粘土が混じる |
| 7b. 5Y6/6 (オリーブ黒色) 硬質粘土 | 16b. 2.5Y3/2 (黒褐色) 灰泥層 |
| 8. 5Y4/1 (灰色) 砂質粘土 | 17. 2.5Y4/2 (暗灰褐色) シルト質粘土, シンとの腐植体を含む |

第3図 A調査区東壁土層断面図

ある。調査区全面で検出され、層厚0.1~0.2mを測る。中世以前の遺物を僅かに包含する。

6. オリーブ黒色砂泥じり粘土 (7.5Y3/2) 第6面のベース層となる土層である。調査区全面で検出され、層厚0.2mを測る。遺物はほとんど出土しなかった。調査区中央部から北側にかけて下層に灰白色粗砂 (7.5Y8/2) が堆積する。この土層から第18図-3に示す鉄鏝が出土した。

7. オリーブ黒色粘土 (10Y3/1) 足跡が検出された第7遺構面のベース層となる土層である。調査区全面で検出され、層厚0.1~0.3mを測る。遺物はほとんど出土しなかった。

8. 灰色細砂泥じり粘土 (5Y4/1) 畦畔と足跡が検出された第8遺構面のベース層となる土層である。調査区東側から西側に向かって層厚を減じ、調査区中央付近で観察されなくなる。上層には北東から南西に向かって流れる自然河川によるオリーブ黄色粗砂 (5Y6/4) が堆積する。古代以前の遺物を包含する。

9. 黄褐色~淡黄色砂 (2.5Y5/3・2.5Y8/3) 階段状に形成された耕作面が検出された第9遺構面のベース層となる土層である。調査区全面で検出されるが、調査区西側に向かって層

厚を減じ、層厚0.2～0.4mを測る。第18図-2・4に示す刀子、鉄鎌や古代以前の遺物を包含する。

10. オリーブ黒色粘土(7.5Y3/2) 足跡と畦畔が検出された第10遺構面のベース層となる土層である。層中にはCa莖を含む。調査区全面で検出されるが、西側に向かって層厚を減じ、層厚0.2～0.6mを測る。刀子(第18図-1)、鉄鎌(第18図-5)、鍵(第18図-6)、砥石(第19図-1・7・8)、紡錘車(第21図-5)、滑石製の双孔円板(第21図-15～18・22)、白玉等、古代以前の遺物を包含する。

11. 灰色砂混じり粘土(5Y4/1) 土坑等が検出された古墳時代後期の第11遺構面のベース層となる土層である。上層が堆積する際の地形改変により遺構面がかなり削平されていると考えられ、調査区全面で検出されるが、下面の窪んだ地形に合わせて残存している状況である。層厚0.1mを測り、滑石製紡錘車(第21図-7)、双孔円板(第21図-7・19～21)、白玉、砥石(第19図-19～21)等、古墳時代以前の遺物を包含する。

12. 灰色～灰オリーブシルト(7.5Y4/1・5Y4/2) 古墳時代中期の集落等が検出された第12遺構面のベース層となる土層である。調査区全面で検出され、層厚1.2mを測る土層である。古墳時代前期の土器を僅かに包含する。

当調査区では、古墳時代中期遺構面までのT.P.+1.0m前後を調査の対象深度としていたが、この遺構面以下の遺構の有無と層序を知るため、調査区の東・南・西壁に沿って幅5mのトレンチを設定し、T.P.-1.0mまでの調査を行った。古墳時代中期遺構面のベース層となる灰色シルト層以下は、基本的には植物遺体を含む有機質層と洪水等にかかるシルト質の土層の互層が繰り返される自然堆積層が連続する。

13. 黒色粘土(2.5Y3/1) トレンチの全面で検出された土層で、植物遺体を多量に含む。層厚0.2mを測る。少量の弥生土器が出土した。

14. オリーブ黒色粘土(5Y3/1) トレンチの全面で検出され、植物遺体を含む。層厚0.1mを測り、上層とともにT.P.-0.5m付近に水平に堆積する。

15. 黒色粘土(5Y2/1) 西・南と東トレンチの中央部まで安定して検出されたが、東トレンチの北側では、北に向かって落ち込む地形に沿って堆積状況が変化する。層厚0.1～0.2mを測り、植物遺体を含む。東トレンチで弥生時代の石鎌1点、南側トレンチで弥生時代前期新段階の壺の大形破片が出土した。

16. 黄灰色シルト質粘土(2.5Y4/1) トレンチの全面で検出され、層厚0.2～0.4mを測る。この土層の上面は流水等によって形成された溝状の落ち込みが多数検出され、滞水していた状況から水が引き、陸化していく様相が、上層の黒色土層の形成とともに観察することができた。

17. 暗灰黄色シルト質粘土(2.5Y4/2) トレンチの全面で検出され、東トレンチの北端で大きく落ち込む様子が確認された。16の土層との間に泥炭層を挟み、縄文時代後期の土器が少量出土したことから、長期にわたる堆積層と考えられる。

以上のことから、古墳時代中期遺構面以下の堆積層は、T.P.-0.2mまでのシルト層が古墳時代前期の堆積層、T.P.-0.2~-0.8mまでの黒色系粘土層の互層が弥生時代、それ以下が縄文時代の堆積層であると考えられる。少量の遺物が出土したが、明らかな遺構は検出することができず、暮らしに適した環境ではなかったと考えられる。

2 検出遺構の概要

A調査区は、T.P.+3.6mから調査を開始した。事前の機械掘削で除去した近世堆積層の最下部の砂層を掘削することからはじめ、直下で検出した水田面を第1遺構面とし、以下検出順に上層から1・2・3と順に遺構面を数える。遺構が検出されなくても一時期の地表面と考えられる面についても遺構面と同様に連続して面数を与えた。これはA調査区で検出できた面のみに適用し、この後遅れて調査を開始したC調査区、B調査区においては各調査区単位で遺構面を認定していく作業となったため、概要作成の現時点では隣接する調査区相互で同一名称の遺構面が同時期のものであるかどうかの検証はしていない。今後合わせて報告を行う際の作業としたい。

さて本概要では古墳時代中期の遺構と遺物を中心に報告することを目的とするため、上層の遺構について簡単に触れておきたい。

古墳時代中期の遺構面まで掘り下げる間に11の遺構面を確認した。第1～第2遺構面は近世にかかる水田面で南北方向に伸びる畦畔が検出された。

第3～第5遺構面は中世にかかる耕作面で、畦畔等が顕著に検出できたのは第4遺構面である。東西方向の大畦畔が検出され、その北側には水田が営まれていた。

第6～第10遺構面は平安時代の耕作面である。この時期の生活域はC調査区で検出されている。各遺構面の標高は、最上面の第6遺構面がT.P.+2.2m～+2.4mを測り北側が高い。最下面の第10遺構面はT.P.+1.4mを測り南北方向はほぼ水平である。当調査区で検出された各遺構面は、南北方向の高低差は少ないが、東西方向では東が高く、西に低い傾向を示す。第8遺構面で検出した水田面は、調査区東半部で畦畔、足跡等を検出した。しかし西半部では遺構、足跡等が検出されず、水田等を造ることができない湿地に転換する地形の変換点に当たると考えられる。最下層の水田面である第10遺構面は、上層及び現地表に見られる讚良郡条里の地割り方向と異なる方向の畦畔が検出され、当該地における条里施行が平安時代前期にまで遡らないことが判明した。

第11遺構面は、上層の水田開発や耕作による削平が著しく、古墳時代後期の遺物が出土するピット、土坑等が部分的に検出されたのみである。C地区の調査では、多数の掘立柱建物跡、竪穴住居跡が検出され、集落の中心部が存在すると考えられる。これに対し、当調査区は検出遺構、出土遺物の量等から見て、集落縁辺部に当たると考えられる。

3. 古墳時代中期の遺構と遺物

古墳時代中期の遺構面（第12遺構面）は、T.P.+1.0m前後を測り、シルト或いはシルト質粘土の上面で遺構が検出された。遺構の概要は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸等の集落を構成する遺構群が東西2ヶ所に分かれて検出された。両遺構群の間には幅20~30mを測る大規模な溝が検出され、西岸近くに馬1頭をそのまま埋葬した土坑が検出された。その南側では溝等が多数検出されたが、住居関連の遺構は検出されなかった。各遺構を説明するのに当たり、区画溝を境に東側遺構群、西側遺構群に大別した後、詳細な位置を示す。

SB430（1号竪穴住居跡）（第4図、図版6） 東側遺構群で検出された長方形の竪穴住居跡である。2号竪穴住居跡の東側に隣接する。北東側壁と西コーナー部がやや時期の新しい土坑によって攪乱を受けていた。床面の標高はT.P.+1.0mを測る。

住居跡の平面形は、長軸方向7.2m、短軸方向5.7mを測る、隅丸の長方形である。壁溝は検出されなかった。検出面から床面までの深さ0.15mを測る。

住居内の遺構としては、多数のピット、土坑、溝が検出されたが、配置、深さ等から主柱穴を推定することができなかった。

遺物は、竪穴住居跡を埋める土層内から須恵器、土師器、砥石等が出土した。第20図-1は竪穴住居内のSK731から出土した土師器の長胴化した甕である。砥石は第19図-4に示す。

SB500（2号竪穴住居跡）（第5図） 東側遺構群で検出された長方形の竪穴住居跡である。1号竪穴住居跡の西側に位置し、3・4号竪穴住居跡と重複関係にあり、最も新しい。南東壁と東側コーナー部をやや新しい時期の土坑によって攪乱を受けていた。床面の標高はT.P.+0.9mを測る。

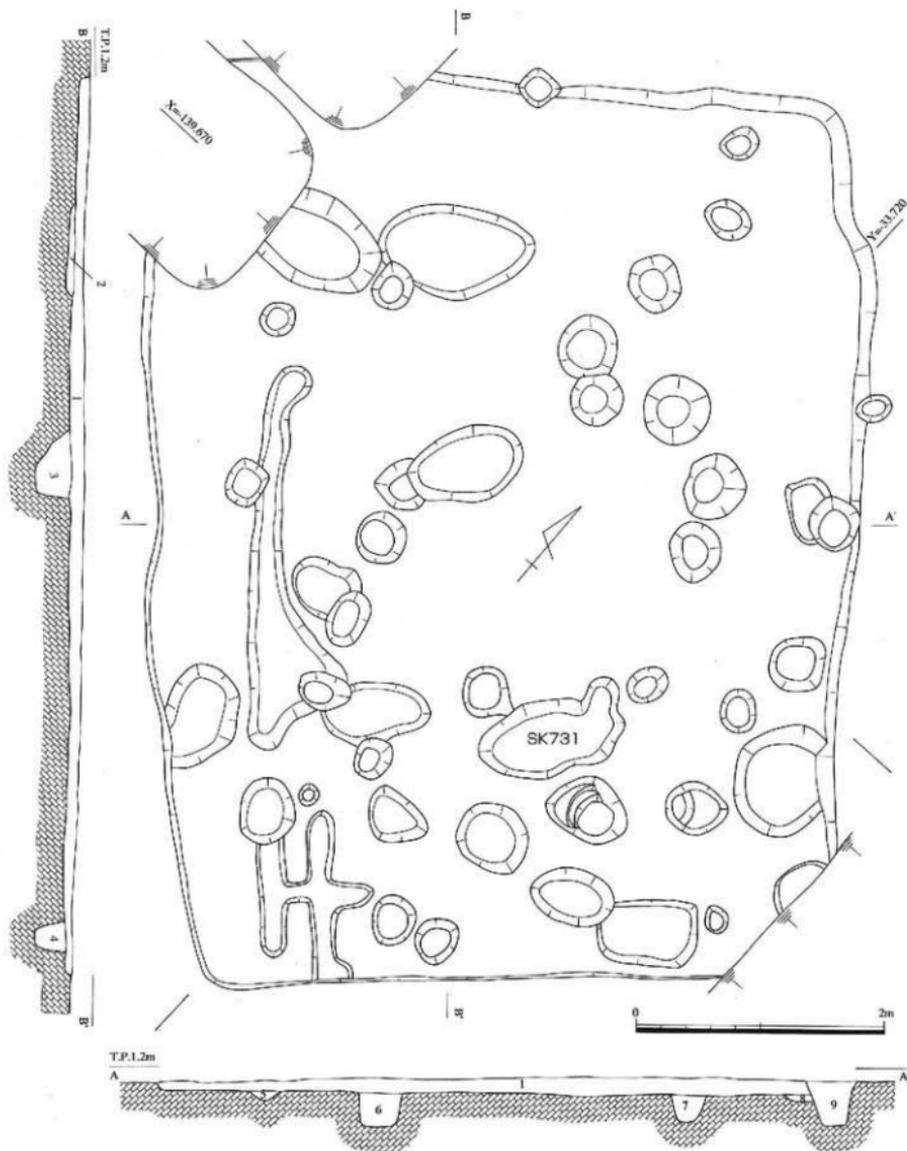
住居跡の平面形は、長軸方向6.7m、短軸方向5.4mを測る、隅丸の長方形である。壁溝は検出されなかった。検出面から床面までの深さは0.1mを測る。

住居内の遺構としては、多数のピット、土坑、掘り残しの高まりが検出されたが、配置、深さ等から主柱穴や礎石等を推定することができなかった。

遺物は、竪穴住居跡の埋土やピット等の埋土から須恵器、土師器の小片が出土したが、図化し得るものはなかった。

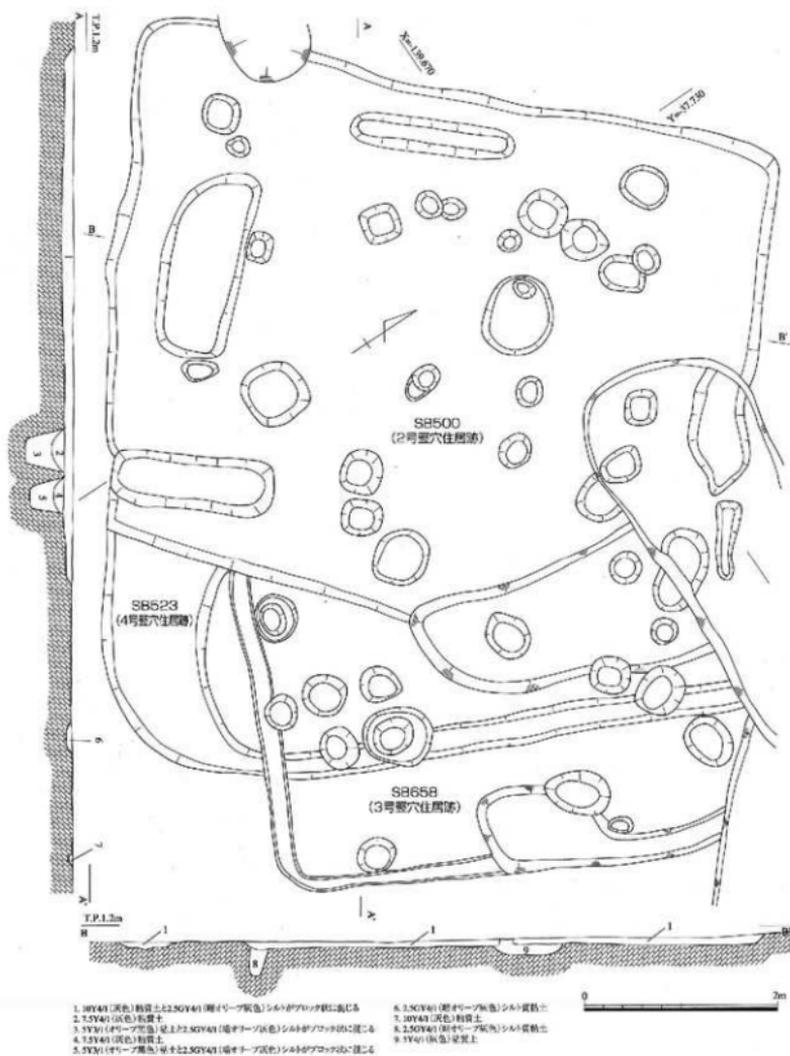
SB658（3号竪穴住居跡）（第5図） 東側遺構群で検出された竪穴住居跡である。1号・2号・4号竪穴住居跡と重複関係にあり、4号竪穴住居跡より新しく、1号・2号竪穴住居跡によって攪乱を受けていた。遺構検出の時点では既に床面まで削平を受けており、竪穴壁は残存せず、壁溝と床面に掘られたピット等が残存していた。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

住居跡の平面形は、南側壁3.2m以上、東側壁4.8m以上を測る隅丸の方形と考えられる。壁溝の幅0.2m、深さ0.05mを測る。



- | | |
|--|----------------------------|
| 1. 7.5V4f (灰色)粘質土(炭化)を軸山のシタ+2.50V4f (黒オリーブ灰色)がアソック4fに混じる | 6. 7.5V34f (オリーブ黒色)粘質土(炭化) |
| 2. 5V4f (灰色)シタ質粘土(炭化) | 7. 5V4f (灰色)シタ質粘土(炭化) |
| 3. 7.5V3f (オリーブ黒色)粘質土(炭化) | 8. 5V4f (灰色)シタ質粘土(炭化) |
| 4. 5V4f (灰色)シタ質粘土(炭化) | 9. 7.5V4f (灰色)シタ質粘土 |
| 5. 5V4f (灰色)シタ質粘土(炭化) | |

第4図 SB430 (1号竪穴住居跡) 平・断面図



第5図 SB500(2号竪穴住居跡)・SB658(3号竪穴住居跡)・SB523(4号竪穴住居跡)平・断面図

住居内でピットを検出したが、本住居跡に帰属する遺構を抽出することができなかった。壁溝内から須恵器、土師器の小片が出土したが、図化し得るものはなかった。

SB523（4号竪穴住居跡）（第5図） 東側遺構群で検出された竪穴住居跡である。2号・3号竪穴住居跡と重複関係にあり、両竪穴住居跡によって攪乱を受けていた。遺構検出の時点では既に床面まで削平を受けており、竪穴壁は残存せず、壁溝と床面に掘られたピット等が残存していた。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

住居跡の平面形は、南側壁2.2m以上、東側壁6.0m以上を測る隅丸の方形と考えられる。壁溝の幅0.3m、深さ0.05mを測る。

住居内でピットを検出したが、本住居跡に帰属する遺構を抽出することができなかった。壁溝内から須恵器、土師器の小片が出土したが、図化し得るものはなかった。

SB1011（5号竪穴住居跡）（第6図、図版6） 西側遺構群で検出した作り付カマドを持つ竪穴住居跡である。調査区の北西端部で検出され、6号竪穴住居跡と重複関係にあり、攪乱を受けていた。東側遺構群で検出された竪穴住居跡から約70m西側に位置する。床面の標高はT.P.+0.8mを測る。

住居跡の平面形は、長軸方向6.1m、短軸方向5.8mを測る、隅丸の方形である。壁溝は検出されなかった。検出面から床面までの深さ0.2mを測る。

住居内の遺構としては、ピット、土坑、カマドが検出されたが、配置、深さ等から主柱穴を推定することができなかった。カマドは、北西壁の中央部で検出され、先端は壁面に接する。竪穴を掘る際に北西壁に接して0.9×1.3mの基底部を掘り残し、焚口は床面よりやや高い。平面形は「U」字形を呈するが、削平が著しく、奥壁部分が残存するだけであった。奥壁から支脚までの距離は0.3mを測り、支脚には土師器高杯の脚柱部を上に向けた状態で転用していた。

遺物は、竪穴住居跡の埋土やピット等の埋土から須恵器、土師器の小片が出土したが、図化し得るものはなかった。

SB1012（6号竪穴住居跡）（第6図） 西側遺構群で検出された竪穴住居跡である。5号竪穴住居跡と重複関係にある。南側壁の一部と南西コーナー部は土坑によって攪乱を受けている。床面の標高はT.P.+0.85mを測る。

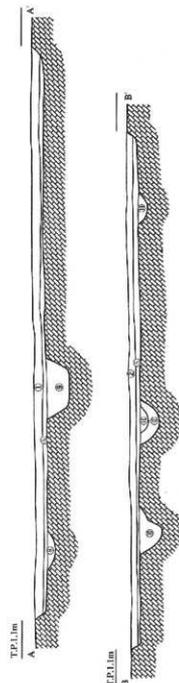
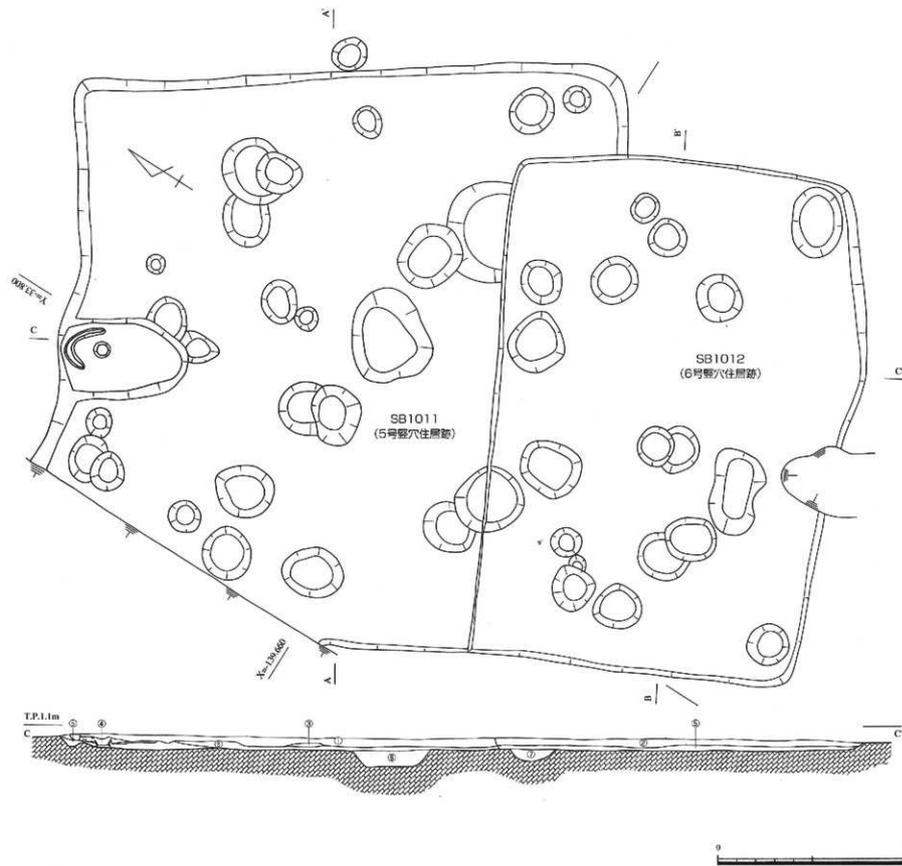
住居跡の平面形は、長軸方向5.2m、短軸方向3.8mを測る、隅丸の長方形である。壁溝は検出されなかった。検出面から床面までの深さ0.85mを測る。

住居内の遺構としては、多数のピットが検出されたが、配置、深さ等から主柱穴を推定することができなかった。

遺物は、竪穴住居跡の埋土やピット等の埋土から須恵器、土師器の小片が出土したが、図化し得るものはなかった。

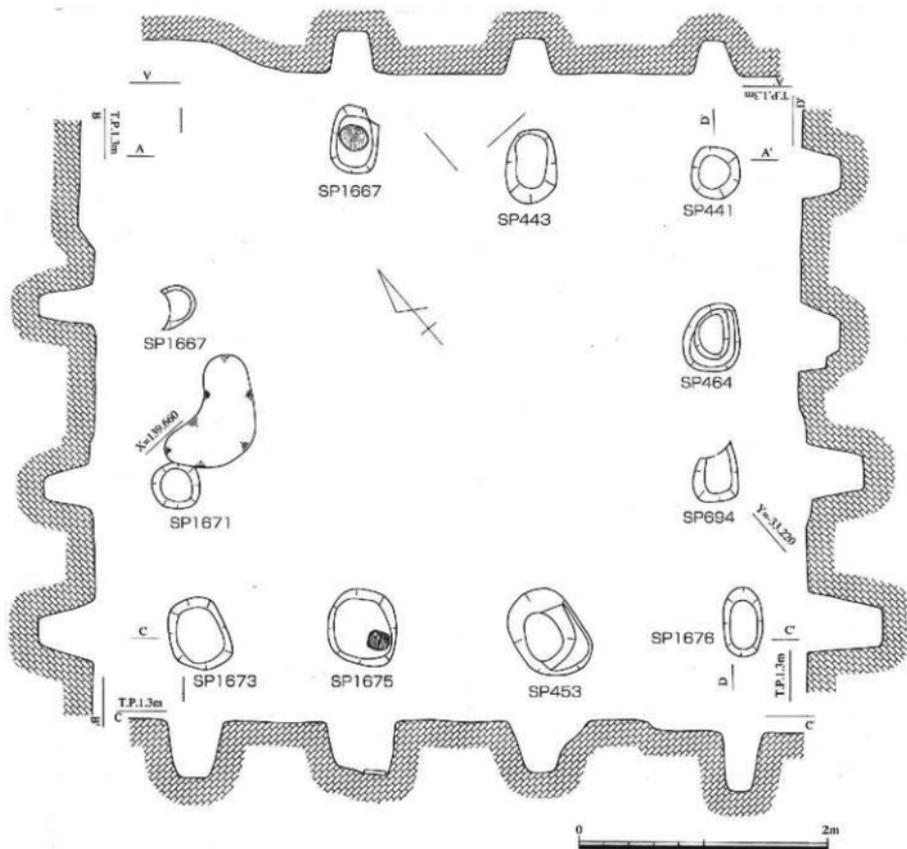
1号掘立柱建物跡（第7図、図版7） 東側遺構群で検出された3間×3間の掘立柱建物跡である。1号竪穴住居跡の2m北側に位置する。検出面の標高はT.P.+1.2mを測る。

柱穴は最大0.5×0.6m、最小0.4×0.4mを測る略方形・長方形の掘形を有し、深さ0.4mを測る。



- ① 7.5Y5/1 (灰色)シト質粘土
- ② 10Y5/1 (灰色)シト質粘土
- ③ 2.5Y7/4 (淡黄色)シト
- ④ 10Y4/1 (灰色)シト(灰 機土を含む)
- ⑤ 7.5Y4/1 (灰色)シト質粘土と2.5Y 5/2(薄灰黄色)シトが混じる
- ⑥ 7.5Y3/1(オリーブ黒色)シト質粘土と5Y 4/2(灰オリーブ色)シトが混じる
- ⑦ 5Y4/2(灰オリーブ色)粘質土と7.5Y 3/1(オリーブ黒色)シト質粘土が混じる
- ⑧ 7.5Y3/1(オリーブ黒色)シト質粘土と5Y 4/2(灰オリーブ色)シトが混じる
- ⑨ 7.5Y3/1(オリーブ黒色)シト質粘土と5Y 4/2(灰オリーブ色)シトが混じる
- ⑩ 2.50V4/1(暗オリーブ灰色)粘質土と50Y 4/1(暗オリーブ灰色)シト質粘土がブロック状に混じる
- ⑪ 2.50V4/1(暗オリーブ灰色)粘質土と50Y 4/1(暗オリーブ灰色)シト質粘土がブロック状に混じる
- ⑫ 2.50V4/1(暗オリーブ灰色)粘質土と50Y 4/1(暗オリーブ灰色)シト質粘土がブロック状に混じる
- ⑬ 7.5Y3/1(オリーブ黒色)粘質土と2.5Y 5/1(灰色)シトが混じる

第 6 図 SB1011 (5号竪穴住居跡) ・SB1012 (6号竪穴住居跡) 平・断面図



第8図 1号掘立柱建物跡 平・断面図

柱痕跡は検出できなかった。梁間3.6m、桁行4.4m、床面積15.8㎡を測る。

出土遺物(第20図-3) SP443から丹塗磨研の壺(第20図-3)が出土した。また2ヶ所の柱穴から方形・円形に加工した礎板が出土した。

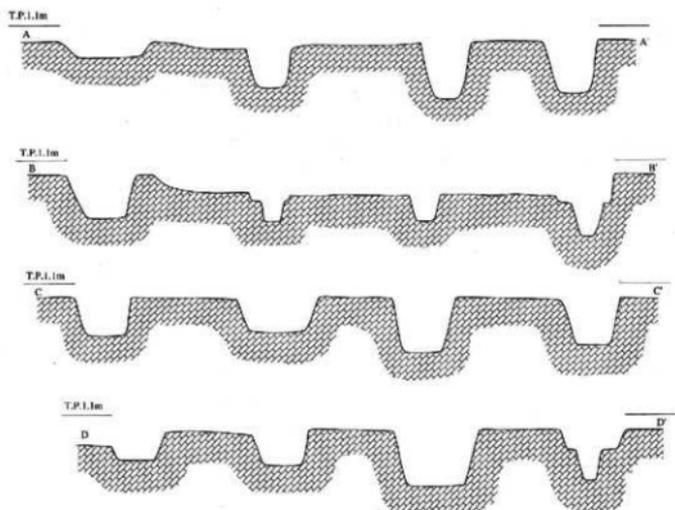
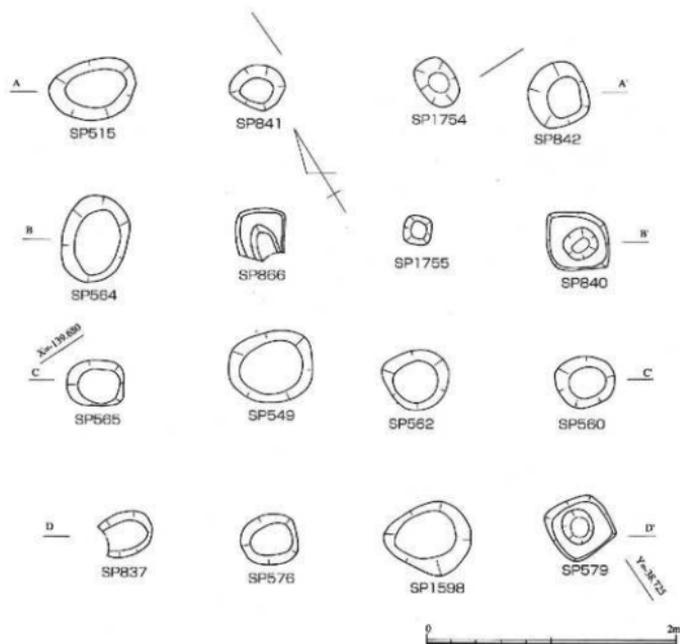
2号掘立柱建物跡(第8図) 東側遺構群で検出された3間×3間の総柱の掘立柱建物跡である。2号竪穴住居跡の4m南側に位置する。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

柱穴は最大0.6×0.7m、最小0.4×0.5mを測る略方形の掘形を有し、深さ0.5mを測る。2ヶ所の掘形から検出した柱痕跡は径0.25mを測る。梁間3.6m、桁行3.8m、床面積13.7㎡を測る。

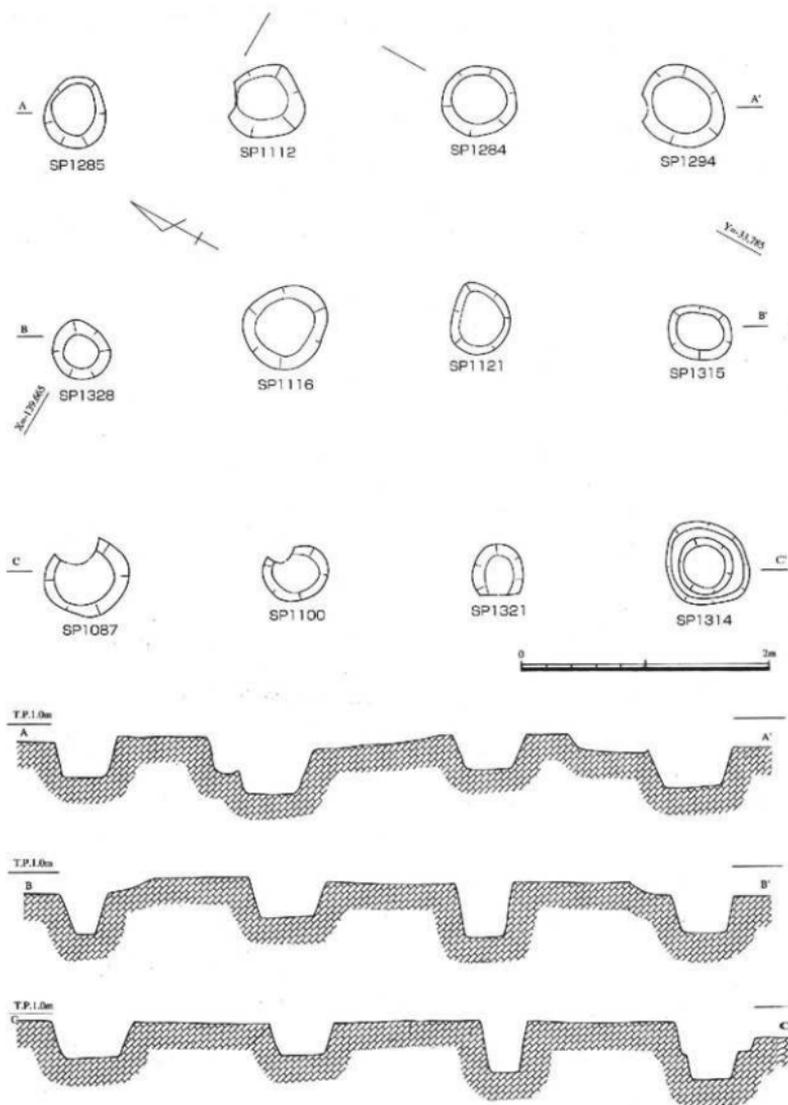
図化し得る遺物は出土しなかった。

3号掘立柱建物跡(第9図) 西側遺構群で検出された2間×3間の総柱の掘立柱建物跡である。5号竪穴住居跡の約8m南東側に位置する。検出面の標高はT.P.+0.9mを測る。

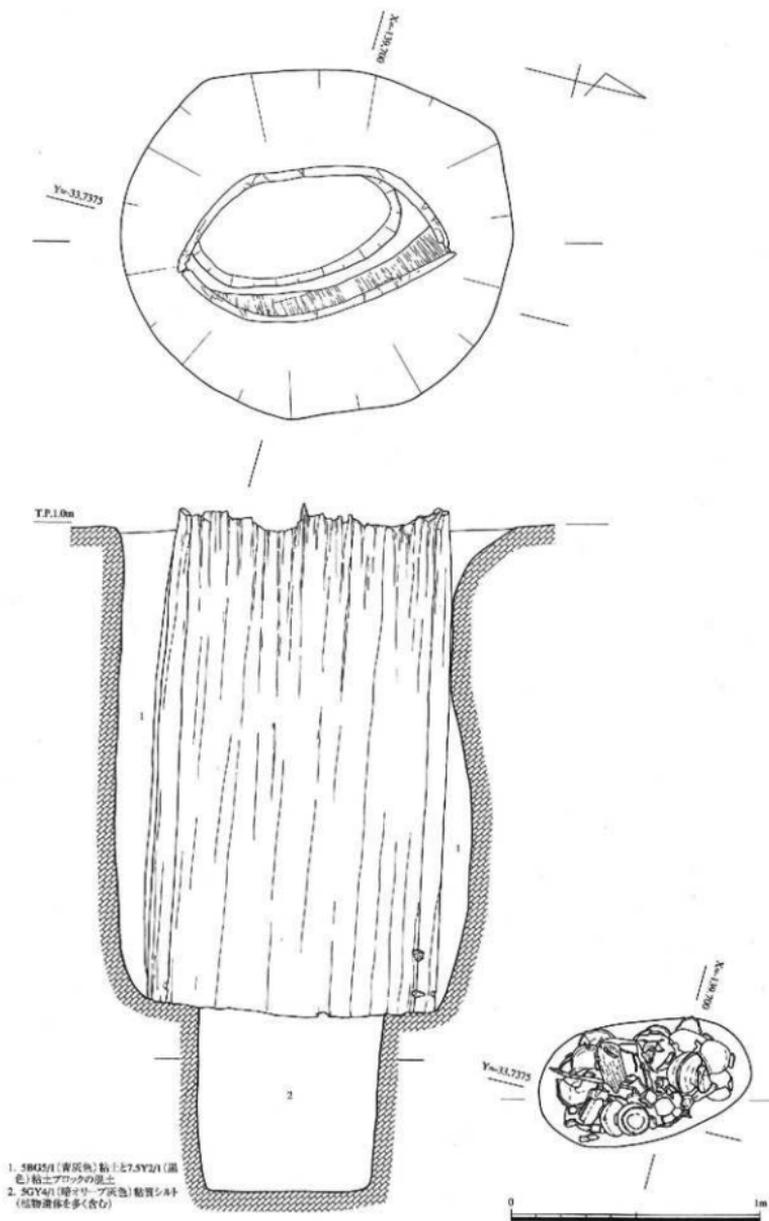
柱穴は最大0.7×0.7m、最小0.4×0.4mを測る略方形や円形の掘形を有し、深さ0.4mを測る。



第 8 图 2号掘立柱建物跡 平・断面図



第 9 图 3号掘立柱建物跡 平·断面图



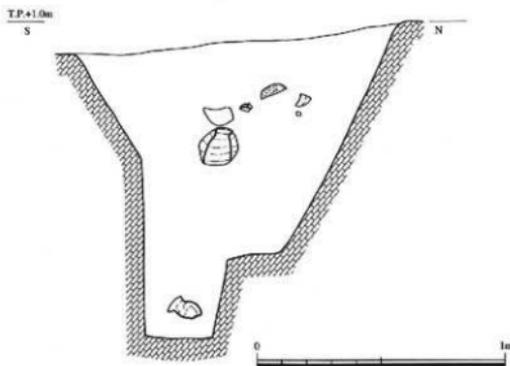
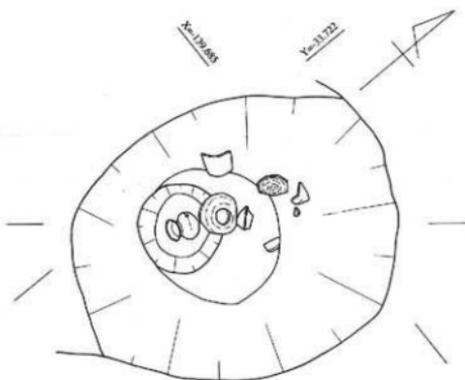
第10図 SE494 平・断面図

柱痕跡は検出できなかった。
 梁間3.9m、桁行5.0m、床面積19.5㎡を測る。

図化し得る遺物は出土しなかった。

SE494 (第10図 図版8・19) 東側遺構群で検出された木枠を持つ井戸である。2号堅穴住居跡の3m西側に位置する。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

掘形の平面形は、径1.5mを測る円形を呈し、断面の形状は長方形で、深さ1.9mを測る。掘形内には、朝船を切断したものを2枚合わせて立て、井戸枠としている。井戸枠の平面形は0.5×1.0mの楕円形を呈する。井戸枠は、掘形の北側に寄せて据え付け、掘形を埋め戻すが、井戸枠はやや東に傾斜する。



第11図 SE590平・断面図

井戸枠に転用された朝船は、杉の巨木を削り抜いたものである。西側に使われた井戸枠(第22図-1)は、幅125cm、長さ210cm、厚さ6~9cmを測る。断面の形状は上に向かって開く浅いU字状を呈し、船底部は平らである。内側の船底幅50cmを測る。舷側側への立ち上がりは、外側で高さ40cmを測るが、井戸枠への転用時に、その上面が削られていた。しかし部分的に舷側板を載せるための仕口がU字状に削り込まれているのが観察された。上から見て右側の舷側立ち上り上部に1ヶ所の穴が穿孔されていた。井戸枠として使用された上部側は腐食により原形を留めないが、底部側に使われた端面には、朝船切断時に残された鉄製工具による切断痕が明瞭に残存する。

東側に使われた井戸枠(第22図-2)は、幅120cm、長さ214cm、厚さ7~10cmを測る。断面の形状は上に向かって開く浅いU字状を呈し、船底部は平らである。内側の船底幅60cmを測る。舷側側への立ち上がりは、外側で高さ40cmを測るが、井戸枠への転用時に、左側舷側の立ち上がりりと右側舷側の上面が僅かに削られていた。右側舷側の端部は比較的良好に残存し、舷側板を載せる

ための仕口がL字状に刳り込まれているのが観察された。仕口の水平部5cm、立ち上がり5cmを測る。井戸枠として使用された上部側は腐食により原形を留めないが、底部側に使われた端面には、刳船切断時に残された鉄製工具による切断痕が明瞭に残存する。

兩刳船は残存する切断面では接合しない。また船底部の幅、復元した舷側部の幅も一致しないが、同一船体の中央部分と舷側には縫に寄った部分との差異であると考えられ、転用前の加工痕跡から舷側板を継ぎ足す形式の準構造船と考えられる。

出土遺物(第23・24図-1~31) 井戸枠内部の埋土からは少量の遺物が出土しただけであったが、井戸の底から、井戸枠の平面形を一回り小さくした土坑が検出された。その形状から、井戸枠設置後に掘られたと考えられる。深さ0.7mを測り、土坑底から0.6mの高さまで、土器が30点以上埋納されていた。土坑底には、土師器甕の上半部を打ち欠いた土器が数点検出され、その上部には多数の小型、中型の土師器甕や須恵器の小型壺、甕が検出された。最上部からは大型甕が検出された。第23図-6の甕には木栓が外側から詰められていた。

また、これらの土器群の間から、馬の頭骨片・中節骨、犬の頸椎・腰椎などが検出された。

SE590(第11図、図版9・19) 東側遺構群で検出された茶掘りの井戸である。2号掘立柱建物跡の南東4mに位置する。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

掘形の平面形は、1.1×1.4mを測る楕円形を呈し、断面の形状は逆台形で、深さ1.0mを測る。この井戸底の南側に寄せてさらに深く土坑状に掘り込む。径0.35m、深さ0.35mを測る。

出土遺物(第25図-1~4) 井戸を埋め戻す際に埋められた状態で遺物が出土した。2は口縁部を欠く平底の陶質土器の壺で、その形態、胎土から百済地域で作られたものと考えられる。また4は井戸の最深部から単独で出土した甕で、注口部には竹製の注口が残存していた。

SE542(付図、図版10) 東側遺構群で検出した茶掘りの井戸である。1号竪穴住居跡の1.5m南側に位置する。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

掘形の平面形は径1.5mの円形を呈し、断面の形状は深い逆台形で、深さ2.6mを測る。

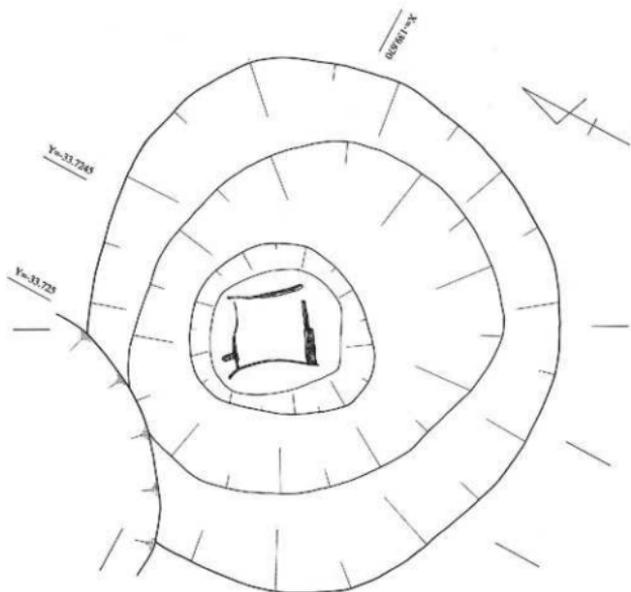
出土遺物(第25図-8・11、第21図-4、第22図-7) 井戸の最深部から第25図-8・11の土師器甕、滑石製勾玉(第21図-4)が出土した。また井戸を埋め戻す際に、多量の焼け焦げた部材が投棄されており、これに混入して槽(第22図-7)が出土した。

検出した調査範囲では、火災にあった住居等は検出されておらず、調査区外の東側に焼けた部材を投棄する原因となった遺構が存在すると考えられる。

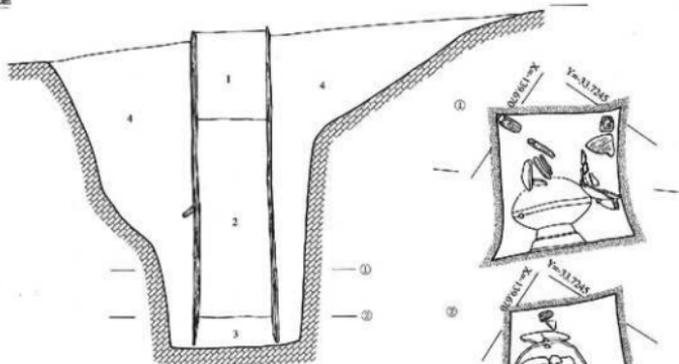
SE676(付図) 東側遺構群で検出した茶掘りの井戸である。1号竪穴住居跡の10m北側に位置する。SE695と隣接し、切り合い関係を持って新しい。検出面の標高はT.P.+0.8mを測る。

二段の掘形を有し、上段の掘形の平面形は径1.3mの円形を呈し、下段は径0.8mの円形を呈する。断面の形状は錐鉢状に落ちる上段と下段は深い逆台形を呈し、深さ1.2mを測る。

出土遺物(第25図-5) 掘形上段の中央部で、伏せ置かれた状態で土師器甕が出土した。井戸を埋め戻す際の儀礼的な埋納状況と考えられる。



T.P.1.0m



1. 5B41 (暗栗灰色)粘土
2. 7.5Y5/2 (灰オリーブ色) 積層土
(継体遺物多量に含む)
3. 2.5Y3/1 (黒褐色) 粘土 (砂混じり)
4. 10Y3/4 (緑灰色) シルト+7.5Y7/2 (灰白色) シルト
10Y4/1 (赤色) 粘土の混じり上



第 12 図 SE695 平・断面図

SE695 (第12図、図版11) 東側遺構群で検出した木枠を持つ井戸である。1号竪穴住居跡の10m北側でSE676に隣接する。検出面の標高はT.P.+1.0mである。

掘形の平面形は径1.9~2.2mの円形を呈し、二段に掘り込む。断面の形状は深い逆台形で、深さ1.4mを測る。掘形内には幅30~35cm、長さ136~140cm、厚さ2cmの板材を4枚組み合わせて中央部に立て、回りを埋める。板材で組み合わされた枠内の大きさは、24~28cmの方形で、井戸枠とするにはあまりにも狭いが、他に用途が考えられないため、井戸として報告する。

井戸の最深部から径20cmを測る瓢箪とその下部に突き刺さった状態で丹塗り磨研土器の小型壺が出土した。また中層以下では須恵器壺、杯等が比較的多量に出土した。上層は井戸を廃絶させる際の埋土と考えられる。

SE1613 (付図、図版12) 西側遺構群で検出した素掘りの井戸である。5号竪穴住居跡の9m南側に位置する。検出面の標高はT.P.+0.7mを測る。

掘形の平面形は径2.5~2.7mの円形を呈し、三段に掘り込まれ、断面の形状は深い逆台形で、深さ1.8mを測る。

出土遺物(第25図-9・10・12) 井戸の最深部から口縁部を欠損させた土師器壺10と9・12の土師器壺が出土した。

SE1501 (第13図、図版9) 西側遺構群で検出した木枠を持つ井戸である。3号掘立柱建物跡の11m東側に位置する。検出面の標高はT.P.+1.1mを測る。

掘形の平面形は径2.3~2.8mの楕円形を呈し、二段に掘り込む。断面の形状は深い逆台形で、深さ2.3mを測る。掘形内には多種類の板材を組み合わせて井戸枠を作る。

井戸枠は、上段掘形の底に幅20cm、長さ100cm、厚さ7cmの板材を80cm離して平行に並べ、その上に直交して幅20cm、長さ120cm、厚さ8cmの板材を55cm離して平行に並べて井桁状に組み合わせる。短辺側上部に、湾曲した幅60cm、高さ80cm、厚さ4cmの板材を立て、小口部とする。この小口を挟むように幅25~35cm、長さ90cm、厚さ3cmの板材を三段に積み上げる。素掘り井戸の上段掘形に井戸枠が組まれていた形態である。

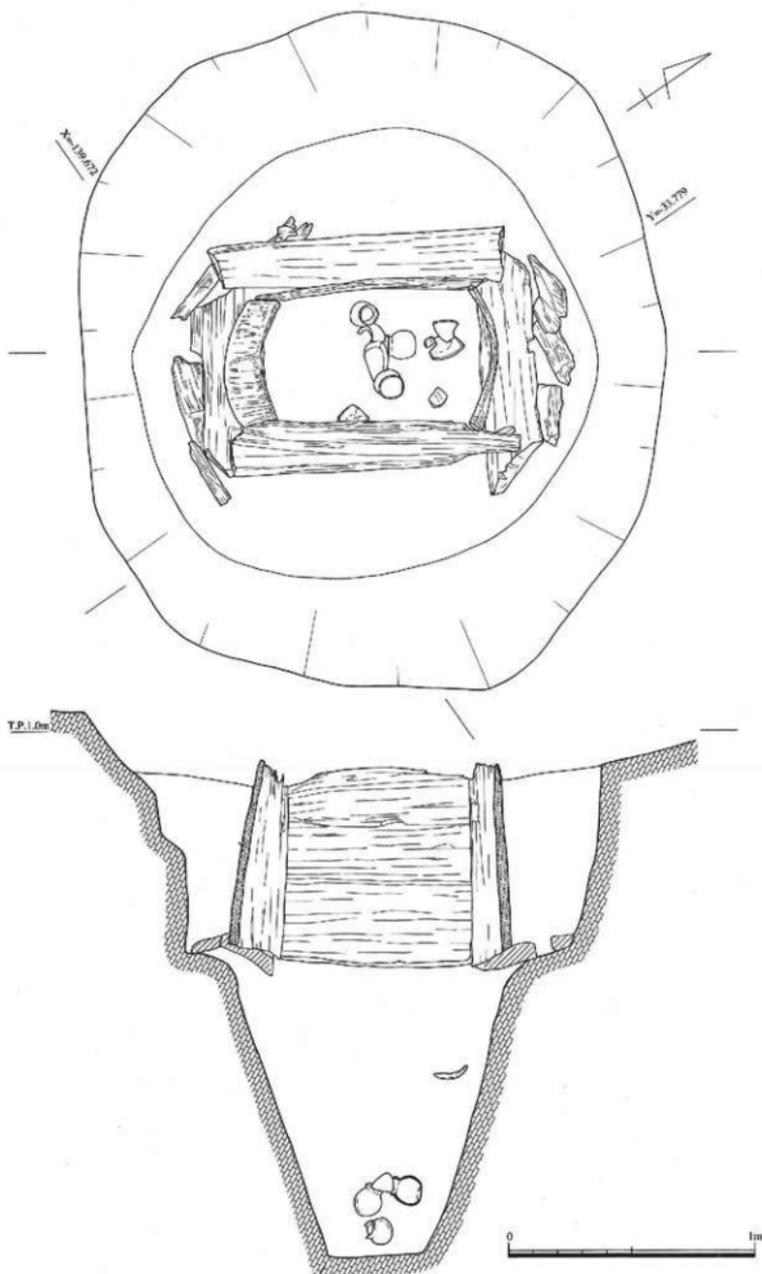
井戸枠に転用された板材の樹種はスギであり、剝船を解体したと考えられる厚さ、形状のものが数多く見られる。うち1点は、艀部に近い反りを有する部材である。

井戸内埋土から多数の土器片等が出土したが、最深部から土師器の小型壺が3点出土した。

SK435 (付図) 東側遺構群で検出した土坑である。1号竪穴住居跡の北東壁に重複して検出された。検出面の標高は、T.P.+1.0mを測る。

土坑の平面形は、南北方向に長い長方形を呈し、北側短辺はやや弧を描く。長辺3.7m、短辺3.0m、深さ0.2mを測る。

出土遺物(第26図-1~3・5~7、第18図-7) 埋土中から、須恵器高杯、高杯蓋、杯蓋の他、多量の須恵器、土師器、滑石製臼玉等が出土し、また土坑最上層から鉄製曲刃鎌(第18図-7)が出土した。遺物以外にも埋土には炭が混入していたが、鉄滓等の鍛冶に関する遺物は



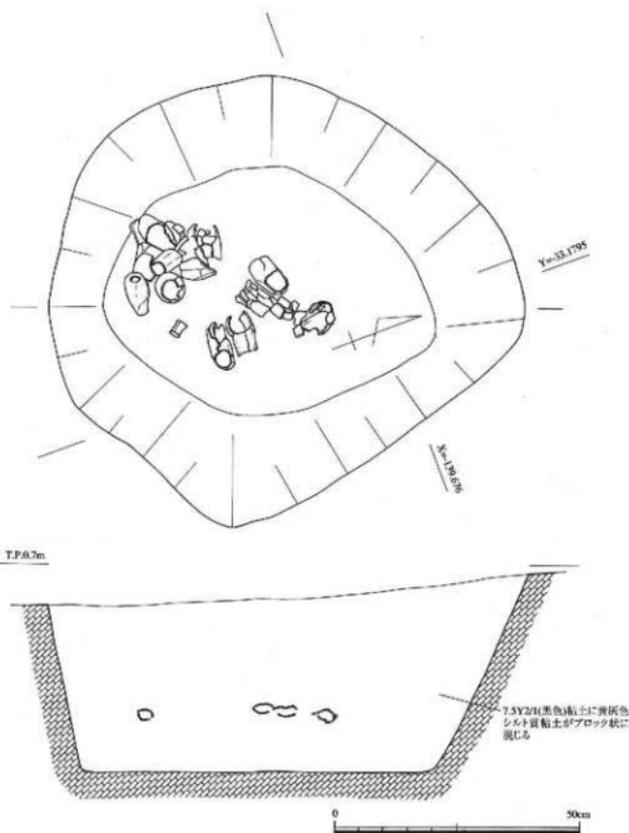
第 13 圖 SE1501 平・断面圖

出土しなかった。

SK1632 (第14図、図版16) 西側遺構群で検出した土坑である。3号掘立柱建物跡の南西10mに位置する。東西に走るSD951の内側で検出されたため、検出面の標高は、T.P.+0.7mを測る。

土坑の平面形は、0.9m四方の略方形を呈し、西側辺はやや弧を描く。深さ0.4mを測る。

遺構内は人為的に埋めたと考えられるブロック土が観察され、土坑底から0.1mの高さに揃えて11数点の製塩土器(第27図-1~11)が壊されないまま置かれていた。



第14図 SK1632 平・断面図

SK1639 (付図) 西側遺構群で検出した土坑である。SK1632の南西5mに位置する。東西に走るSD951の内側で検出されたため、検出面の標高は、T.P.+0.6mを測る。

土坑の平面形は、1.3×0.9mを測り、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土にはブロック土が混じり、人為的に埋められたことがわかる。

出土遺物(第26図-22~24) 土坑の最上層から図示した須恵器高杯蓋、土師器甕等が出土した。

SK1654 (付図) 西側遺構群で検出した土坑である。SK1639の西2mに位置する。東西に走るSD951の内側で検出され、検出面の標高は、T.P.+0.6mである。

土坑は調査区の西壁近くで検出され、西側の端部が調査区外に延びるため、全体の形状を知ることができない。土坑の平面形は、幅2.7m、長さ3.0m以上、深さ0.4mを測るが、北側の幅1.5mを測る土坑と、南側の幅1.0mを測る細長い土坑とが平行し、調査区壁近くで繋がった平面形を示

す。上坑底に0.02mの粘質土が堆積した直上に厚さ0.04mの炭層が全面に広がる。

出土遺物（第26図-9～14、第18図-10） 図示した須恵器高杯、甕、杯身、土師器甕等は先述した炭層直上から出土した。第18図-10は碗形滓であり、埋土に見られる炭層から、鍛冶関連の遺構と考えられる。また上層の埋土からも須恵器、土師器が多量に出土した。

SK1394（付図） 西側遺構群で検出した土坑である。SK1135の東15mに位置する。南北に走るSD1189の溝底で検出されたため、検出面の標高は、T.P.+0.6mを測る。

土坑の平面形は、1.5×1.0mを測り、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。

出土遺物（第26図-15・19） 土坑の最上層から図示した須恵器と土師器の壺、土師器甕等が出土した。

SK1393（付図） 西側遺構群で検出した土坑である。調査区の南端部に位置する。大きな落ち込み内で検出されたため、検出面の標高はT.P.+0.5mを測る。

土坑の平面形は、径1.0mを測る円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は黒色シルト質粘土単層であったが、炭の混入が観察された。

出土遺物（第26図-8） 土坑の最上層から図示した土師器甕が出土した。

SK1771（付図） 西側遺構群で検出した土坑である。調査区の南西端に位置する。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

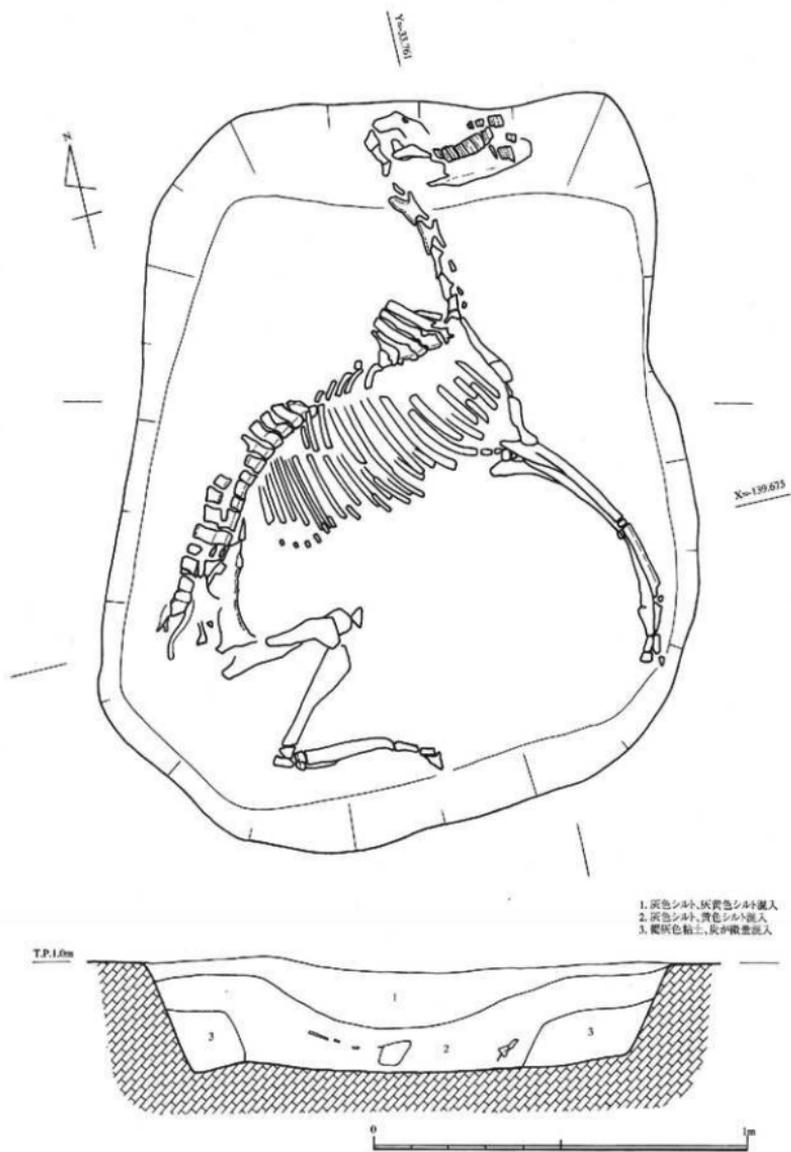
土坑は土層観察用の西壁内で検出されたため、北と南で3.0m離れて平行する土坑の肩を検出した。東側は側溝で破壊され、西側は調査区外に延びるため平面形は不明である。深さは0.2mを測る。

出土遺物（第26図-16～18・20・21） 土坑底からやや浮いた状態で、須恵器高杯、土師器高杯等が出土した。

SK1135（付図、図版16） 第2次試掘調査によって検出された土坑で、今回の調査で全体像が明らかとなった。平面プランは長楕円形で長さ6.1m以上、幅約2.0m、深さ0.7mをはかる。埋土は大きく上下二層に分けられる。上層は機能消失後の窪みに堆積した土層で、古墳時代後期の土器が出土している。下層は焼土・灰層が介在しているが、出土遺物に時期差は認められなかった。

出土遺物（第28・29図、図版22） 下層から多量の5世紀後半～末の須恵器・土師器とともに鳥足文タタキメの認められる陶質土器や滑石製の双孔円板、滑石製の白土、そして移動式かまどやU字形板状土製品が出土した。さらに炭層や灰層に混じって夥しい数の製塩土器（推定1500個体、重量約76kg）が同時に発見され、付近で粗塩を精製していた可能性が考えられた。

SK940（第15図、図版13～15） 調査区のはほぼ中央部、区画溝SD428の西側に接して検出された。土坑の平面形は、隅丸長方形を呈し、長辺203cm、短辺152cm、深さ約30cmをはかる。土坑内から馬の全身骨格が埋葬された当時の姿勢を良好に保った状態で出土した。この遺構から獣骨以外の時期を判別する遺物は出土しなかったが、第12面（古墳時代中期の遺構面）で検出したこと



1. 灰色シルト、灰黄色シルト混入
2. 灰色シルト、黄褐色シルト混入
3. 黄褐色粘土、灰が散在混入

第 15 図 SK940 馬全身骨格出土状況図

から、5世紀後半と考えられる。馬は、頭部を北に置き、右側を上にした横臥姿勢で出土した。鼻先を東に、前肢は伸展、後脚は折り曲げていた。年齢は切歯の咬耗程度及び臼歯高から5～6歳と推定された。前脚を伸展して状態で検出できたことから、体高は約125cmで、日本在来馬でいう御崎馬(体高124～130cm)の小さいクラス程度の体格である。

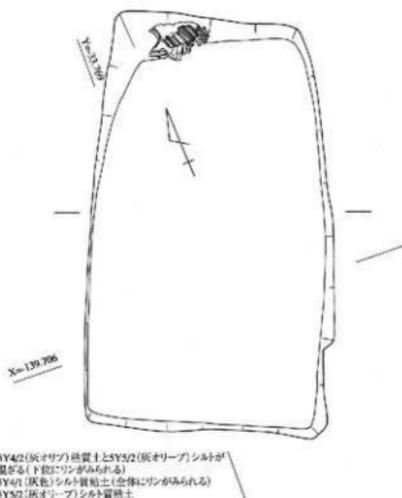
古墳時代中期の馬埋葬土坑はいくつか知られているが、骨格の一部分が残るのみで、土坑の大きさや骨の位置関係から馬そのものを埋葬したことがわかる例が大半である。また、古墳時代中期の馬の大きさは、いままで一部分の骨の長さから推定されていたが、全身骨格が残っていたことで、当時の馬の大きさを知る上で貴重な資料といえる。さらに従来、古墳時代の馬埋葬土坑は、古墳に伴うものがほとんどで、集落域から見つかった例は今回がはじめてである。

なお、各部骨の詳細な計測値については、現在、馬埋葬土坑を取り上げて保存処理中であるため、来年度以降に報告する予定である。

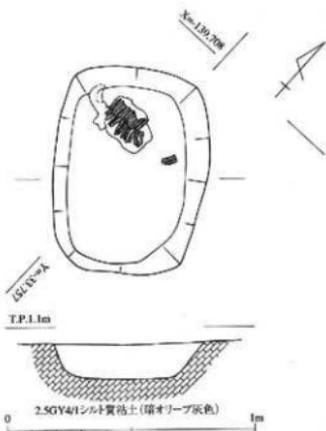
SK1345 (第16図、図版15) 調査区の中央南側、SK940の南30mで検出された土坑である。検出面の標高はT.P.+0.9mを測る。

土坑の平面形は長方形を呈し、北側辺0.8m、南側辺1.0m、東西両側とも1.7mを測る。土坑内の埋土は図示するように3層に分かれ、上層の下位と中層の全体でリン分が検出された。断面の形状は、ほぼ垂直に掘り込んだ壁面と、底は平坦である。深さ0.25mを測る。

土坑北側壁で馬の上下顎骨が検出された。馬の頭を土坑の小口側壁に持たせ掛けた状態は、馬の全身骨格



第16図 SK1345 平・断面図



第17図 SK655 平・断面図

が埋葬された状態で検出されたSK940と同様である。当土坑では馬の頭部のみで、他の骨を検出することができなかったが、埋土中に広くリン分が検出できたことから、本来馬の全身が埋葬されていたと考えることができる。

SK655 (第17図、図版15) 調査区の中央南側、SK1345の東11mで検出された土坑である。検出面の標高はT.P.+0.9mを測る。

土坑の平面形は、長辺0.8m、短辺0.6mを測る隅丸の長方形で、埋土は単層である。断面の形状は浅いU字状を呈し、深さ0.15mを測る。

土坑内から馬の上下顎骨が出土した。顎骨は横臥した状態で土坑内の北側に偏在していることから、頭と首の一部が埋納されたと考えられる。

SD428 (付図) 調査区の南東端から調査区の中央北側で検出された溝である。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

溝の主軸は南東―北西方向を向き、中央やや北側で西岸は西方向に向きを変え、SD950を横断する形で北に向かい、最後は東に向きを変える。東岸はSD428に当たった所で西に向きを変え、不明瞭であるが北に回りこんだ西岸とともに北岸を作るものと考えられる。

溝の幅は、断面観察を行った北側で20m、南東側で30mを測る。堆積の状況は最上層に灰オリブ粘質土(5Y4/2)が、0.4mの深さで溝幅全体に堆積し、6世紀中葉の遺物を包含する。上層除去後には10m幅で、周辺遺構と同時期の遺物が出土する中層が0.3m堆積する。最下層は一段下がった状況で深さ0.1~0.2mの溝を形成する。埋土は炭化物が多量に混ざった黒色シルト質粘土(7.5Y2/1)である。断面の形状は浅いU字状を呈し、深さ0.8~1.2mを測る。

この溝は、調査区中央部北側を溝の北西岸とし、南東方向へゆるやかに流下して行く大規模な区画溝と考えられる。

出土遺物(第30図-1~14、第21図-8・9、第18図-11、第19図-6) 溝内の最上層からは、第30図-1・2に示す時期の杯身、杯蓋等が出土した。中層、下層からは図示した須恵器高杯、土師器カマド、高杯以外にもTK23或いはTK208段階の須恵器が出土し、滑石製双孔円板(第21図-8・9)、砥石(第19図-6)、白玉も多数出土した。また調査区南東隅の、土層観察用畦をくずす際に碗形滓(第18図-11)が出土した。遺物の出土量を観察すると、中・下層出土遺物の総量は、溝の規模や集落域に隣接することから考えてもかなり少量の出土だといえよう。

SD434 (付図) 調査区の北端、中央部から東側で検出された溝である。検出面の標高はT.P.+1.0mである。

1号獨立柱建物跡付近を南岸として緩やかに北に向かって落ちて行き、調査区中央部付近を溝の始まりとして、SD428と同様の区画溝であると考えた。しかし隣接するB調査区の調査が進み、この溝は北東方向に向かって開く谷地形の南岸であることが判明した。

出土遺物(第40図-1~6、第21図-1、第22図-6) 須恵器杯身、杯蓋、壺、土師器高杯を冴化した。溝内埋土から他に多量の須恵器、土師器、滑石製勾玉(第21図-1)、白玉が出土し、

もっとも浅くなった調査区中央部では木片が散在し、木器（第22図-6）もここから出土した。

SD429（付図） 調査区の北東側、東側遺構群の北側を画するように東西方向に検出された溝である。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

SD428の北東コーナーから北東方向に伸び、東に向きを変えて、1号掘立柱建物跡の2m西側で端部を方形にして止まる。溝の幅、2.2~6.0m、深さ0.6mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈し、埋土は大きく3層に分かれる。上・中層は炭の混じる灰色粘土、下層は灰色シルト質粘土である。

出土遺物（第31図-1~9・13） 須恵器壺、高杯蓋、土師器高杯、甕等多数の遺物が出土した。3は平底の韓式系土器、13は把手の付く脚付きの鉢（須恵器）である。また滑石製白玉も数点出土した。

SD950（付図、図版18・20・21） 調査区の北西側、西側遺構群の北側を画するように東から北へ弧を描くように検出された溝である。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

SD428の北西突出部から西方向に伸び、円弧を描きながら北に向きを変えて、B調査区へと伸びる。溝の幅、5.0~6.0m、深さ0.6mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈するが、深さ0.40mのところまでテラスを作り、二段掘りとなる。下段の幅2.0m前後、深さ0.2mを測る。埋土は大きく3層に分かれる。上段の上・中層は炭の混じる黄灰色~オリーブ黒色粘土、下層はオリーブ黒色シルト質粘土である。

出土遺物 上・中・下層の各上層ごとに取り上げを行った。上層（第32~34図-1~70）からは須恵器杯、高杯、甕、土師器高杯、甕、甌、U字形板状土製品、滑石製白玉等多数の遺物が出土した。中層（第35図-1~10）からは、須恵器杯、壺、土師器が出土した。上層との時期差はあまりない。下層（第36~39図-1~51）からは須恵器杯、高杯、壺、土師器甕、甌、高杯、滑石製白玉等比較的多数の遺物とともに溝内の二ヶ所から馬の歯が出土した。第38図-49の高杯は、浅い杯部、柱状の脚柱部、大きくハ字状に広がる脚裾部など、この時期に見られない器形で、杯部、脚部に沈線が施している。

埋土の堆積状況、出土遺物の様相から見て、上記のSD429とSD950と同一の溝であった可能性があり、本来同一遺構であった両溝をSD428が切っていると考えられる。

SD1244（付図） 調査区西側の中央部を東西に横切るように蛇行して検出された溝である。西側遺構群の南を区画するように検出されたSD951の最も深い部分で検出されたため、検出面の標高はT.P.+0.6mを測る。

溝の幅1.0~2.5m、延長26m、深さ0.1mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。

出土遺物（第40図-7~12） 溝内各所から陶化した須恵器杯、壺、甌や他に滑石製白玉等が出土した。

SD1192（付図） 調査区中央部の南端から北西方向に検出された溝である。南は調査区外へ伸び、北西はSD951に当たって止まる。調査区を東西に分けて調査を行ったため、東半をSD651

西半をSD1192としたが、本来同一の溝であると判明したため、ここではSD1192として一括して報告する。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

溝の幅0.8~2.5m、延長32m、深さ0.3mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈し、埋土は上下2層に分かれる。

出土遺物(第31図-17・18) 溝内西端の幅が細くなった部分で図化した土師器甕、鉢が出土した。他に須恵器等の小片も出土したが、図化し得なかった。

SD1231(付図、図版17・21) 調査区中央部の南端から北西方向に、SD1192と並行するように検出された溝である。南は調査区外へ伸び、北西方向へ20mの所で南北方向の6世紀の溝に当たる。溝は一度北へ折れ再び北西に折れてSD951に流れ込むが、遺物の出土状況や、埋土の様子から、ここでは別の溝としておく。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

溝の幅1.5~1.8m、延長20m、深さ0.4mを測る。断面の形状はU字状を呈し二段掘りとなる。埋土は3層に分かれる。

出土遺物(第42・43図-1~17) 溝内埋土の上層から図化した土師器甕、須恵器杯、高杯、甕等が出土した。

SD957(付図) 調査区の中央部で南北方向に検出された溝である。溝の北端は、馬を埋葬したSK940の南西4mに位置する。検出面の標高はT.P.+0.9mを測る。

溝の幅0.8m、延長19m、深さ0.4mを測り、断面の形状はU字状を呈する。埋土は3層に分かれる。

出土遺物(第31図-10・19) 溝内埋土の上層から陶質土器の甕(19)、下層から鉢(10)が出土した。

SD1189(付図) 調査区西側の南端から北方向に、SD1215と並行するように検出された溝である。南は調査区外へ伸び、北方向へ20mの所でSD1231の延長方向の東西溝に当たる。検出面の標高はT.P.+0.8mを測る。

溝の幅1.5~2.5m、延長20m、深さ0.2mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。埋土は2層に分かれる。

出土遺物(第31図-11・12・14) 溝の北側、SK1394の1.5m南側で図化した須恵器壺、土師器高杯等が出土した。

SD1215(付図) 調査区中央部やや西側の南端から北方向に、SD1189と並行するように検出された溝である。南は調査区外へ伸び、北方向へ8mの所でSD1231に当たる。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

溝の幅1.3m、延長8m、深さ0.1mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。埋土は2層に分かれるが、下層はSD1224の埋土である。第31図-16に示す土師器鉢が出土した。

SD1224(付図) 調査区中央部やや西側でSD1215の延長方向に、SD1189と並行するように検出された溝である。南はSD1215と重なり調査区外へ、北方向へ16mの所でSD1192に当たる。検出面の標高はT.P.+1.0mを測る。

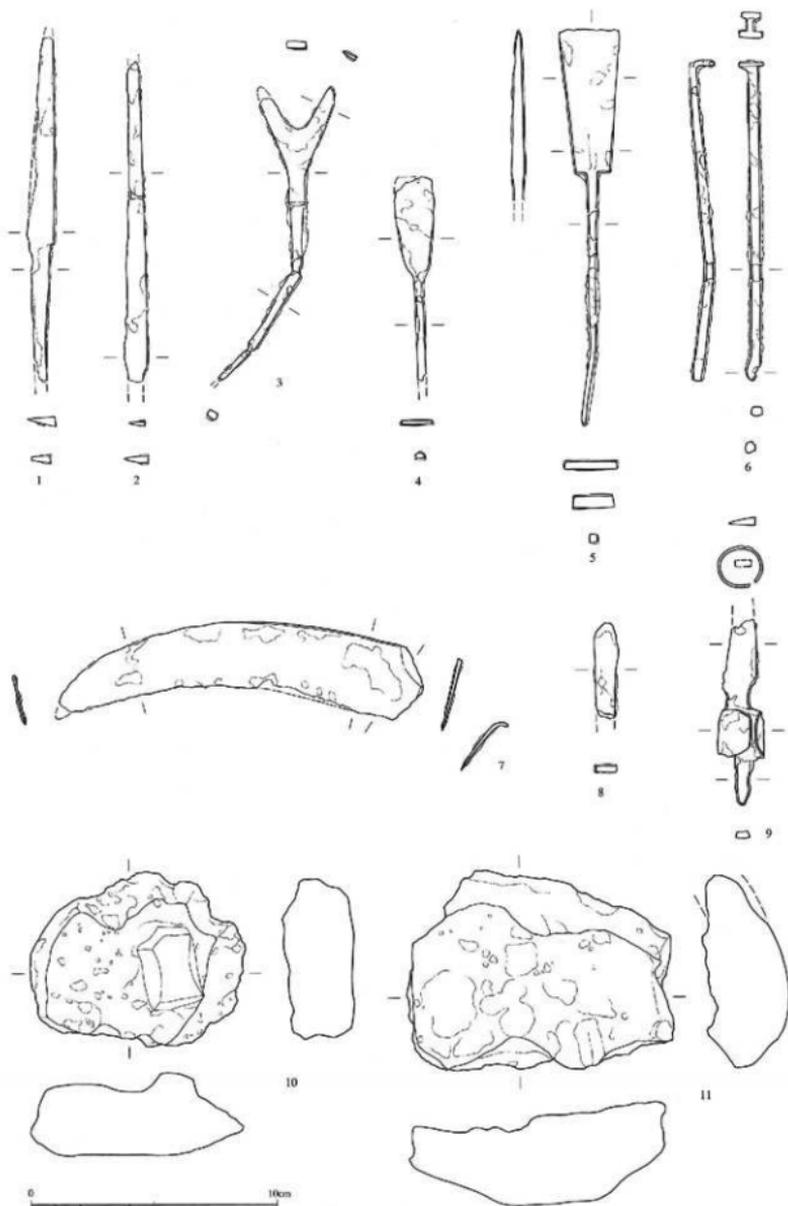
溝の幅0.3m、深さ0.05mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。埋土は単層である。第31

図-15に示す須恵器高杯が出土した。

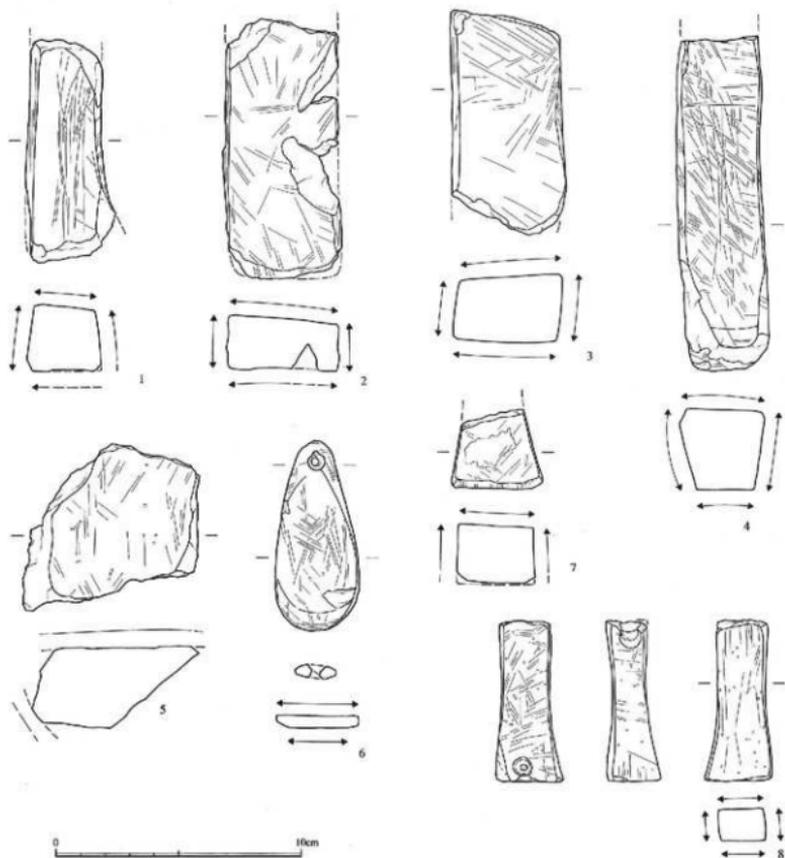
動物遺体 今回の調査で、以下の動物遺体が出土した。同定された動物名は、ウマ、ウシ、イヌ、カエル類、ネズミ類で、大半はウマである。

第1表 部屋北遺跡A調査区 動物遺体出土リスト

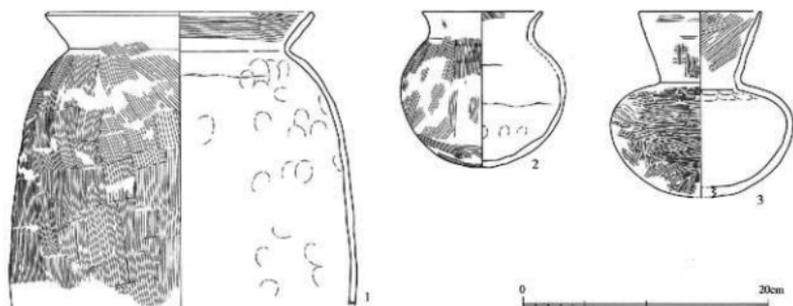
登録番号	出土場所	動物種	出土部位	特記事項	登録番号	出土場所	動物種	出土部位	特記事項
A0510	第12-818-10 溝内遺物群	ウマ	右上顎第3小臼歯		A1551	第12-818-10 溝内遺物群	ウマ	不明	歯骨片。
A0520	第12-818-9 溝内遺物群	ウマ	右下顎骨片。	溝の南縁部、交通路付近、溝12及び溝13。	A1567	第12-818-9 溝内遺物群	ウマ	歯骨骨片。	溝深縁、ウマ埋跡土。
A0525	第10-818-15 溝内遺物群	ウマウシ	歯骨片。			第12-818-9 溝内遺物群	ウマ	右肋骨骨片。	溝深縁、ウマ埋跡土。
A0549	第12-818-10 溝内遺物群	ウシ	中手骨片。	骨料層で固定・埋没跡は欠落。		第12-818-9 溝内遺物群	イヌ	歯4-1埋骨。	切歯部。
A0716	第12-818-8 溝内遺物群	ウマ	右上顎臼歯。		A1500	第12-818-g-94 溝下層	ウマ	中肋骨。	溝内に埋付、GL42.54m、BP 47.09m、DP28.01m、BD42.53m、DFP37.55m、右肋骨埋付跡の幅は3.7cm、長さ約7.4cm、厚12.45mm。
A0720	第12-818-9 溝内遺物群	ウマ	右上顎第3小臼歯、右上顎第3小臼歯。			第12-818-g-94 溝下層	不明	不明骨片。	
A0722	第12-818-9 溝内遺物群	ウマ	右上顎臼歯。		A1747	第12-818-g-10 溝下層	ウマ	右下顎第3小臼歯、右下顎第3小臼歯。	
A0738	第12-818-9 溝内遺物群	不明	不明骨片。		A1791	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	右上顎臼歯片。	
A0779	第12-818-g-6 溝内遺物群	ウマ	右上顎第2大臼歯。	破断。	A1797	第12-818-g-10 溝下層	不明	不明骨片。	白色化。
A0781	第12-818-h-6 溝内遺物群	ウマ	臼歯片。		A1798	第12-818-g-10 溝下層	不明	不明骨片。	白色化。
A0795	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマ	右下顎小臼歯。		A1816	第12-818-g-4 溝下層	イヌ	腕骨部、第3指骨。	溝内に埋付の方向は240度。
A0841	第12-818-3 溝内遺物群	ウマ	右上顎臼歯片。		A1823	第12-818-g-10 溝下層	不明	骨片。	白色化。
A0876	第12-818-4 溝内遺物群	ウマ	右下顎第1切歯。		A1959	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	下顎臼歯4。	破断。
A0878	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマウシ	不明骨片。		A1978	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	上顎臼歯4。	
A0904	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマ	左上顎第3小臼歯、左前手骨片	左前手骨片は近接部欠落。	A1980	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	右上顎第3小臼歯、右下顎第3小臼歯、上顎臼歯以上。	
A0911	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウシ	肋骨。		A1983	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	腰骨骨片。	臼歯のみ残存。
A0916	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマウシ	骨片。		A1998	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	左上顎臼歯1。	
A0920	第12-818-g-5 溝内遺物群	不明	骨片4。		A1999	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	腰骨骨片、左右下顎骨。	臼歯のみ残存、破断。
A0935	第12-818-4 溝内遺物群	不明	骨片6。		A2012	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	左下顎骨4。	切歯・臼歯のみ残存。
A0949	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマウシ	歯骨片。		A2015	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	右上顎臼歯4。	全部を欠す。
A0949	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマウシ	歯骨片。		A2016	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	右上顎臼歯2。	
A0949	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマウシ	歯骨片。		A2038	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	腰骨骨片、左右下顎骨。	BP40C埋付。其埋跡土上、土層が7層のみの場合、本層に埋付を要するとの見込みあり。
A1100	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマ	右上顎第3小臼歯。		A2054	第12-818-h-6 溝下層	不明	骨片。	
A1103	第12-818-g-5 溝内遺物群	不明	不明骨片。		A2055	第12-818-g-8 溝下層	ウマ	右上顎臼歯片。	埋跡縁、ウマ埋跡土。
A1341	第12-818-4 溝内遺物群	ウマウシ	不明骨片。			第12-818-g-10 溝下層	イヌ	腕骨部、第3指骨。	腕4指骨に近接部(腕骨部)を欠す。土層シロコニ。
A1366	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマ	右下顎第3小臼歯。		A2193	第12-818-g-94 溝下層	ウマ	左肋骨骨片。	骨片の一部残存。
A1371	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマ	上顎臼歯。	歯骨埋跡土。		第12-818-g-94 溝下層	カエル類	趾骨。	多数。
A1384	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマ	臼歯片。		A2255	第12-818-g-10 溝下層	ウマ	不明骨片。	不明骨片。
A1392	第12-818-g-5 溝内遺物群	ウマウシ	臼歯片。		A2619	第12-818-g-10 溝下層	不明	不明骨片。	動物骨(アザラシ骨?)、欠す。埋跡縁、ウマ埋跡土。
A1423	第12-818-g-8 溝内遺物群	ウマ	右上顎第2大臼歯。		A2633	第12-818-g-10 溝下層	ウマ	臼歯片。	両側埋跡。
A1436	第12-818-g-7 溝内遺物群	ウマ	右下顎第1切歯片。		A2635	第12-818-g-10 溝下層	ウマ	右下顎第2切歯片。	土層シロコニ上。
A1467	第12-818-h-7 溝内遺物群	ウマ	右上顎第1切歯、右上顎第1切歯、切歯片。	埋跡縁、ウマ埋跡土。		第12-818-g-10 溝下層	カエル類	不明趾。	
A1490	第12-818-g-5 溝内遺物群	不明	不明骨片。		A2670	第12-818-g-10 溝下層	ウマ	右下顎第1小臼歯。	
A1491	第12-818-g-5 溝内遺物群	不明	不明骨片。		A2717	第12-818-g-10 溝下層	ウマ	右下顎第1小臼歯。	



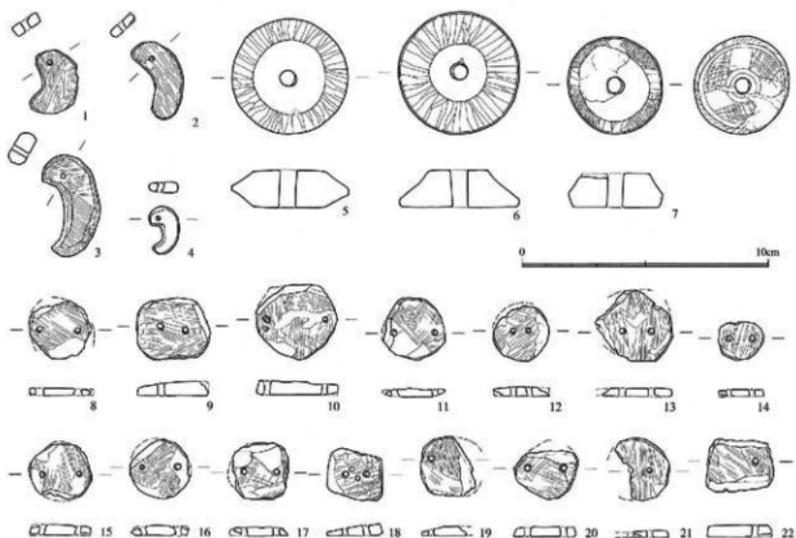
第18图 包含层、SK435·1654、SD428·950 出土遗物
 1·5·6 (第10层)、2·4 (第9层)、3 (第6层)、7 (SK435)、8 (SD950)、9·11 (SD428)、10 (SK1654)



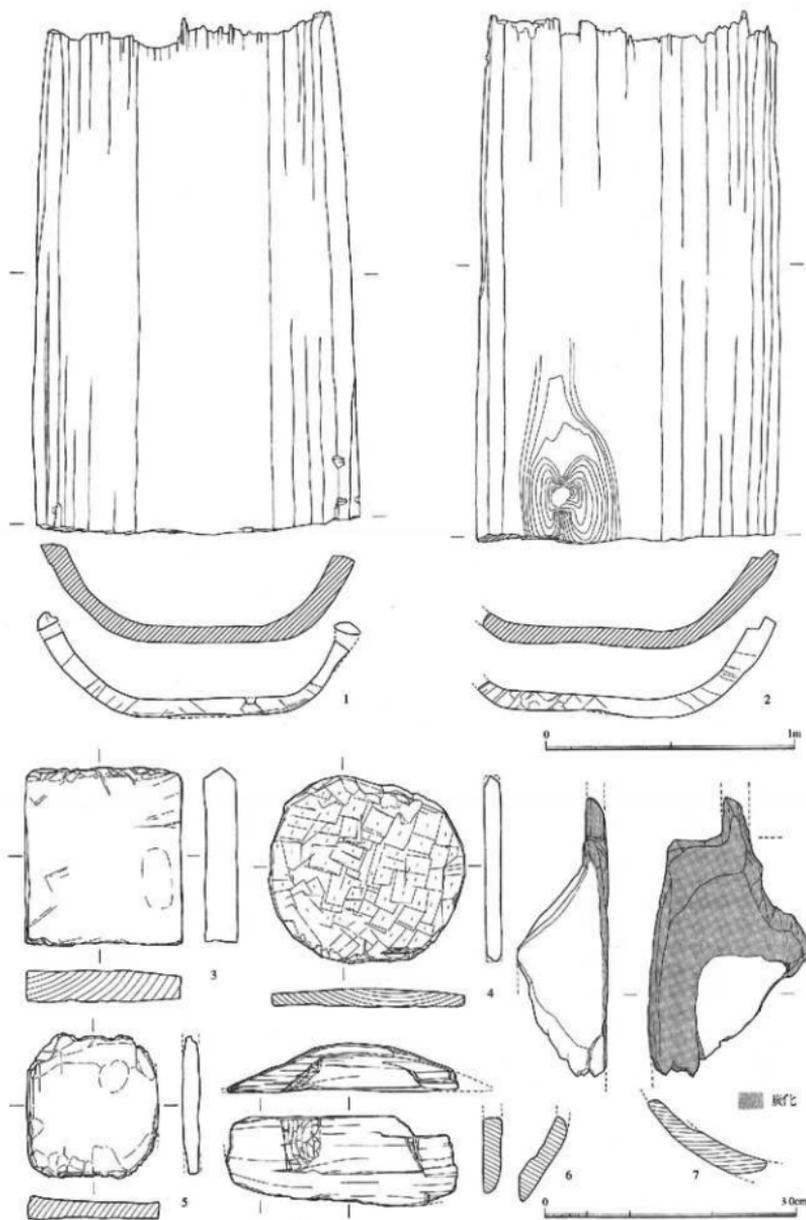
第 19 図 包含層、SB430、SK328、SD428 出土遺物
 1・3・7・8 (包含層)、2・6 (SD428)、4 (SB430)、5 (SK328)



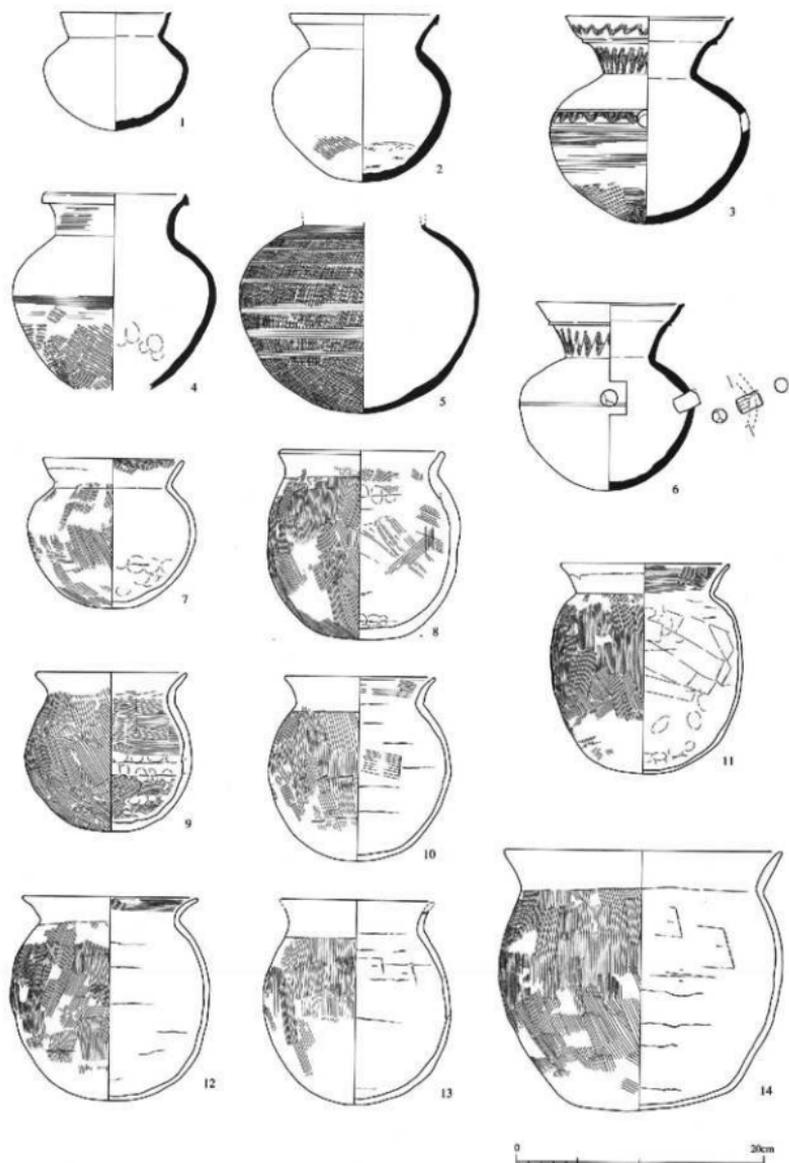
第20図 SP443・SK731 出土遺物
1・2 (SK731), 3 (SP443)



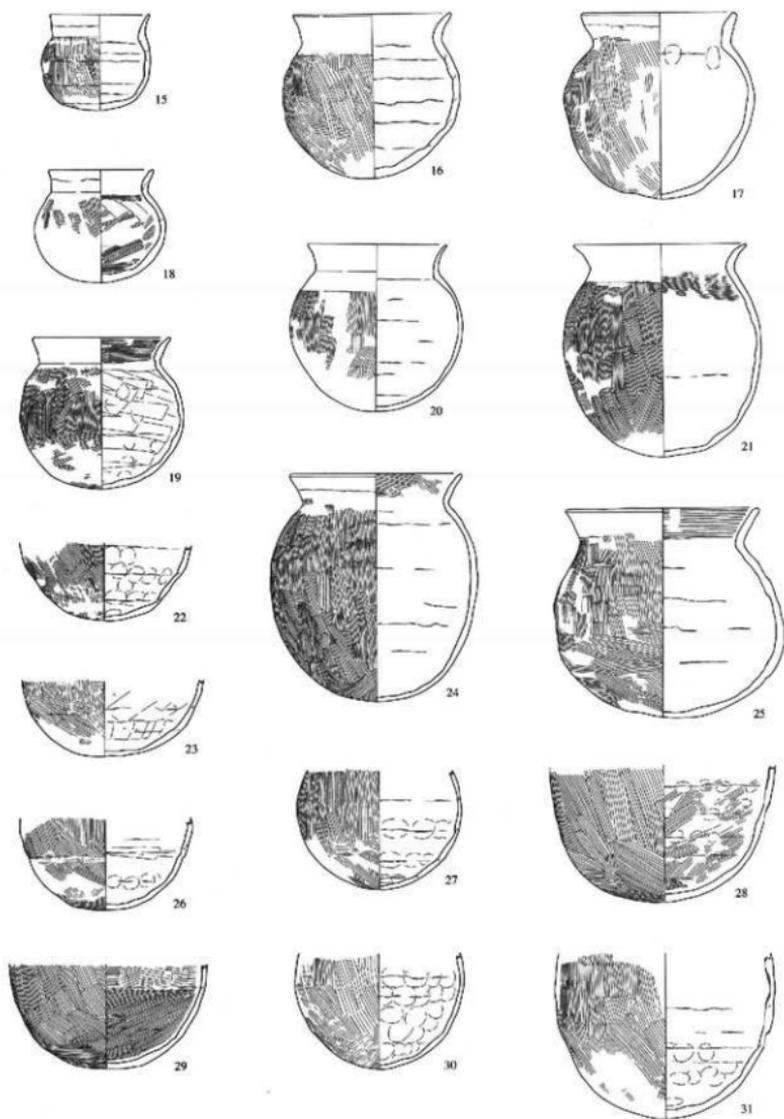
第21図 包含層、SP442・1238・1775、SE542・1613、SD428・434・951 出土遺物
1 (SD434), 2 (SE1613), 3 (SD951), 4 (SE542), 5・15~18・22 (第10層)
6・13・14 (第12層), 7・19~21 (第11層), 8・9 (SD428), 10 (SP442), 11 (SP1238), 12 (SP1775)



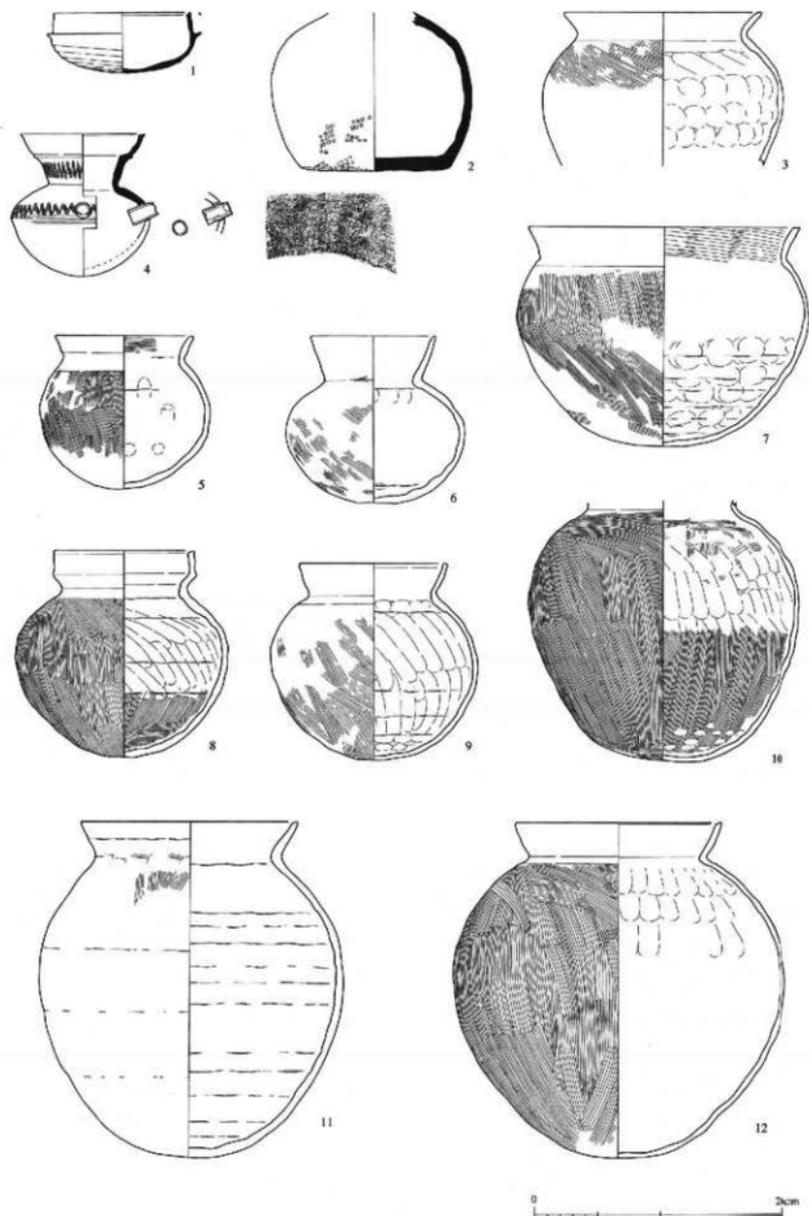
第22図 SP678、SE494・542、SD434 出土遺物
 1・2 (SE494)、3 (SP678)、4・5 (ヒット内)、6 (SD434)、7 (SE542)



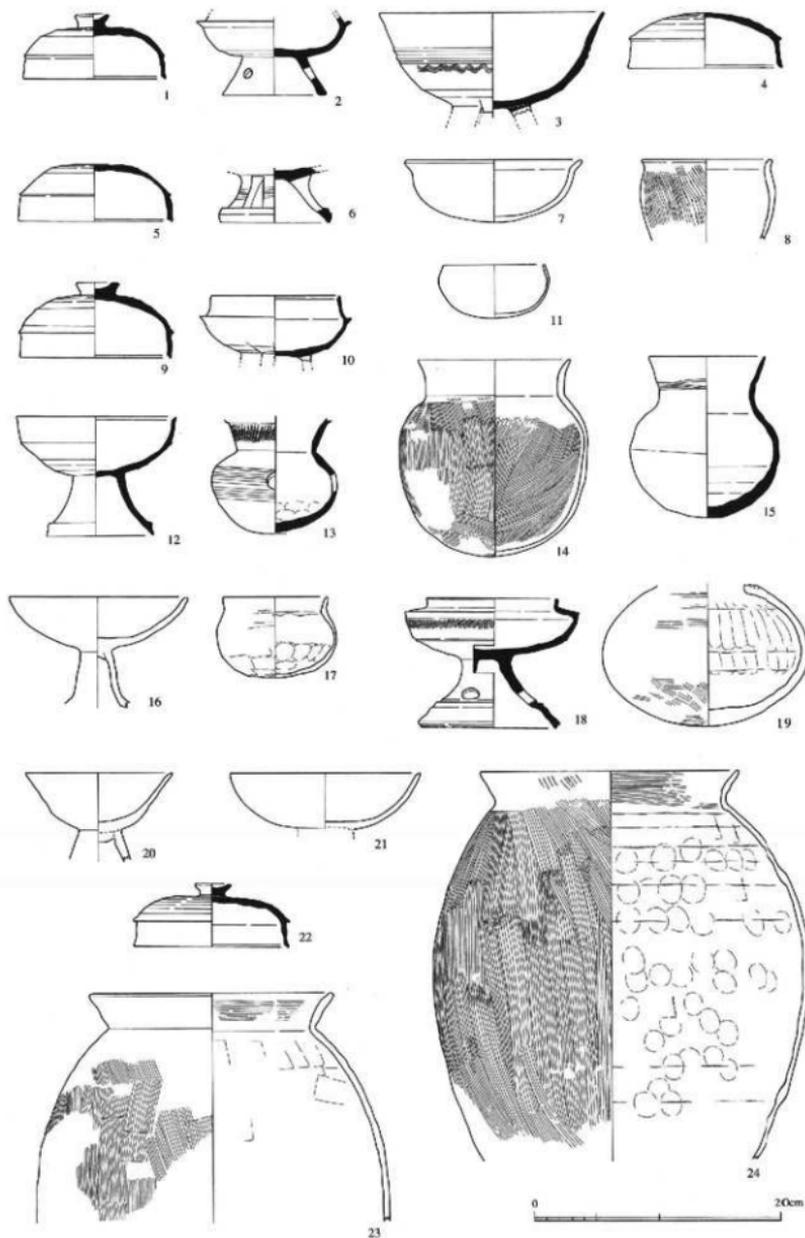
第 23 图 SE494 出土遺物 1



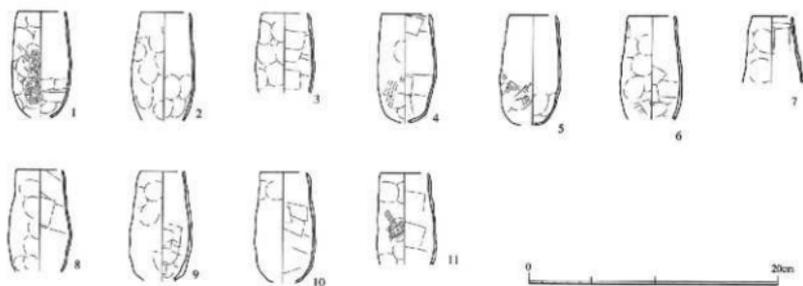
第 24 図 SE494 出土遺物 2



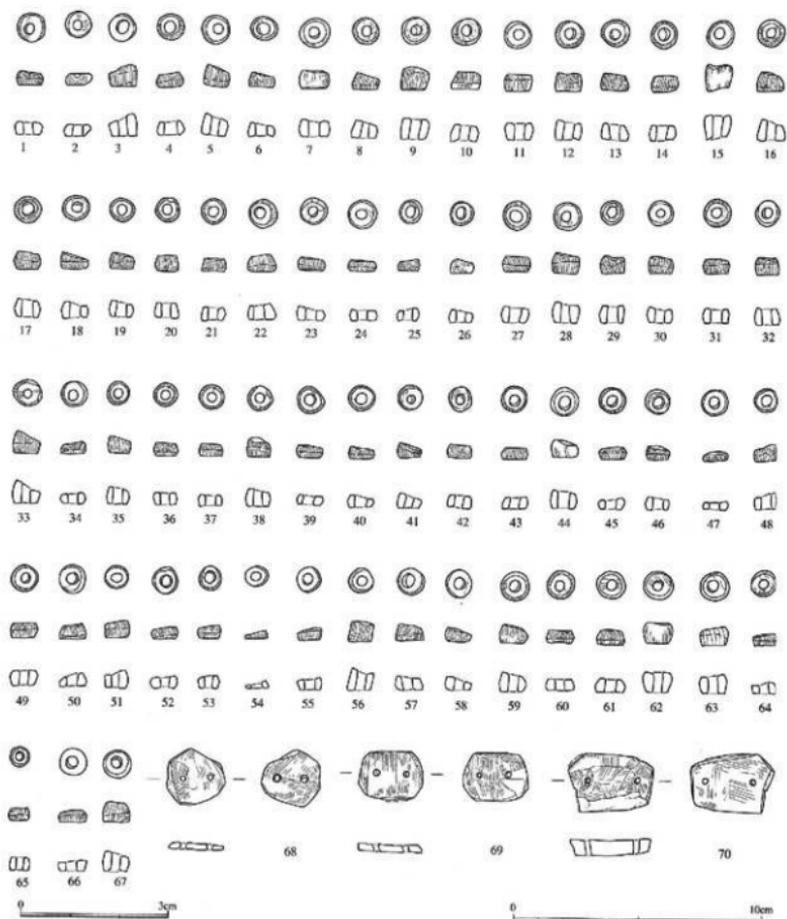
第25図 SE542・590・676・695・767・1613 出土遺物
 1~4 (SE590), 5 (SE676), 6 (SE767), 7 (SE695), 8・11 (SE542), 9・10・12 (SE1613)



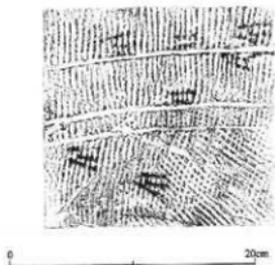
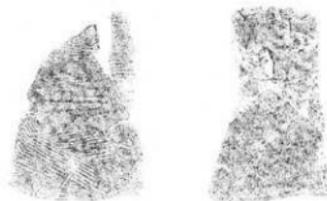
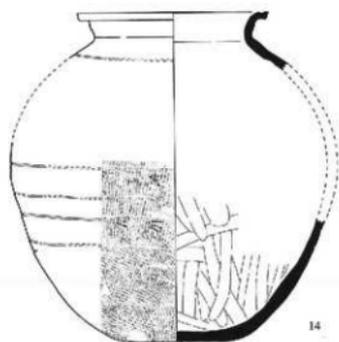
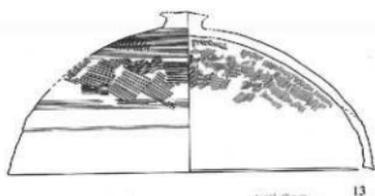
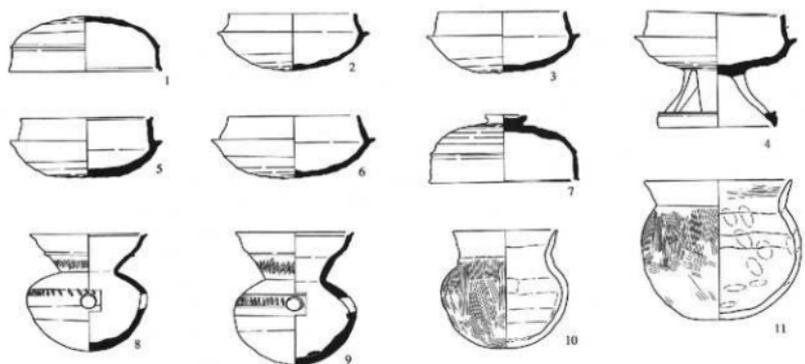
第26圖 SK435・1240・1393・1394・1639・1654・1771 出土遺物
 1~3・5~7 (SK435), 4 (SK1240), 8 (SK1393), 9~14 (SK1654), 15・19 (SK1394), 16~18・
 20・21 (SK1771) 22~24 (SK1639)



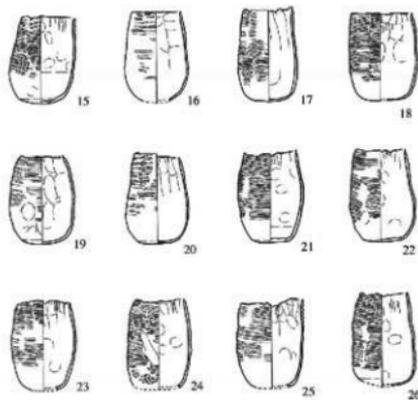
第 27 図 SK1632 出土遺物



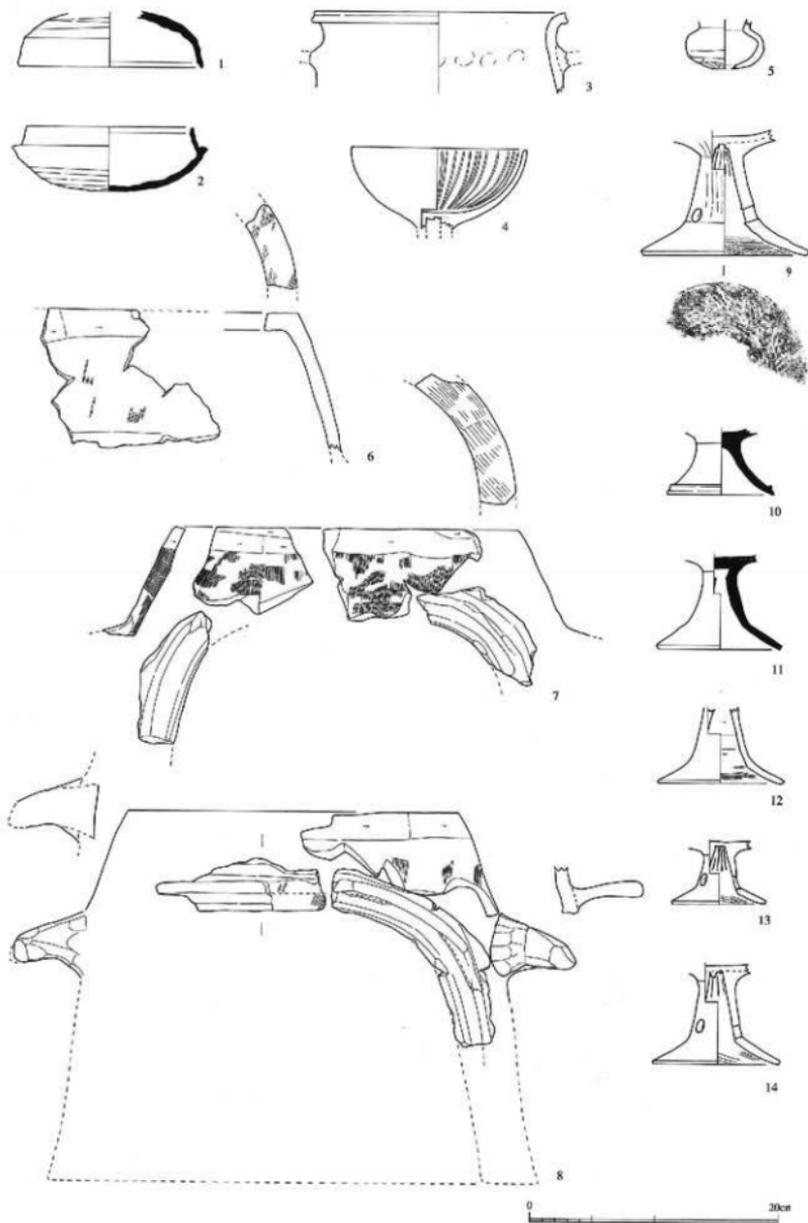
第 28 図 SK1135 出土遺物 1



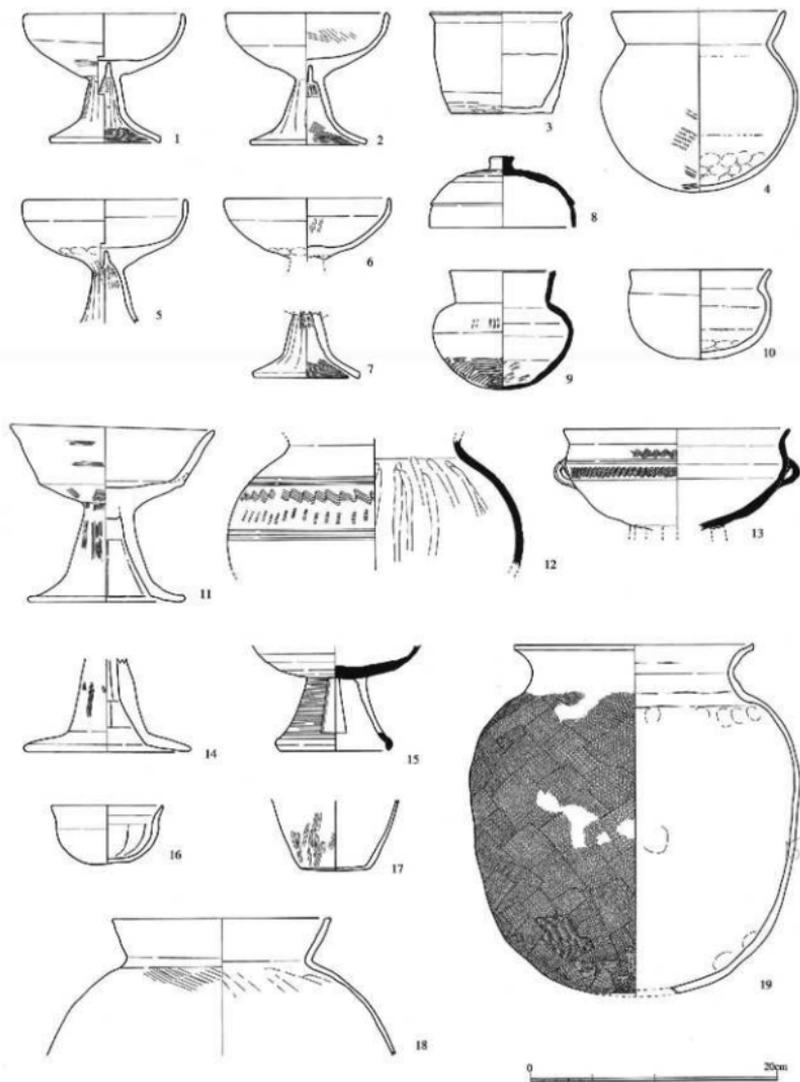
0 20cm



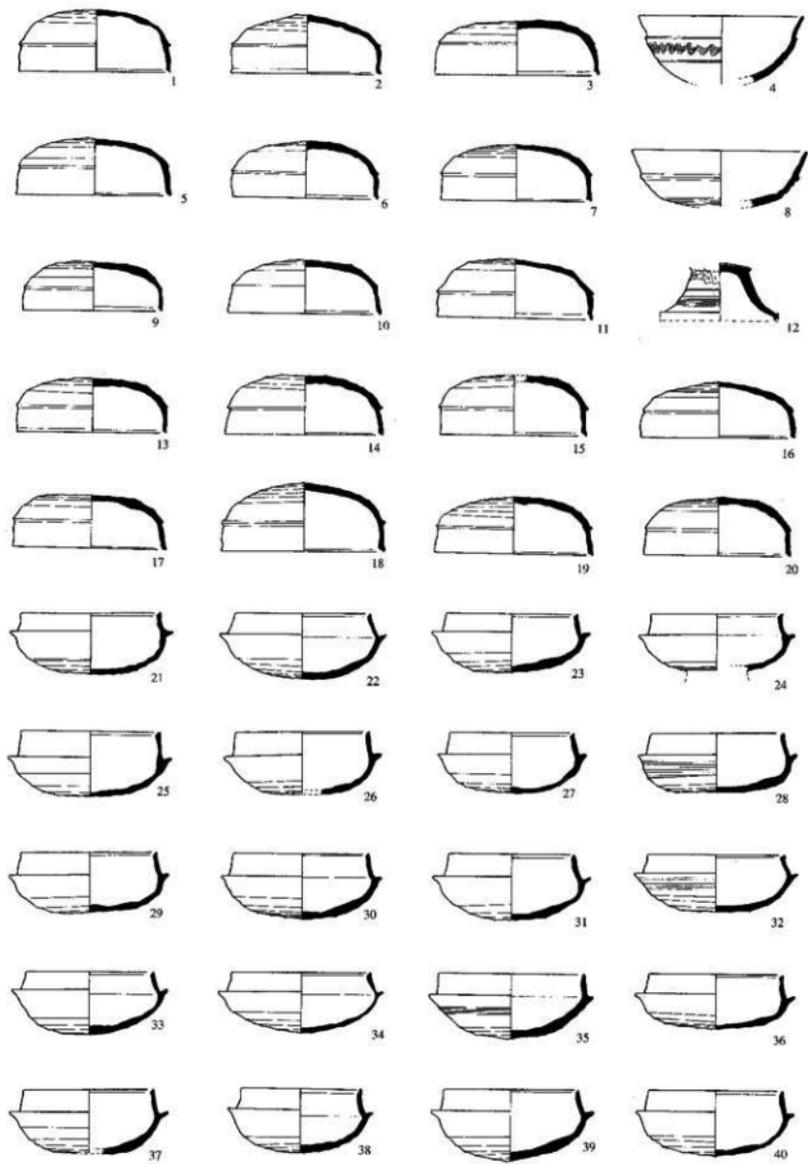
第 29 图 SK1135 出土遺物 2



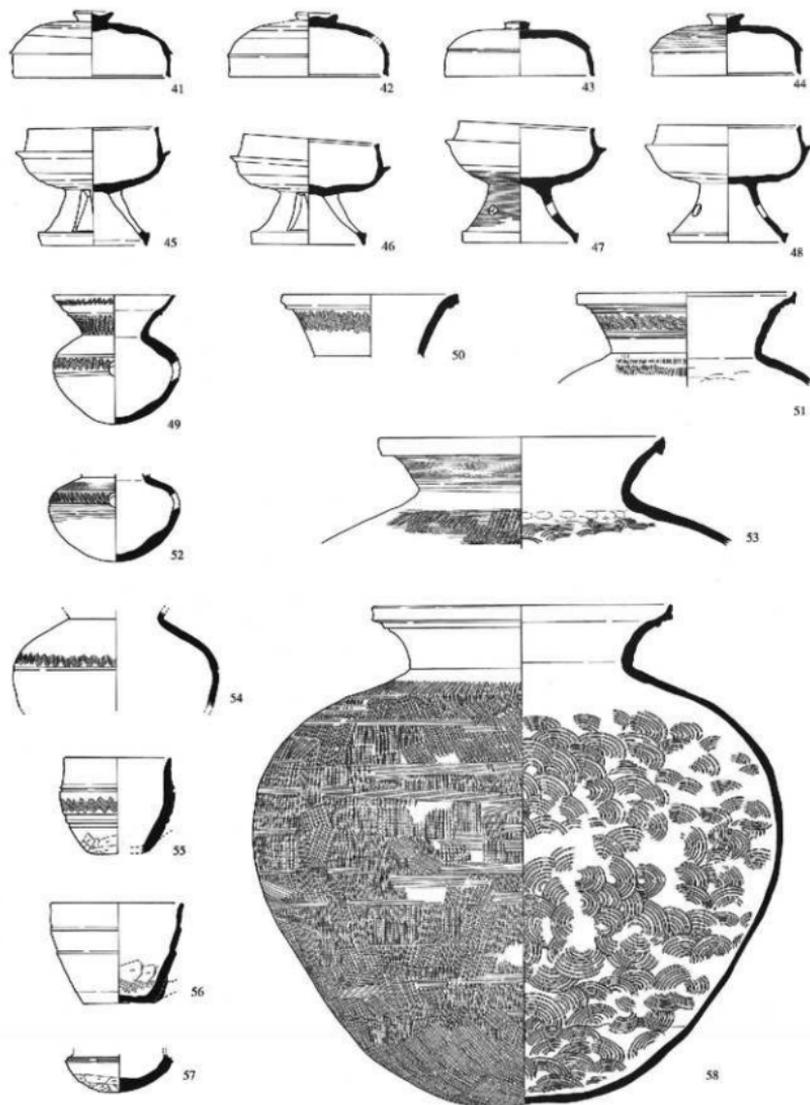
第 30 图 SD428 出土遺物



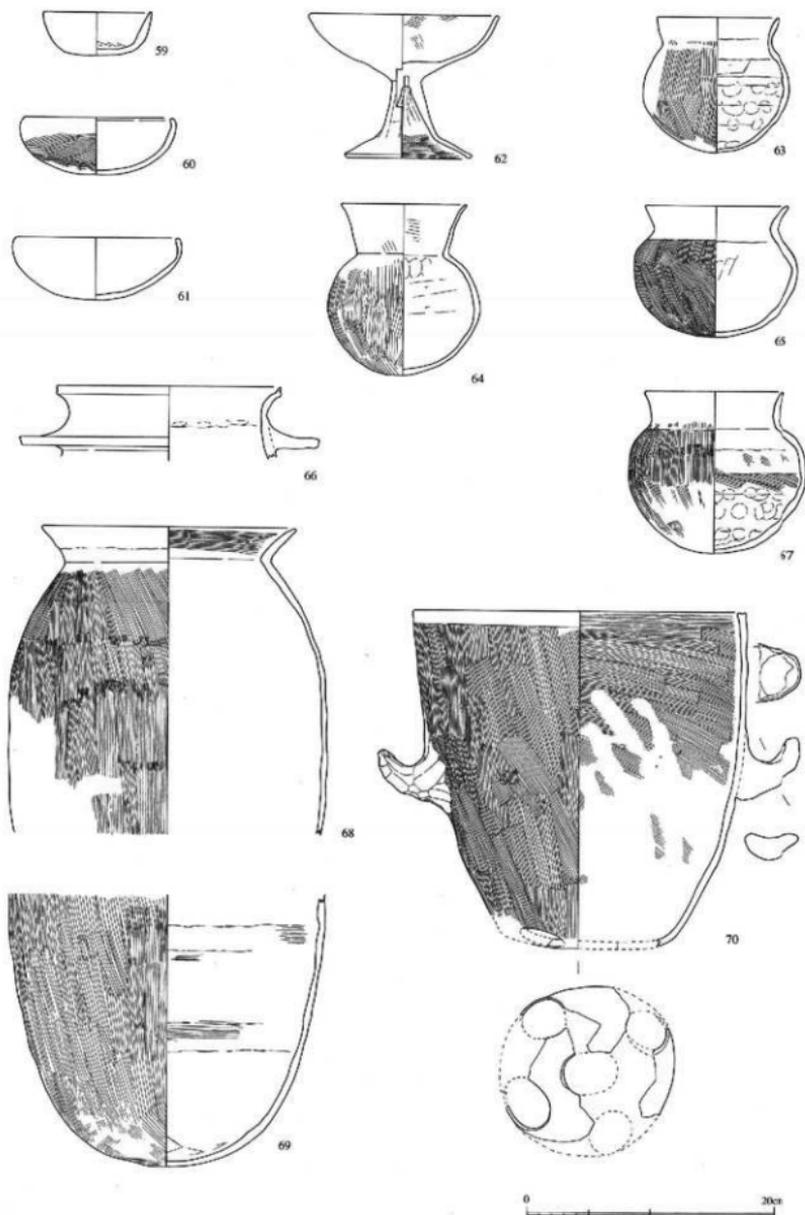
第31図 SD429・957・1189・1192・1215・1224 出土遺物
 1~9・13 (SD429), 10・18 (SD957), 11・12・14 (SD1189), 15 (SD1224)
 16 (SD1215), 17・18 (SD1192)



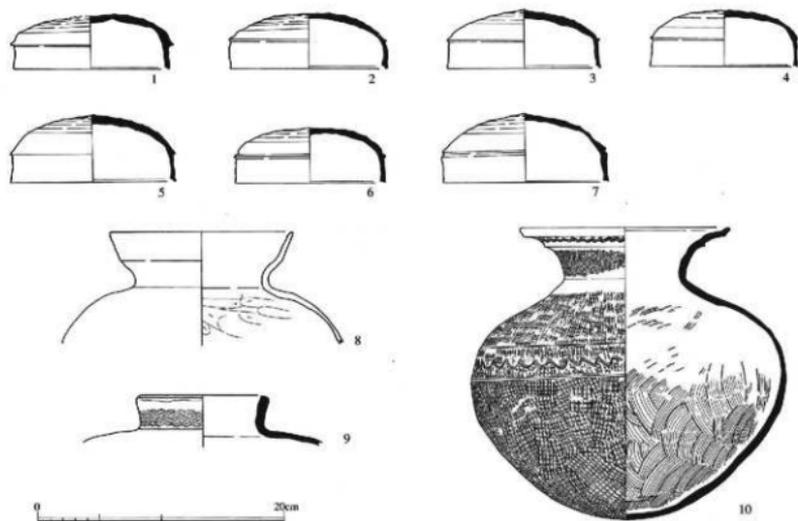
第 32 図 SD950 上層 出土遺物 1



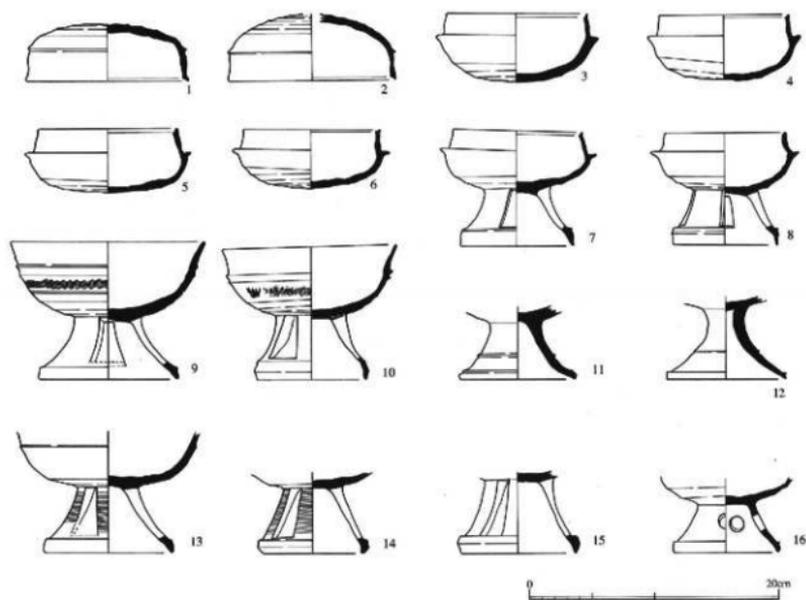
第 33 图 SD950 上層 出土遺物 2



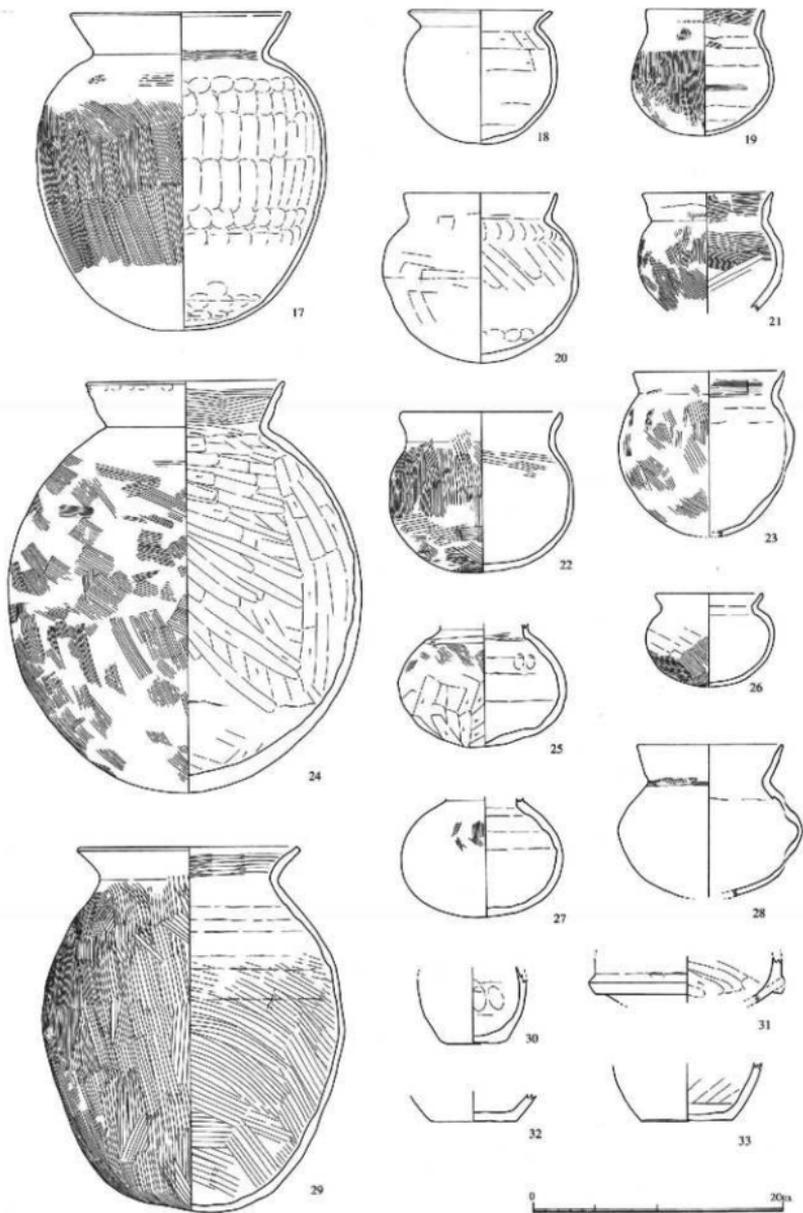
第 34 图 SD950 上層 出土遺物 3



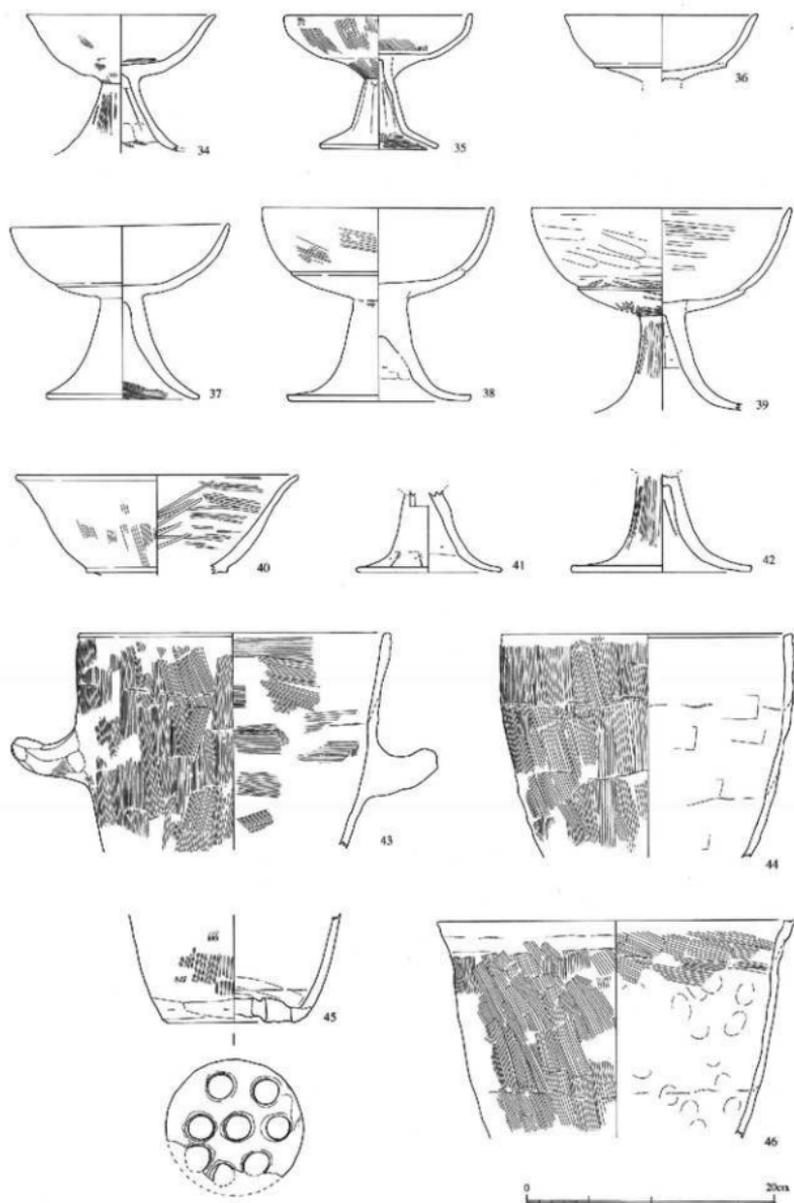
第 35 图 SD950 中層 出土遺物



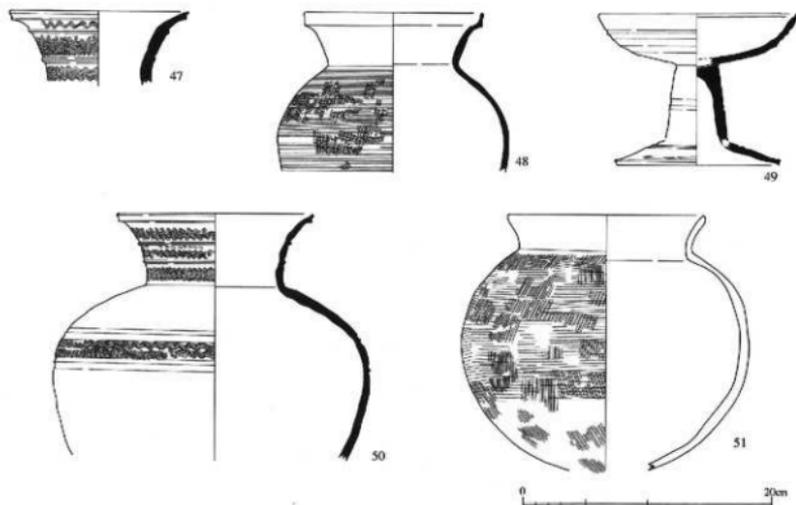
第 36 图 SD950 下層 出土遺物 1



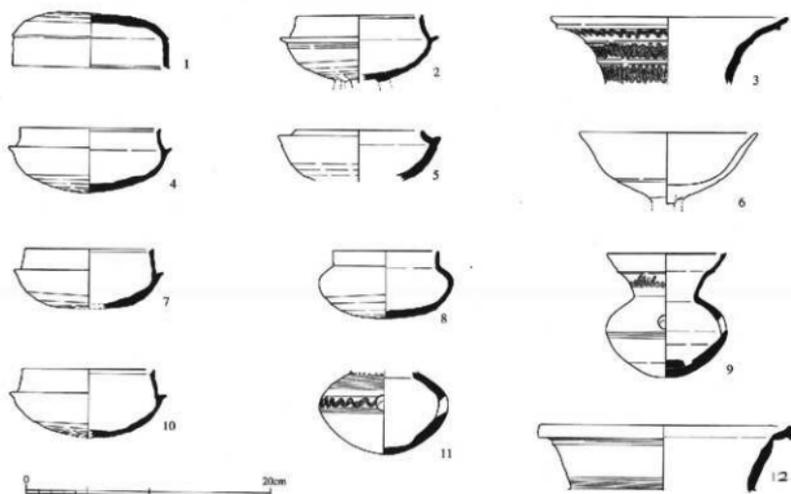
第 37 図 SD950 下層 出土遺物 2



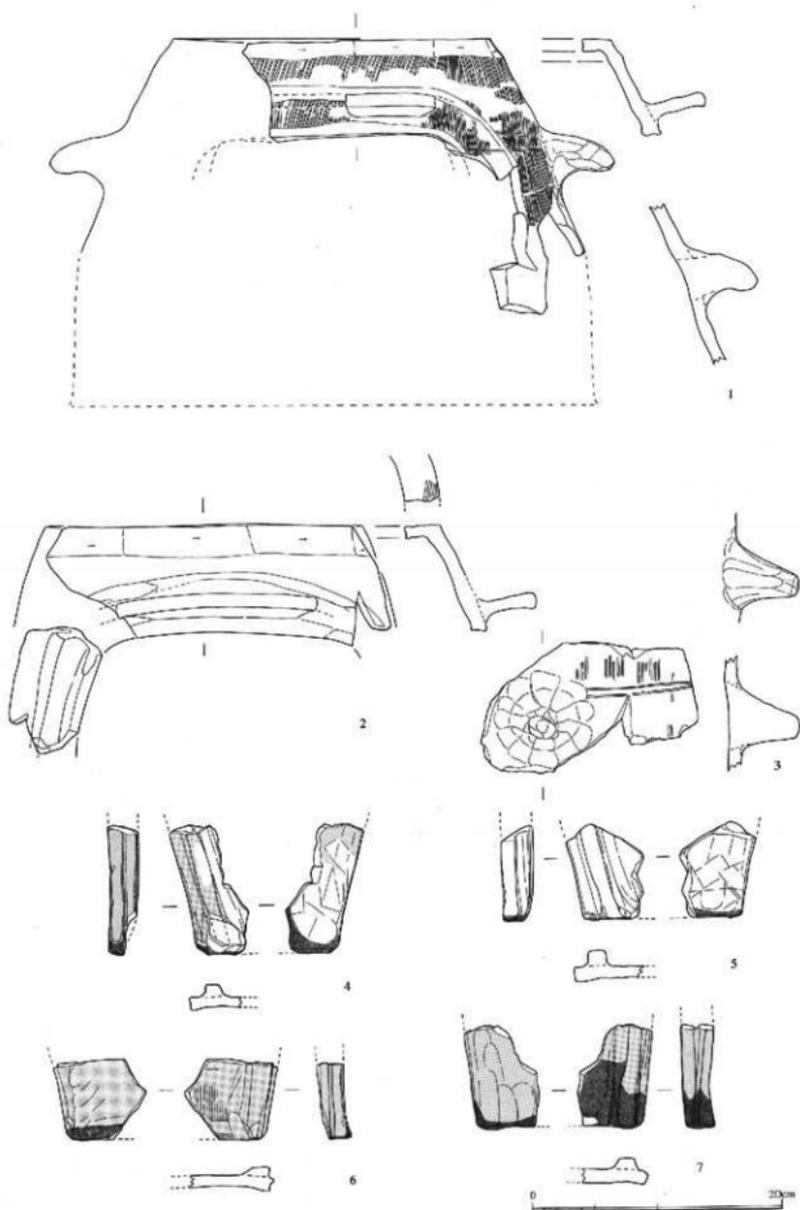
第 38 図 SD950 下層 出土遺物 3



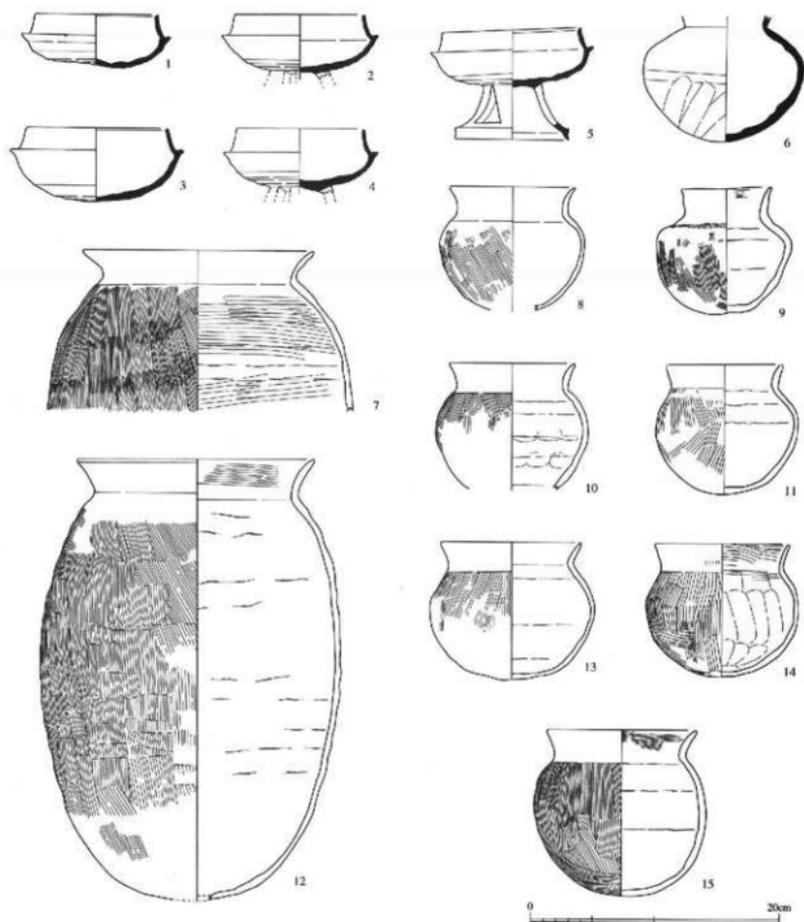
第 39 図 SD950 下層 出土遺物 4



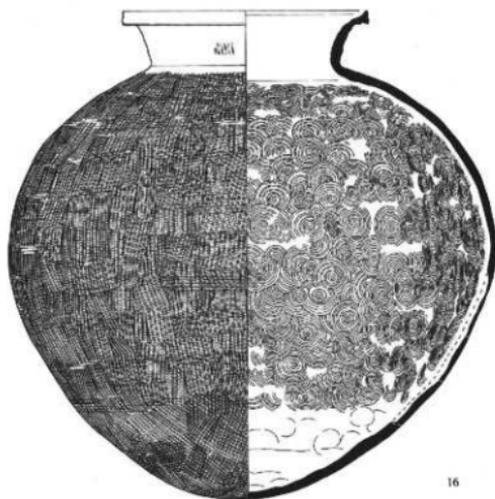
第 40 図 SD434・1244 出土遺物
1~6 (SD434), 7~12 (SD1244)



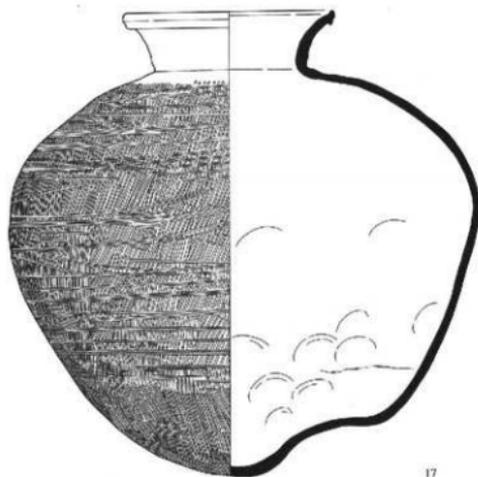
第 41 图 SD950 出土遺物



第 42 図 SD1231 出土遺物 1



16



17



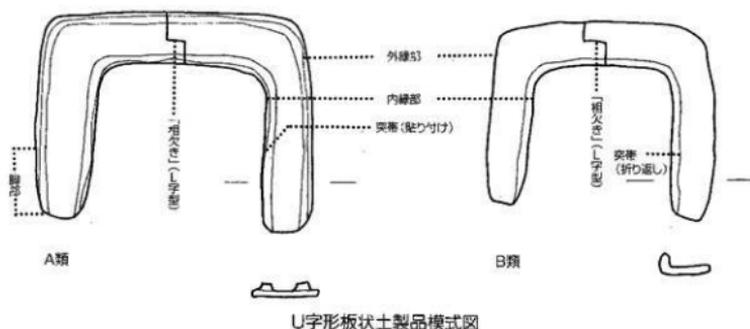
第 43 図 SD1231 出土遺物 2

第3章 部屋北遺跡出土のU字形板状土製品

はじめに U字形板状土製品とは、竈の焚き口に関係する道具と考えられている古墳時代中期頃の遺物である。1991年に大阪府寝屋川市に所在する讚良郡条里遺跡で出土が報告され（註1）、その後、隣接する長保寺遺跡でも出土した（註2）。しかし、破片のみの出土であったため全体の形は明らかではなく、いわゆる「生駒西麓産」胎土の遺物であったことから、当初は「用途不明の生駒西麓産の土製品」、「用途不明板状土製品」と報告されていた（註3）。大阪府四條畷市に所在する部屋北遺跡で2000～2001年度にかけて行なわれた第2次試掘調査（E・H地区）でも、同様の土製品が出土した。うちE地区では、5世紀後半～末に属する土坑1内で破片がまとめて出土した。その結果、全体の形が明らかになり、その形状から「U字形板状土製品」と報告された（註4）。筆者もこの呼称を用いる。出土例は大阪府内の北河内地域にほぼ限られ、大阪府以外では2003年に、奈良県天理市に所在する中町西遺跡で破片の出土が報告されているのみである（註5）。

従前の研究 濱田延充氏は、古墳時代中期に見られる生駒西麓胎土の製品は移動式竈、羽釜に限定されること、土製品の表面に二次焼成による赤変や煤が見られることから、竈に関係する道具（竈の焚口や掛け口等の付属品）ではないかと推定し、類例が韓国光州市の月田洞遺跡（註6）で出土していることをあげ、朝鮮半島との関係考えた（註7）。後に、同じく韓国ソウル市の風納土城でも出土した。風納土城では竈穴住居内の竈の前に立った状態で出土したため、造り付け竈の焚き口を保護するものとして報告されている（註8）。田中清美氏はこれら韓国の事例に着目し、国内でU字形板状土製品が出土した遺跡では、百済系の遺物である烏足文タタキメが施された陶質土器が出土していることに触れ、その系譜が百済系の渡来人に関わると考えた。そして、U字形板状土製品を「造り付け竈の付属具」と考え、使用例の復元図を作成している（註9）。

形状による分類 U字形板状土製品は、これまでに発見された事例と今回部屋北遺跡A調査区で検出された事例によって形態分類が可能である。表面の内縁・外縁に沿って、断面台形状を呈



する突帯を平行して貼り付けているタイプ、内縁に沿って板状の体部をL字形に折り返して突帯をつくるタイプ、突帯のないタイプの3タイプが現在確認されている。ここではそれぞれをA類、B類、C類と仮称する。各々の形状については模式図を参照していただきたい。A類は葎屋北遺跡E・H地区、長保寺遺跡、讚良郡条里遺跡出土の事例、B類は葎屋北遺跡H地区、中町西遺跡出土の事例、C類は長保寺遺跡出土の事例である。また、堺市ON231号窯ではC類と同様に突帯のない須恵質の板状土製品が出土している（註10）。

葎屋北遺跡での事例 今回報告する葎屋北遺跡A調査区は、試掘のE地区を含む調査区であり、2001～2002年度にかけて調査を実施し、U字形板状土製品の破片が60数点出土した。整理作業の結果、15個体にまとまった。15個体の内訳は、A類が14個体、B類が1個体であり、C類は出土しなかった。

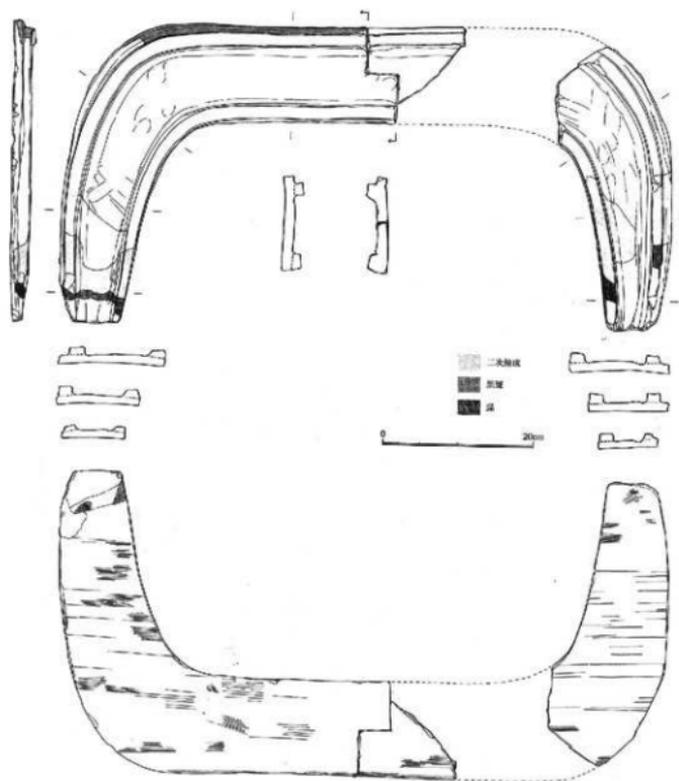
A類 第44図-1は残存幅93.7cm、長さ50.5cm、本体の幅15.7cm、脚部端部の幅11cm、厚さ約1.4cmを測る。E地区出土のものは残存幅約40cm、長さ40cm、本体の幅13cm、脚部端部の幅8cmを測る。両者とも後述する相欠き部分が残存し、半分の大きさがわかることから、全体の大きさを想定すると、第45図-1は幅約115cm、長さ約50cm、E地区のものは幅約85cm、長さ約40cm程度になる。第44図-2は本体の幅が13.5cmを測ることからE地区出土のものと同規模の大きさに復元できる。また全体を支える脚部端部の大きさは、本体の大きさに比例すると考えると、第47図-4、第48図-7は幅8cm前後を測ることから、やはりE地区出土のものと同規模に復元できる。また、H地区では脚部端部の幅がさらに狭いものが出上しているため、少なくとも大中小3タイプの大きさの製品があることがいえる。

本体は、先に全体を板状に成形した後、表面に断面台形状の突帯を貼り付けている。突帯は、内縁側の突帯は側面に接しているのに対して、外縁側の突帯は側面と若干の隙間をあけて付けられている。表面はナデ調整し、突帯を貼り付けた後に突帯に沿ってユビオサエ、ナデを行なう。突帯には本体に接着しやすいように、接着面には刻み目による凹凸をもたせている。裏面は、横方向の板状工具によるナデ、ハケメが残るもの、横方向の板目が残るもの、布日が残るもの、蓮あるいは簾状の目が残るものがあった。板目が残るものは、板目が全面に溝状に深く残り、板状工具によるナデとは違い、一見タタキ調整のようにも思われた。これは成形する際に、本体を木製作業台に何度も押し付けた事によって台の板日が圧痕となって残ったものと推測される。同様に布日や蓮・簾状の目についても、成形する際に下に敷いていたものの圧痕と考えられる。成形時の圧痕を残したままであるのは、竈の焚き口に設置する際には、平滑であるよりも凹凸がある方が接着に適しているからではないかと考えている。しかし、板状工具によって丁寧に調整した資料も認められるので今後検討すべき課題である。

全体を成形した後、焼成前に鋭利な刃物もしくは工具を使って真ん中に「相欠き」を作って二分に切り離す作業を行っていた。この作業は、焼成時の便宜（竈に入れやすいようにか）や使用する際の移動を考えてのことと報告されている（註11）。相欠きで確認したのは突帯の付く表

面から見て左側部分が右側部分が載る形（L字型）だけで、逆の右側部分に左側部分が載る形（逆L字型）は見られなかった。後述するB類は逆L字型であったが、逆L字型の例が少ないのは、二つに切り離す作業を右手で行なったためと考えている。切り離しの際、本体を左手で押さえ、右手に道具を持って切り離す状況ならば、左手方向に刃や工具の先端を進めるような切り方は避けようとする意識が働き、そのため相欠きがL字型になるものと推測する。胎土は全て生駒西麓産である。焼き口で火を受けた結果としてついたとみられる、二次焼成による赤変あるいは煤けた資料が多く確認された。脚部やカーブ部分が特に強い被熱を受け、剥離した資料もあった。

B類 第46図-3は本体幅10cm、残存幅約45cm、厚さ約1.8cmを測る。脚部に相当する破片は出土しなかったが、H地区で脚部に相当する部分が出土しており、本例では相欠きが確認されたことから、A類と同様に2分割された形態を持つことがわかる。先に全体を板状に成形した後、



E地区出土のU字形板状土製品

表面の内縁になる側の部分をL字状に折り返して突帯を形成している。表面は斜め方向のナデ、突帯部分は突帯に沿ってユビオサエ、ナデを行ない、裏面は未調整で成形時の横方向の板目が残る。焼成前に相欠きを作って三等分に切り離している。相欠きは右側部分に左側部分が載る形（逆L字型）である。胎土は牛駒西麓産である。

全体の大きさはA類との比較から推定すれば相欠きからカーブ部分までが約30cmを測ることから、中型に相当すると思われる。H地区では本体幅が13.0～14.8cm、厚さ約1.5cmを測る大型タイプと考えられる破片が出土していることから、少なくとも2タイプの大きさの製品があることがいえる。

出土状況 藪屋北遺跡では、使用時の状況が明らかになるような例は確認されなかった。A調査区での出土地点は、包含層の掘り下げ時に出土したものを含めると、調査区西側に集中し、特に北西部分での出土が顕著であった。要因として、北西部で検出した5・6号竪穴住居、掘立柱建物3の存在が考えられる。さらに調査区外にも住居の広がりが続くとみられることから、周辺に存在した集落でこれらのU字形板状土製品を使用した後、近接する溝や井戸に廃棄したものと考える。それに対し、東側では、北東部で1～4号竪穴住居、掘立柱建物1・2が検出されているにも関わらず、1点の出土にとどまった。要因として、近接する溝428の特異性が考えられる。この溝については、その規模や埋土、出土遺物量の少なさから、集落の区画溝と考えている。遺物の少なさは溝の管理が徹底されていたためと考えられ、集落からの廃棄物は別の場所に捨てたのであろう。

以上、藪屋北遺跡で出土したU字形板状土製品について概要をまとめた。

性格 藪屋北遺跡出土のU字形板状土製品は大中小、少なくとも3タイプ確認できたが、本体の幅が13cm、脚部端部の幅が8cm前後を測り、幅約85cm、長さ約40cm程度に復元できる中型のものがもっとも多く見られた。このタイプが主流であったと考えられる。大きさの違いは竈の焼き口の大きさ、火力の違いや掛け口の数にも影響する。大型タイプは大きな竈、小型のタイプは小さな竈に用いられたと考えられ、使用場所や用途の違いが想定できる。建物内で出土した場合にはその建物の性格を考える上で重要な観察事項となるだろう。しかし、一般的な竈の大きさ（幅40～50cm、高さ30～40cm）と比較すると、大型の焼き口を持つ竈と考えられ、住居内ではなく屋外（簡単な屋根がかけられたことを含めて）に設置されたものと推定される。

藪屋北遺跡におけるこれまでの発掘調査で、馬の埋葬土坑をはじめとして、十数体分の馬の骨や骨、木製馬具などが出土しており、これらは馬の生産や飼育と関連するものと考えられる。遺跡内で多量に出土する製塩土器もこれに関連するものである。馬の飼育に欠かせない塩の獲得のために、屋外の大型の竈を用いて製塩土器を二次焼成して塩を取り出す工程を行なった可能性がある。大量な製塩土器を廃棄した土坑や溝を検出していることも意義深い。

U字形板状土製品は、朝鮮半島南西部の百済の故地に所在する遺跡から多く出土が報告されている。これに関連して調査区内各所で朝鮮半島南部との関係をうかがわせる陶質土器および埴式

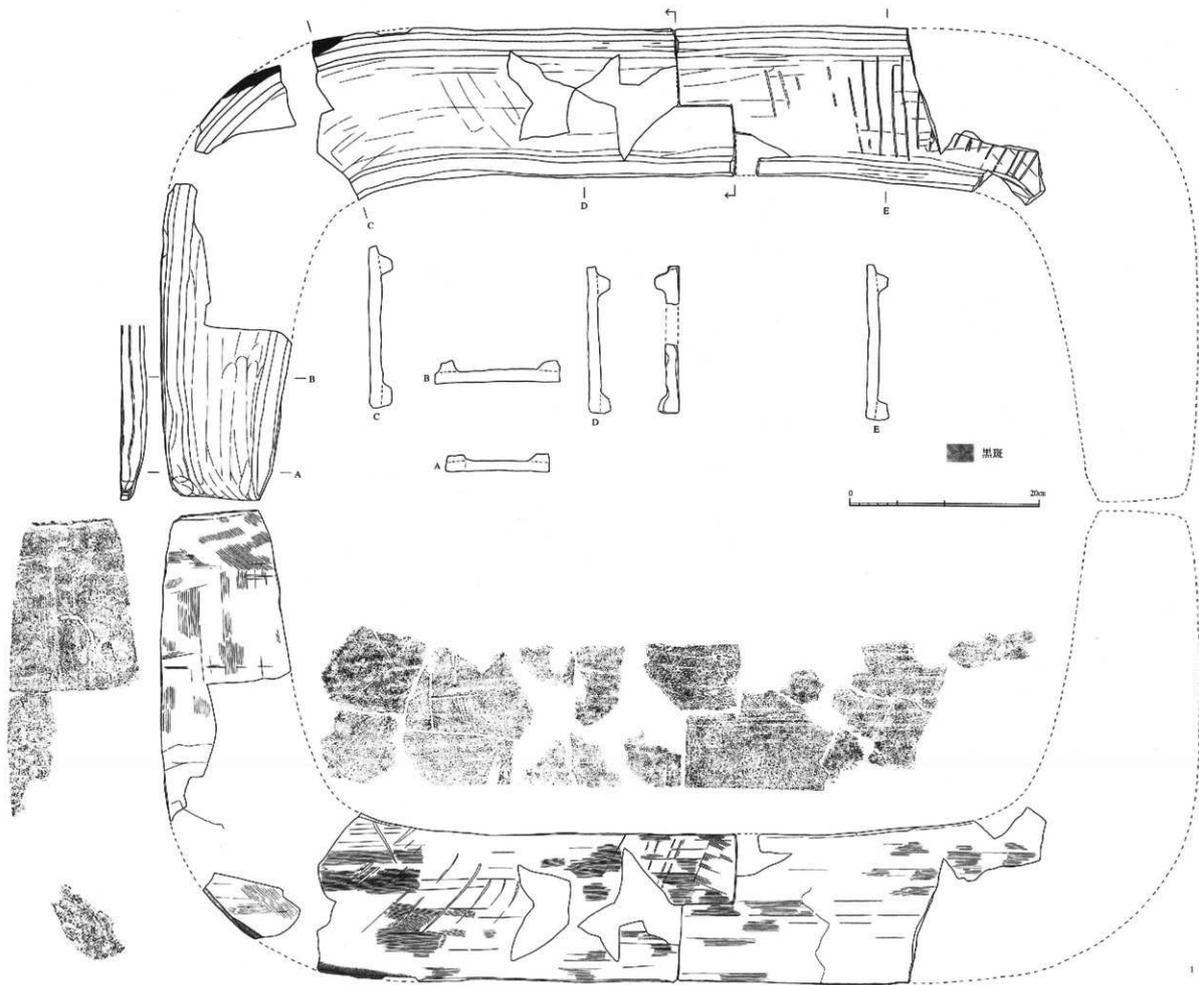
系軟質土器が出土しており、また井戸590からは百済系の陶質土器の壺が出土している。これらのことは朝鮮半島南部、その中でも百済の地域との間わりに中に葦屋北遺跡が存在したことを示すものであろう。

おわりに 葦屋北遺跡では引き続き周辺の調査が進められている。2002～2003年度に調査された葦屋北遺跡C調査区では、多数の竪穴住居、掘立柱建物が検出され、U字形板状土製品も大量に出土した。隣接するB調査区でも2003年度から調査が行なわれ、同様にU字形土製品が出土している。今後の整理作業を通して新たな資料の増加が期待される。

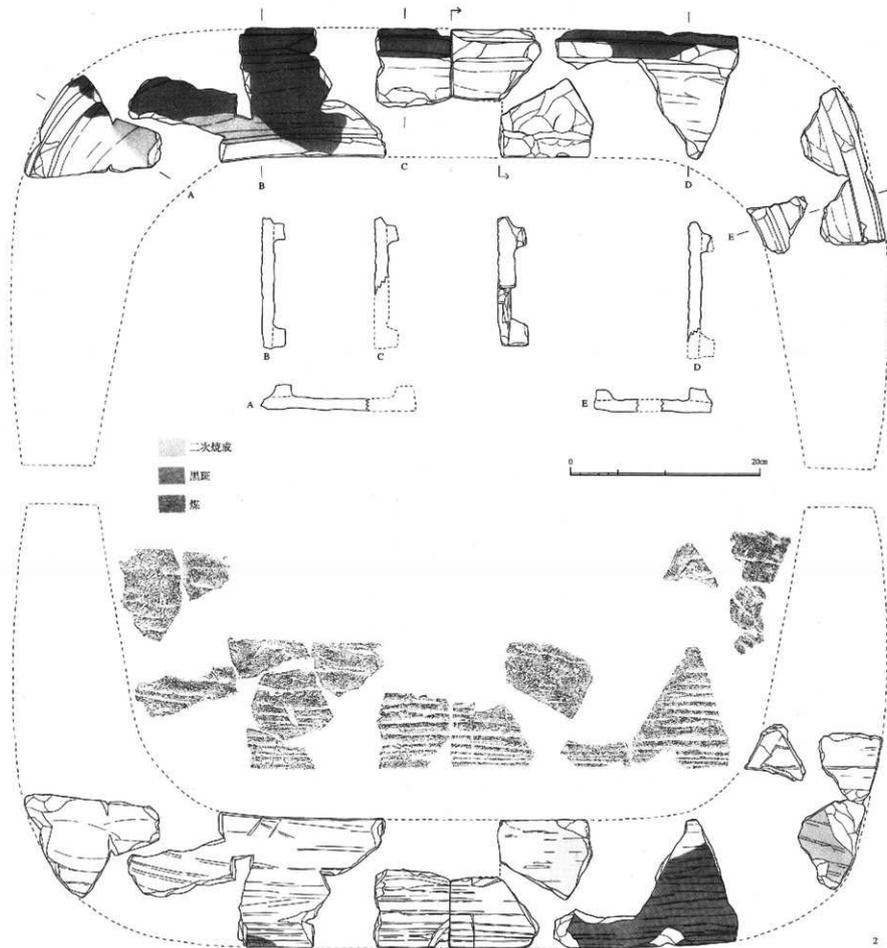
(補山まり)

註

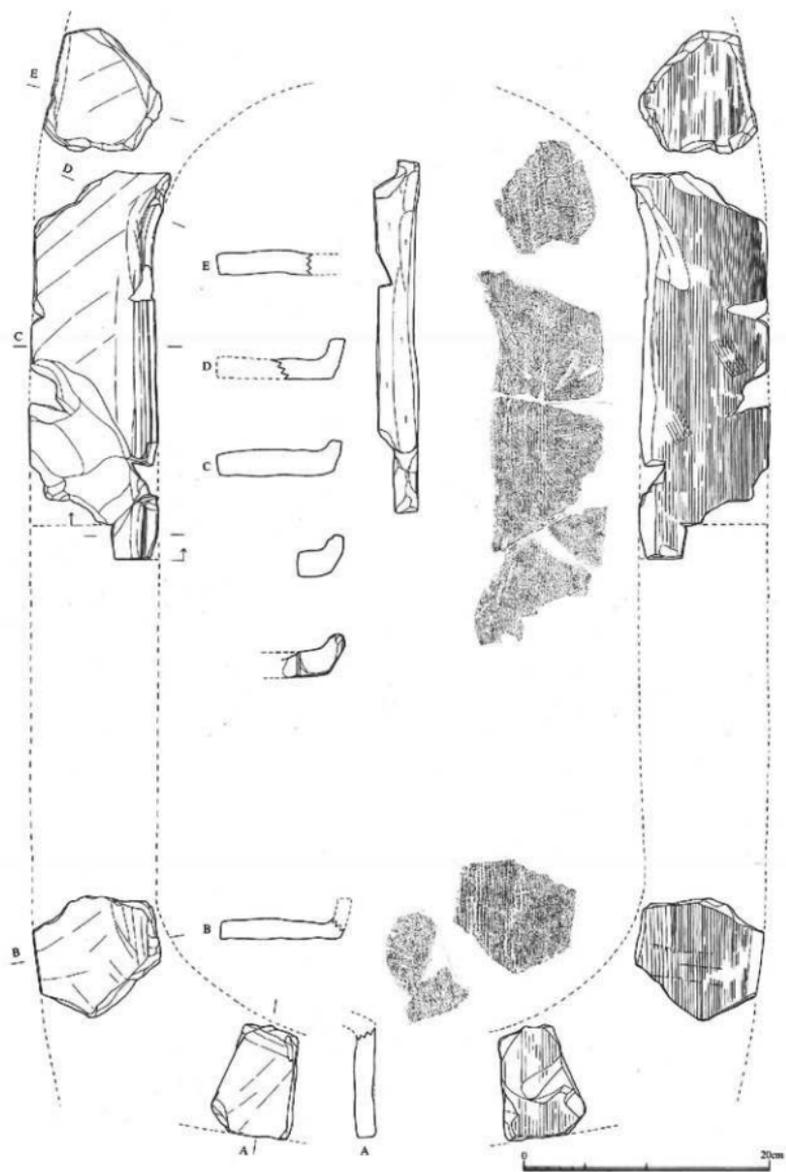
- (註1) 『讚良郡糸里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1991 大阪府教育委員会
(註2) 『長保寺遺跡－(株)伊藤喜工作所開発に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』1993 寝屋川市教育委員会
(註3) (註2)に同じ
(註4) 『讚良郡糸里遺跡(葦屋北遺跡)発掘調査概要・Ⅳ』2002 大阪府教育委員会
(註5) 『中町西遺跡 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第85冊』2003 奈良県立橿原考古学研究所
(註6) 『光州 月田洞遺跡』1996 全南大学校博物館・光州広域市
(註7) 濱田延充 「用途不明板状土製品」について 『韓式系土器研究Ⅵ』2001 韓式系土器研究会
(註8) 『風納土城』2002 ソウル歴史博物館
(註9) 田中清美 「造付け甕の付属具」 『続文化財学論集』2003 文化財学論集刊行会
(註10) 『野々井西遺跡・ON23汚室跡』1994 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化協会
(註11) (註4)に同じ



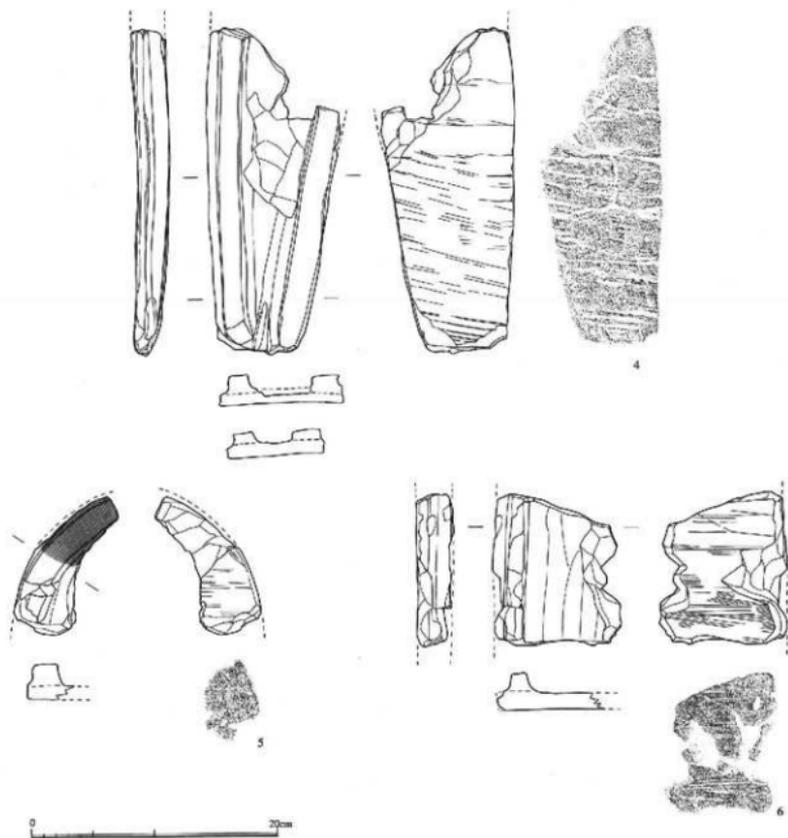
第 44 図 U字形板状土製品1 (SD950)



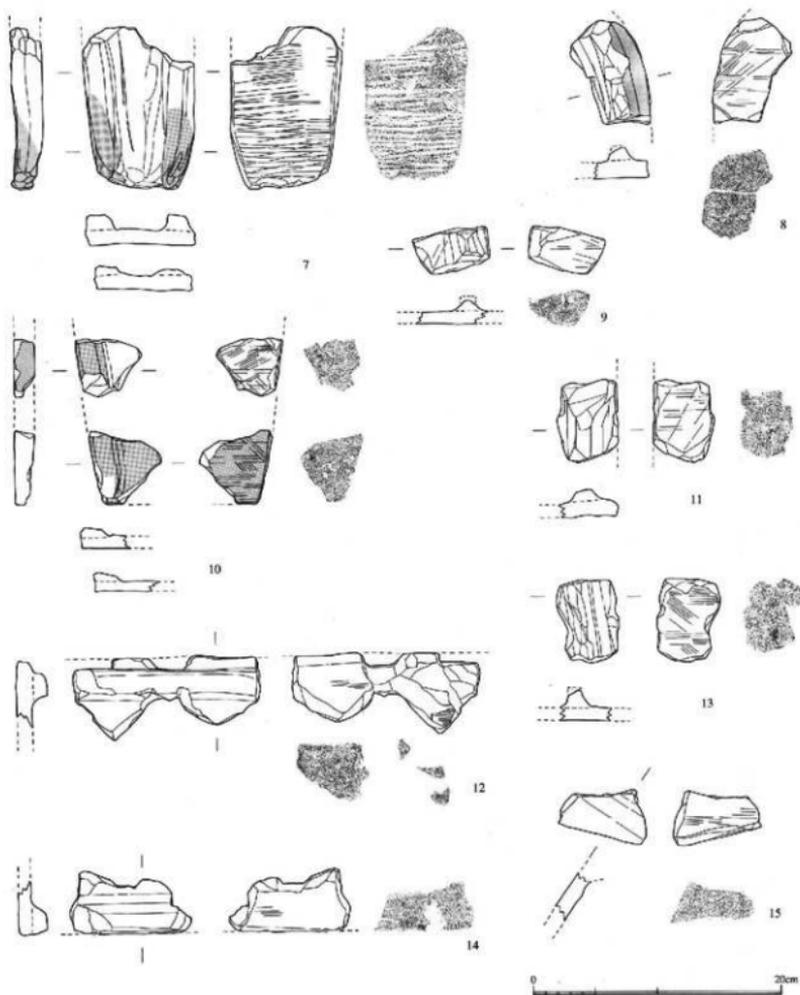
第 45 图 U 字形板状土製品2 (SD950)



第46图 U字形板状土製品3 (SD434)



第 47 图 U字形板状土製品 4 (SD951)



第 48 図 U字形板状土製品 5
 7・8~11・13・14 (包含層), 9 (SD950), 10 (SK1032), 12 (SK1419), 15 (SK1135)

第4章 部屋北遺跡出土馬全身骨格応急処置について

部屋北遺跡A調査区SK940からは、馬の全身骨格を検出した。そこで骨格の表出をした後、応急的に合成樹脂を使用した仮強化を行った。本報では、その工程について報告する。

① **骨格の表出** 骨格の表出作業は骨の部位を確認しながら、細心の注意を払って行った。出土時の骨は、全体的に腐蝕が進行して非常に脆く、軟らかい状態であり、すでに全身が消失していたとしてもおかしくない状態であった。A調査区ではSK940と、ほぼ同規模の大きさであるSK1345のように、全身の遺体がもともとは存在したであろうことが埋土中にリン分が多く残っていることから想定できるものの、全体的に腐蝕が進行しており馬の白備列以外には骨格としては検出できなかったようなケースも存在しており、SK940のようにほぼ全身の骨格が残っていた例は稀であるといえよう。遺体は右半身側を上にして横たわっていたが、下部にあった左半身は比較的残存状況が良好で、骨膜、海綿質共に残り骨一点一点が立体的な形状を保っていた。しかし、土坑検出面により近かった右半身に関しては左半身よりも腐蝕が進行しており、例えば右肋骨などは海綿質が消失して骨膜だけが土圧で潰れて扁平に残っているような状態であった。なかでも右後脚は腐蝕進行が激しく、大腿骨の一部をころうじて確認できた他にはほとんど消失している状態であった。土中からの表出方法としては、竹べら、竹串、耳掻き、ハケ等で物理的に土を取り除く方法、エタノールと水の混合溶液を霧吹きで噴霧しながら筆で土を洗い流す方法を状況に応じて使い分けた。

細部の表出は洗い流す方法のほうが、きれいに仕上がった。骨の状態によって霧吹きの噴霧強度や筆の硬度を調節・使い分けしながら行った。筆は豚毛の物が最も使い勝手の良い硬度であった。

② **洗浄** 全作業期間を通してカビの発生が頻繁に確認された。乾燥による土坑全体のひび割れを防ぐ事を優先したため、作業中断時は濡らした不織布で土坑全体を養生し保湿していたことと、加えて作業時期が夏であったこともカビの発生を助長していたと思われる。対策として、毎回作業開始の前にエタノールと水の混合溶液を霧吹きで噴霧しながら筆で洗い流した。

③ **樹脂塗布による仮強化** 骨格の表出後、樹脂を塗布して仮強化を行った。樹脂は当初、非水性のアクリル樹脂、パラロイドB-72 (Rohm&Hass社) のアセトン溶液を一部に使用したが、最終的には水性のアクリル樹脂、クリヤーN (ケミテック株式会社、原液の樹脂濃度は約40%) をエタノールで濃度約5%に調製し、骨全面に使用した。塗布前にはエアークリーナーで表面の土や埃を吹き飛ばした後、筆を用いて塗布した。塗布は何度か繰り返した。

以上で馬全身骨格の応急処置を終了した。SK940は発掘調査終了後、遺構ごと切り取ったが、遺構の切り取りについては追って報告する。

(竹原弘展)

第5章 まとめ

郡部北遺跡の発掘調査は、なわて水環境保全センターが当該地に計画されて以降、平成12年度の試掘調査を経て、新たに遺跡として周知された。平成13年度から本格的に実施し、A調査区を平成14年度末に終了した。またC調査区は平成14年度に着手し平成15年中に終了した。B調査区については平成15年度に着手して現在調査を継続し、平成16年度中に終了させる予定であり、C調査区の終了をもって水環境施設の成果が出揃うことになる。

今回の報告では、平成13～14年度に実施したA調査区の前古墳時代中期の調査成果について前章までで報告してきたが、ここでは概要についてまとめることとする。

A調査区の調査では、調査区中央部を北西から南東方向に直線的に伸びる幅20～30mの大溝(SD428)を検出した。溝の両肩は直線的に走り、また断面の形状も人工的に掘削されたようになだらかな斜面を描く。溝底には雨水を集めて流れたような下段の流れが検出された。この溝は、集落が東に隣接しているにもかかわらず、埋土中からの遺物の出土量はかなり限られており、常に溝内には土器などが廃棄されないように管理されていたものと考えられる。以上の状況から、人工的に掘削された区画溝であると考えられる。

この区画溝と同じ堆積状況を示す落ち込みが調査区北端の東側で検出され(SD434)、調査時点では、区画溝(SD428)と同様の性格を持つ溝の南岸を検出したものと考えた。東側で検出した集落域を、東西方向のSD434と北西-南東方向のSD428の2条の区画溝で囲まれているものと想定した。

区画溝(SD428)の西側は集落以外の施設が存在するものと考えたが、調査の進展により北西端でもう一つの集落域を検出し、単純な様相ではないことが判明した。

東側で検出した集落域の特徴は、大型の竪穴住居4棟、掘立柱建物2棟が狭い範囲で検出され、少なくとも竪穴住居2棟と掘立柱建物2棟は同時並存していたと考えられる。このうち1号・2号竪穴住居跡の配置は、出入り口が不明瞭なため主軸方向を示すことができないが、長軸を比較すると、1号竪穴住居跡は北西-南東方向、2号竪穴住居跡は北東-南西方向で直交することがわかる。1号・2号掘立柱建物跡の主軸も同じ方向を向き、これは区画溝の方向に規制されているものと考えられる。

また付随施設として、井戸が5基検出された。区画された集落域の西コーナーに当たる位置で検出した井戸(SE494)は、刳船を井戸枠に転用した木枠を有していた。木枠を持つことが異質な上に、井戸底には土器を埋納するための土坑が掘られ、3段以上にわたって30点以上の土師器・須恵器が入れられていた。これらの遺物の間から、馬の頸骨片、イヌの頸椎・腰椎が出土したことから祭祀的な用途に使われた井戸と考えることができる。またSE590からは井戸底に竹の注ぎ口を差し込んだ甕が置かれ、井戸廃絶時の埋め戻し時に入れられた土器の一つが百濟地域産の陶質土器壺であると判明した。

集落域全体では多数のピットが検出され、僅かにTK43段階の遺物を出土する遺構が含まれるが、ほとんどの遺構はTK208～TK23段階に集中して繰り返し建物が建てられたであろうと考えられる。

西側で検出した集落域は、SD950の西側に展開し、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟が狭い範囲に集中して検出された。5号・6号竪穴住居跡、3号掘立柱建物跡も、東側で検出した建物と同じ主軸方向を持つことが判明した。SD950の東側には、幅0.5mのV字溝で囲まれた方形段が検出され、これも同じ方向を示す。

付随施設としての井戸は3基検出され、うち1基(SE1501)は列船を解体した材を組み合わせた木枠を持つ井戸である。

数十m離れて検出された建物が、同じ主軸方向を持つ理由の1つに、中央で検出された区画溝による規制があると考えられ、計画的な建物配置が考えられよう。

西側の集落域は調査区の北からおよそ三分の一の範囲で検出された。その南側は、南北方向の溝、南北方向から東西方向に向きを変える溝が並行して何条も検出された。ピットなどの建物が想定される遺構は疎らにしか検出されず、この空間の土地利用は明確ではない。しかしいくつかの遺構には特徴的なものがあり、その一つとして、馬の全身を埋葬した土坑が2基検出されたことを挙げることができる。また製塩土器が集中して廃棄されていた土坑が数基検出された。SK1135だけでも出土した製塩土器の総重量が100kg近くを量り、単純な消費だけを考えるには余りにも量が多すぎる。東側の調査では検出できなかった馬に関する資料がこの地区で色濃く検出された。

調査区西側の調査では、U字形板状土製品が多数出土しており、本来の使用方法を知る出土状況ではなかったが、出土範囲を限定することができた。詳しくは第3章の論考の中で紹介する。

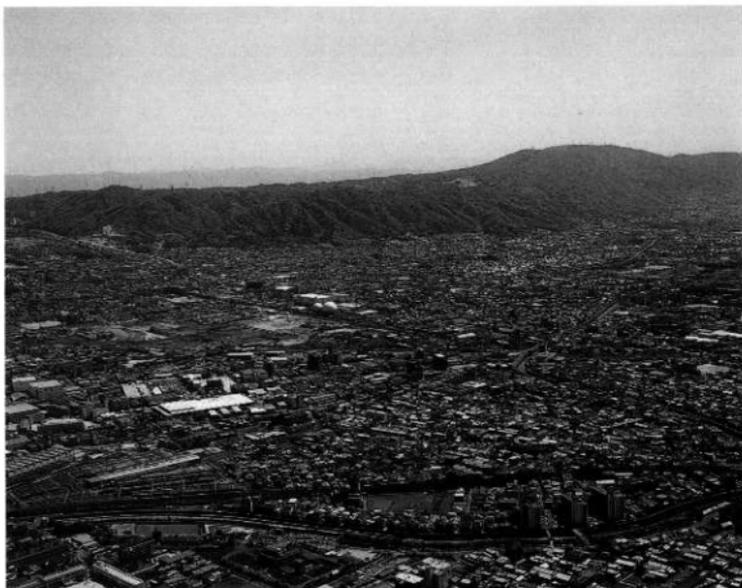
本調査に先立つ試掘調査では、古墳時代中期の移動式かまど、U字形板状土製品、鳥足紋タタキメのある韓式系土器、夥しい量の製塩土器などが出土した。

また、下水管渠築造工事に伴う発進立孔の発掘調査において、古墳時代中期の木製の輪鍔などが出土し、試掘調査の結果と合わせて、馬飼いに関わる調査の成果が期待された。

今回のA調査区の成果として、この地に暮らした人々が、U字形板状土製品、韓式土器、算盤玉形紡錘車、百済地域産陶質土器なども用いていたことから、朝鮮半島から渡来した人々との強い関わりを示唆している。

また埋葬されたウマの出土からも、渡来系の品々をもつ人々が、馬飼いの技術と深くかかわり、この地に遺跡を残したと考えることができる。

北側のB・C調査区の成果が判明しつつある現在、A調査区の成果とともに、古墳時代中期の当該地の様相を明らかにすることができよう。



調査区遠景（北西から）



調査区遠景（北から）



調査区遠景（東から）



調査区遠景（南から）



A調査区古墳時代中期遺構面全景（上から）



A調査区東側全景（北西から）



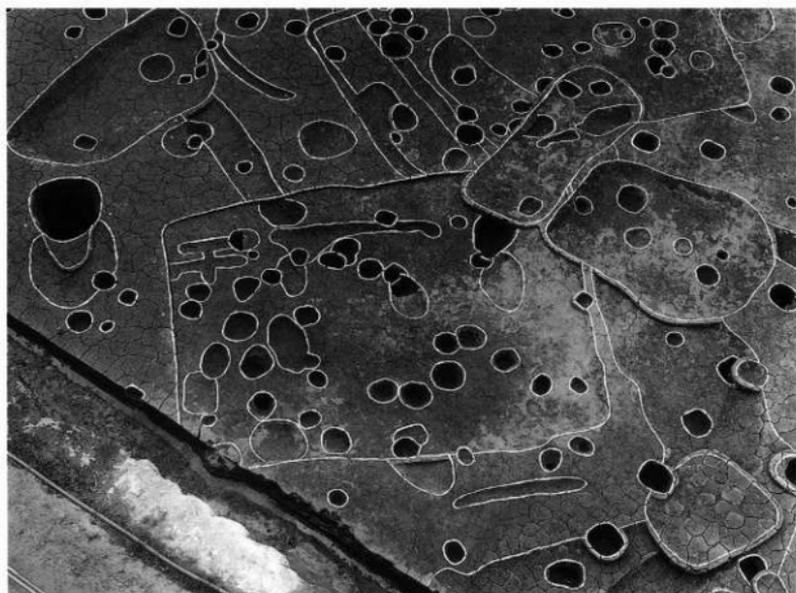
A調査区東側全景（北から）



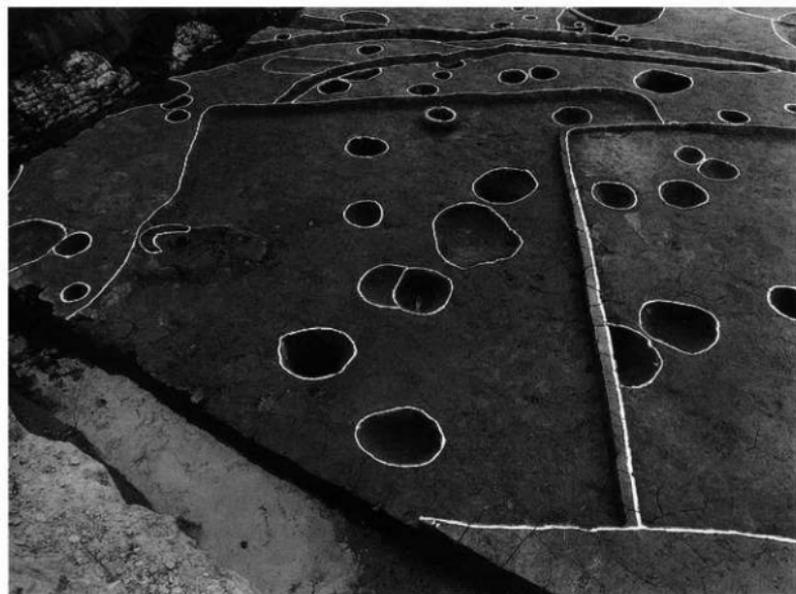
A調査区西側全景（北から）



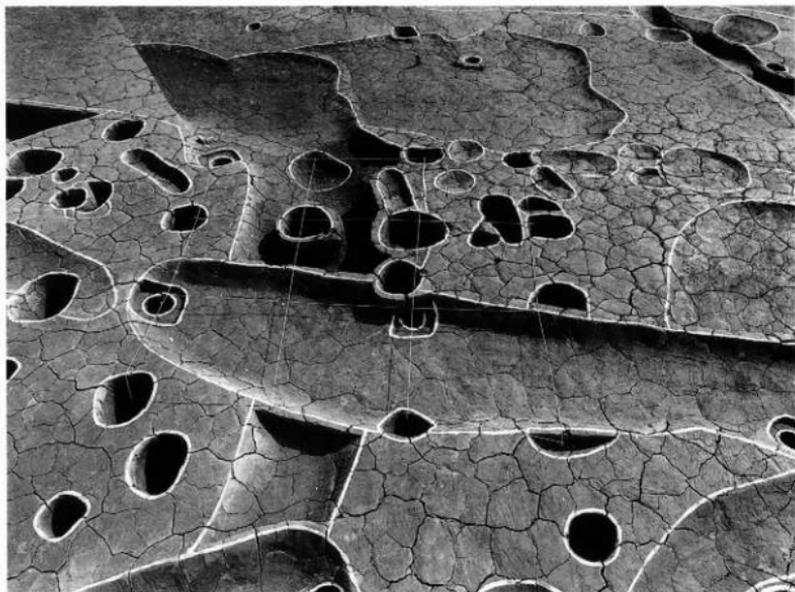
A調査区西側南半部全景（西から）



SB430 (1号竖穴住居跡) 全景 (北東から)



SB1011 (5号竖穴住居跡) 全景 (南西から)



1号掘立柱建物跡（北東から）



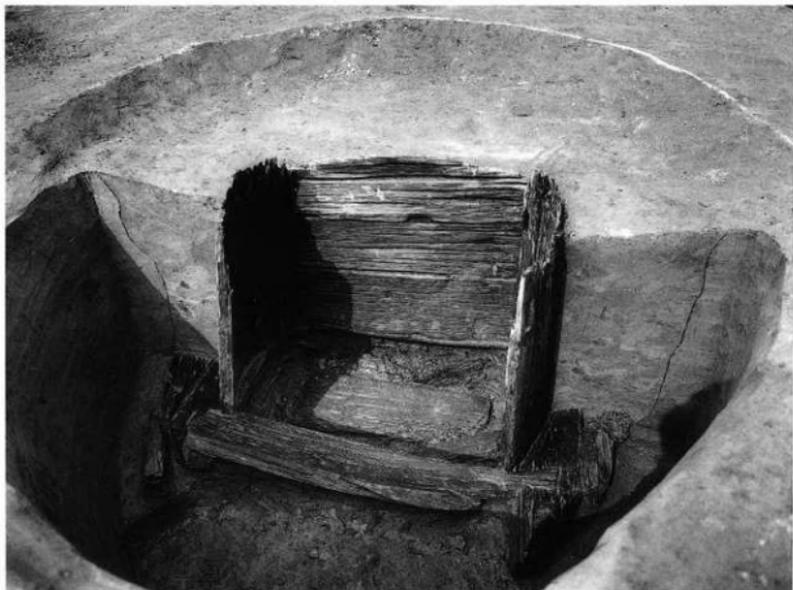
A調査区西側建物集中部（西から）



SE494井戸枠設置状況（東から）



SE494遺物出土状況（東から）



SE1501井戸枠設置状況（南東から）



SE590遺物出土状況（東から）



SE542焼矢部材出土状況（南西から）



SE542遺物出土状況（西から）



SE695井戸枠設置状況 (西から)



SE695遺物出土状況 (西から)



SE1613完掘状況（西から）



SE1613遺物出土状況（西から）



SK940馬全身骨格検出状況（南から）



SK940馬肋骨他細部検出状況（南東から）



SK940頭部、頸部詳細（南から）



SK940全景（上から）



SK940骨盤、後脚詳細（南から）



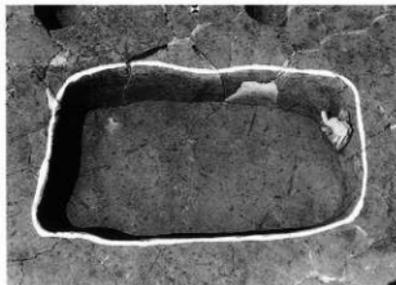
SK940骨格検出状況（北東から）



SK940土層断面（北から）



SK655馬上下顎骨出土状況（東から）



SK1345馬上下顎骨出土状況（東から）



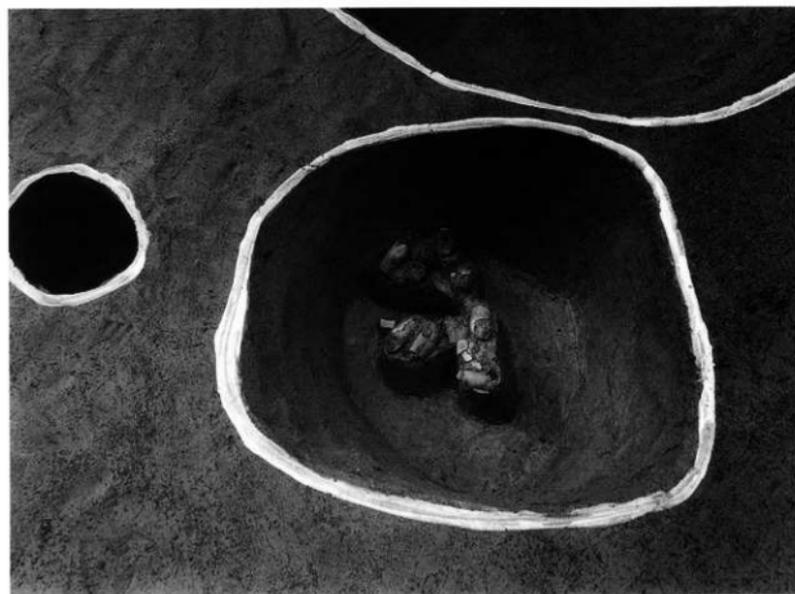
SK1345馬上下顎骨出土状況（南から）



SK940出土馬骨格緊急保存処理工程



SK1135遺物出土状況（南から）



SK1632製塩土器出土状況（東から）



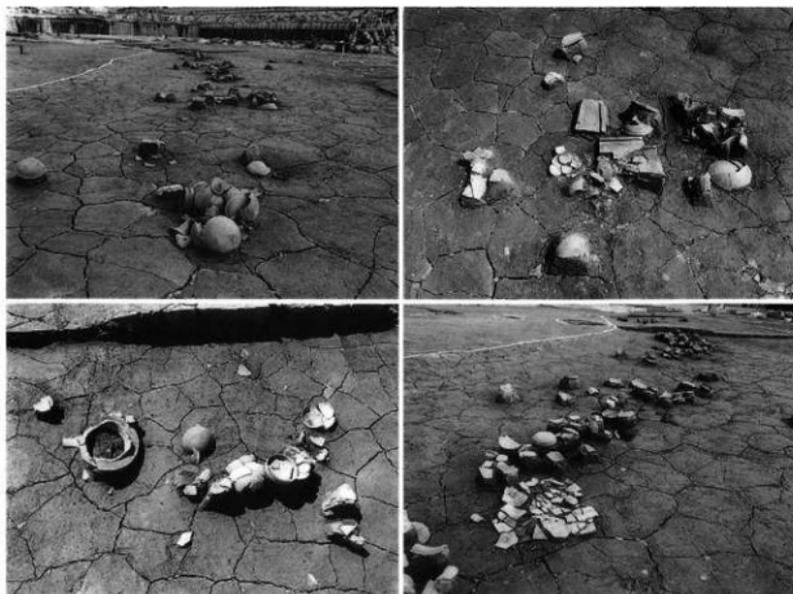
SK1654遺物出土状況（西から）



SD1231遺物出土状況（北東から）



SD950遺物出土状況（北から）



SD950U字形板状土製品他遺物出土状況細部



SE494出土遺物



SE590他出土遺物



SD950上層出土須惠器



SD950上層出土土師器



SD950下層出土遺物



SD1231出土遺物



SK1135 (土坑1) 出土遺物



鳥足文タタキの須恵質甕 (左上下・右下) 蓋形土器 (右上)



U字形板状土製品（第44図-1）表



U字形板状土製品（第44図-1）裏



U字形板状土製品 (第45図-2) 表裏



U字形板状土製品 (第46図-3) 表裏



U字形板状土製品（左から第47図-4・第47図-6・第48図-7）表



U字形板状土製品（左から第48図-7・第47図-6・第47図-4）裏

報 告 書 抄 録

ふりがな	しとみやきたいせきはくつちようさがいよう・いち
書 名	部屋北遺跡発掘調査概要・I
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	山上 弘、小林義孝、宮崎泰史、鶴山まり、竹原弘展
編 集 機 関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所 在 地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2004年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
しとみやきたいせき 部屋北遺跡	しじょうなわてし 四條畷市 しとみや・すな 部屋・砂	27229	7 (51)	34° 44′ 29″	135° 37′ 48″	平成13年5月25日から 平成15年3月29日	5400㎡	なわて水環境 保全センター 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
部屋北遺跡	集落跡・生 産域	古墳時代	馬埴納土坑、 住居跡、溝、 土坑	陶質土器、韓式系土器、 製塩土器、移動式かま ど、U字形板状土製品な ど	朝鮮半島からの移住 民の存在を予想させ る遺物と、馬飼の存 在を推定させうる遺 構と遺物

部屋北遺跡発掘調査概要・I

発行日 2004年3月31日

発 行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪府中央区大手前2丁目

TEL.06-6941-0351

印 刷 大蔵印刷工業株式会社

〒583-0857

羽曳野市誉田3-22-21

TEL.0729-58-3344

